

334

247



始



三十一
五
支



洋式帳簿及諸印刷業
和洋紙類並内外文房具商

建 信 社
瀨 味 建 二 商 店

電話京橋二七七番
東京市京橋區柳町四番地

靴と鞆はアキラに限り



銀座三丁目
アキラ商店
電話一三二八番

京橋繁昌記

(一名京橋區沿革史)

目次

挿
繪

▲維新前の京橋區地圖

▲京橋區役所と區長及び各掛長

▲警察署長と稅務署長、郵便局長、在郷軍人京橋分會長及副會長

▲京橋區選出名譽職

▲京橋名所

京橋 京橋稅務署 農商務省 舊居留地 銀座通 京橋郵便局 逓信省 立教大學 歌舞伎座 海軍參考館 西本願寺別院
佃の渡し 新富座 施療病院 永代橋 月島蒸氣渡し 新橋附近 京橋電話局 其他

▲京橋區市立小學校及び各校長と主席訓導

▲京橋美人

大正
1.2.6
丙寅

記事

▲總

說.....一頁

▲沿

地 廣袤 地勢 地質.....四

▲區

勢.....七

▲名

譽.....一〇

▲團

體.....一一

▲市

街.....二〇

▲交

通.....五六

▲官廳公衙

區役所 郵便局と電話局 警察署 稅務署 遞信省と農商務省 商品陳列館 專賣局煙草製造所 公使館 海軍造兵廠.....六八

▲小學校附幼稚園、圖書館

南橫町小學校 實田小學校 泰明小學校 京橋尋常學校 京橋高等學校 明石小學校 鐵砲洲小學校 築地小學校 京橋小學校 越前堀小學校 蘆岸島小學校 月島小學校 月島第二小學校 文海小學校 佃島小學校 築地女子小學校 (以上市立學校) 簡易圖書館 幼稚園 (三校).....七一

▲各種學校

海軍大學校 海軍經理學校 海軍々醫學校 立教大學校 立教中學校 府立工藝學校 工手學校 築地英語學校 明治工學校 野口裁縫女學校 豊國學校 福音會英語學校 立教高等女學校 盲人技術學校 中央商業學校 啓蒙學校 女子實業補習學校 實業補習夜學校 三一神學校 志成學校 京橋區夜學校 東京電話交換手養成所.....七八

▲衛生設備

氣候風土 公設機關 病院 醫師氏名 藥劑師 京橋醫師會 其他の機關.....八八

▲實業機關

銀行と會社 工場 組合 市場 勸業場 與信所.....九三

▲新聞雜誌及通信

.....九五

▲神社佛閣

.....一〇〇

▲名所舊跡

.....一一二

▲墓碑一覽

.....一一三

▲割烹及飲食

.....一一五

▲遊藝娛樂

劇場 寄席 活動寫眞 俳優 新橋藝妓 待合及遊船宿 貸席.....一二七

▲京橋名物

.....一二七

▲評判記

▲職業之其住所人名一覽(職業別イロハ順)

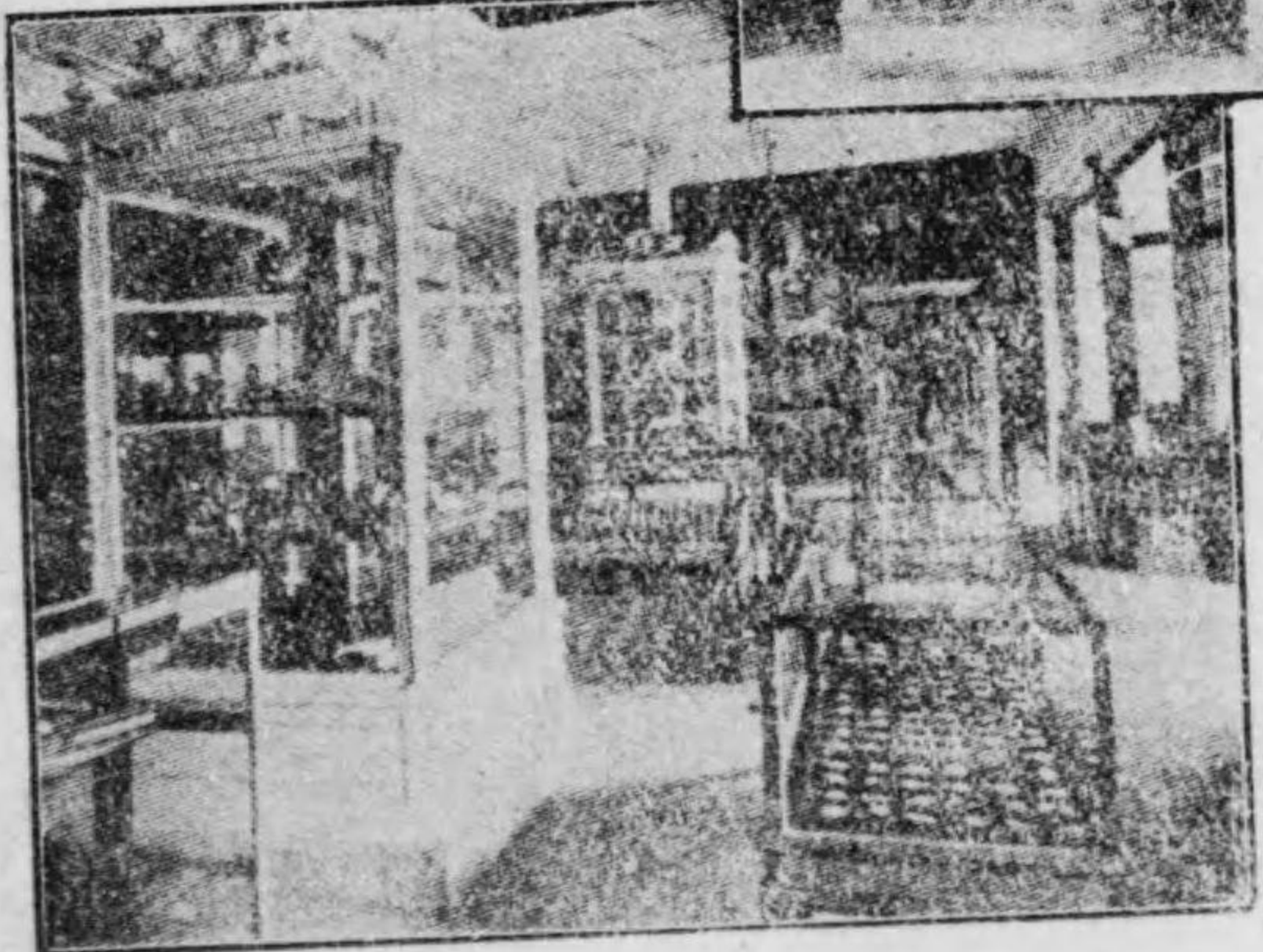
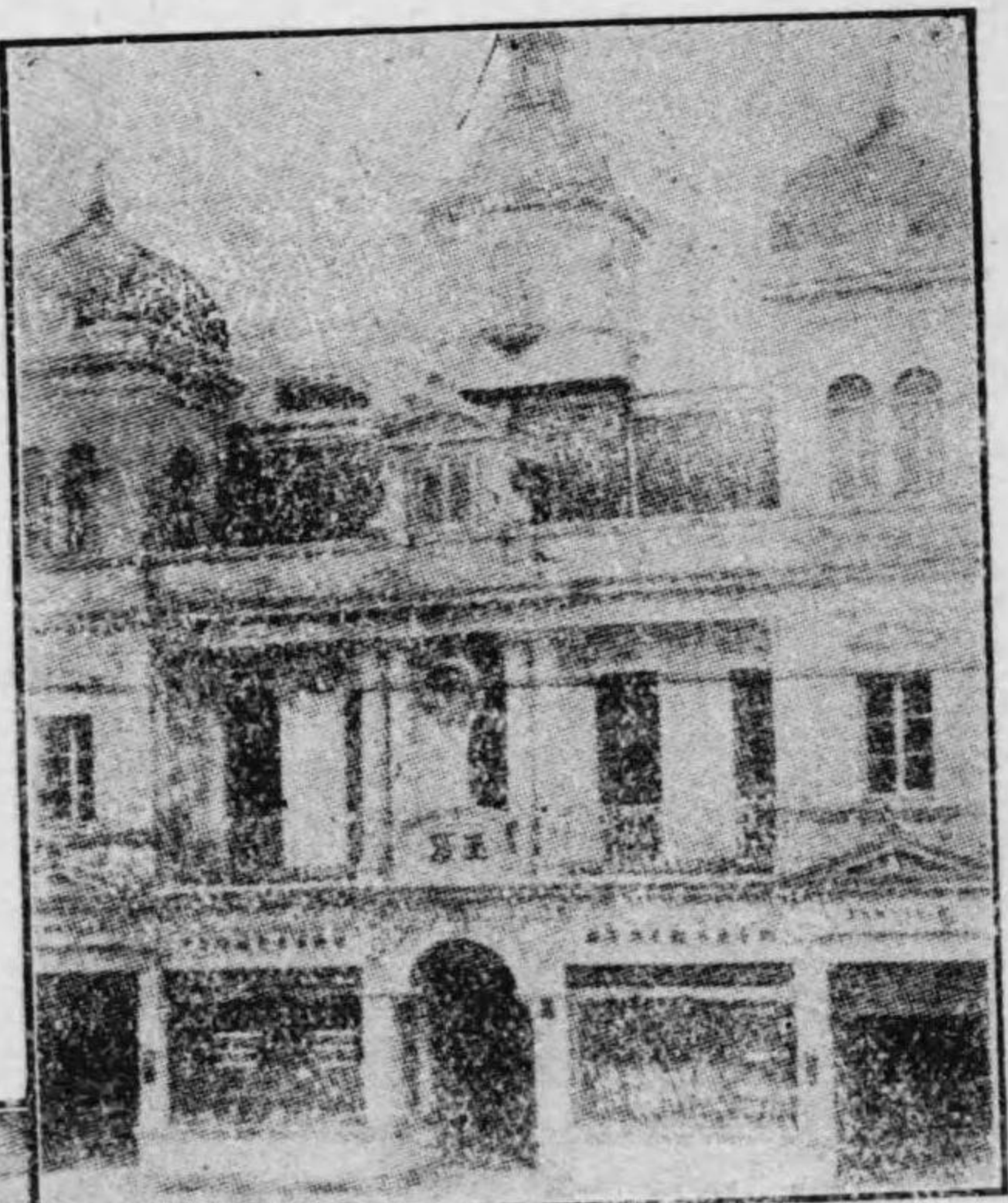
- ▲醫師 ▲印刷業 ▲系商附系組物商 ▲蠟燭商 ▲履物商 ▲箱類製造販賣業 ▲牛襟商 ▲刷毛商 ▲馬具商 ▲製業
 ▲屠商 ▲貿易商 ▲ホタン商 ▲帽子商 ▲辯護士 ▲辨當仕出業 ▲米穀商 ▲時計商 ▲特許代理業 ▲陶磁器商
 ▲桐油商 ▲刀劍商 ▲藤細工商 ▲茶商 ▲提灯商 ▲帳簿商 ▲調帶商 ▲料理店 ▲理髮店 ▲兩替商 ▲旅人宿及
 下宿業 ▲塗物商 ▲綿商 ▲會社 ▲金物商 ▲菓子商 ▲海事業 ▲鍛冶屋業 ▲和洋家具商 ▲海產物商 ▲乾物商
 ▲硝子商 ▲鰻商 ▲樂器商 ▲革及革具商 ▲髭及鬚商 ▲玩具商 ▲雜詰商 ▲鋸職 ▲看護婦及產婆 ▲傘製造販賣
 商 ▲活動寫真機補商 ▲貸本業 ▲唐木細工商 ▲果物商 ▲顔面看板師 ▲紙商 ▲洋品商 ▲洋酒食料品商 ▲寄席
 ▲用達業 ▲洋服商 ▲タイプライター販賣商 ▲畳表商 ▲疊職 ▲竹商 ▲竹皮商 ▲代書業 ▲足袋商 ▲軍筒商
 ▲煙草商 ▲建具指物商 ▲大工職 ▲染物業 ▲造船業 ▲葬儀社 ▲算盤商 ▲倉庫業 ▲蕎麥商 ▲通信業 ▲漬物
 及佃煮商 ▲釣道具商 ▲ラムネ製造業 ▲上繪縫箔師 ▲團扇商 ▲魚商 ▲調負業 ▲運送業 ▲藥商 ▲靴商 ▲宿
 車業 ▲待合 ▲毛織物商 ▲建築材料商 ▲化粧品商 ▲藝妓家 ▲船具商 ▲武術教授 ▲風呂製造販賣 ▲鉄商 ▲
 袋物商 ▲蒲團商 ▲佛具商 ▲免服織物商 ▲廣告業 ▲小間物商 ▲古物商 ▲古着商 ▲鑽業 ▲工事時計業 ▲行
 李商 ▲公證人役場 ▲コロップ商 ▲氷商 ▲繪畫及繪業書商 ▲畫師 ▲易者 ▲電氣業 ▲荒物商 ▲書物商 ▲鉛
 商 ▲麻、麻子、麻糸商 ▲空樽商 ▲空壺商 ▲空罐商 ▲油商 ▲砂糖商 ▲裁縫業 ▲左官職 ▲産婆 ▲材木商
 ▲雜貨商 ▲酒商 ▲酒道具商 ▲金庫商 ▲牛乳商 ▲貴金屬美術品製作販賣商 ▲銀行 ▲銀行及會社員 ▲器補商
 ▲煙管商 ▲遊藝師 ▲遊藝場 ▲眼鏡商 ▲鎖金業 ▲味噌商 ▲紹介業 ▲寫真師及寫真銅版製造 ▲寫真機補商
 ▲車輛、乳母車、自動車自轉車製造販賣 ▲集會所 ▲新聞雜誌社 ▲新聞雜誌賣捌店 ▲汁粉店 ▲數物商 ▲銃砲火藥
 店 ▲襯衣商 ▲鍼灸醫 ▲食器商 ▲寫字製圖業 ▲食酢商 ▲書籍商 ▲薪炭商 ▲獸肉商 ▲劇場 ▲劇場附圖案
 内所及び茶屋 ▲醬油商 ▲紳士紳商 ▲表具師 ▲挽物師 ▲肥料商 ▲買商 ▲洗濯業 ▲石炭及コーラス商 ▲製本
 業 ▲石材商 ▲炭商

時計眼鏡

貴金屬裝身具

測量製圖氣象

觀測用器械



東京銀座三丁目
 合名會社 玉屋商店

電話京橋 長三三〇〇五番
 振替口座 東京四四八八番

時計、眼鏡、貴金屬裝身具類ノ商品目
 録ハ御申越次第郵送可仕候。
 器械類ノ目錄ハ大正元年版ヲ出版
 仕リ候。

十一月一日より

七五三祝大賣出し

御祝衣新柄日々差換へ陳列仕候

大見切

均一品

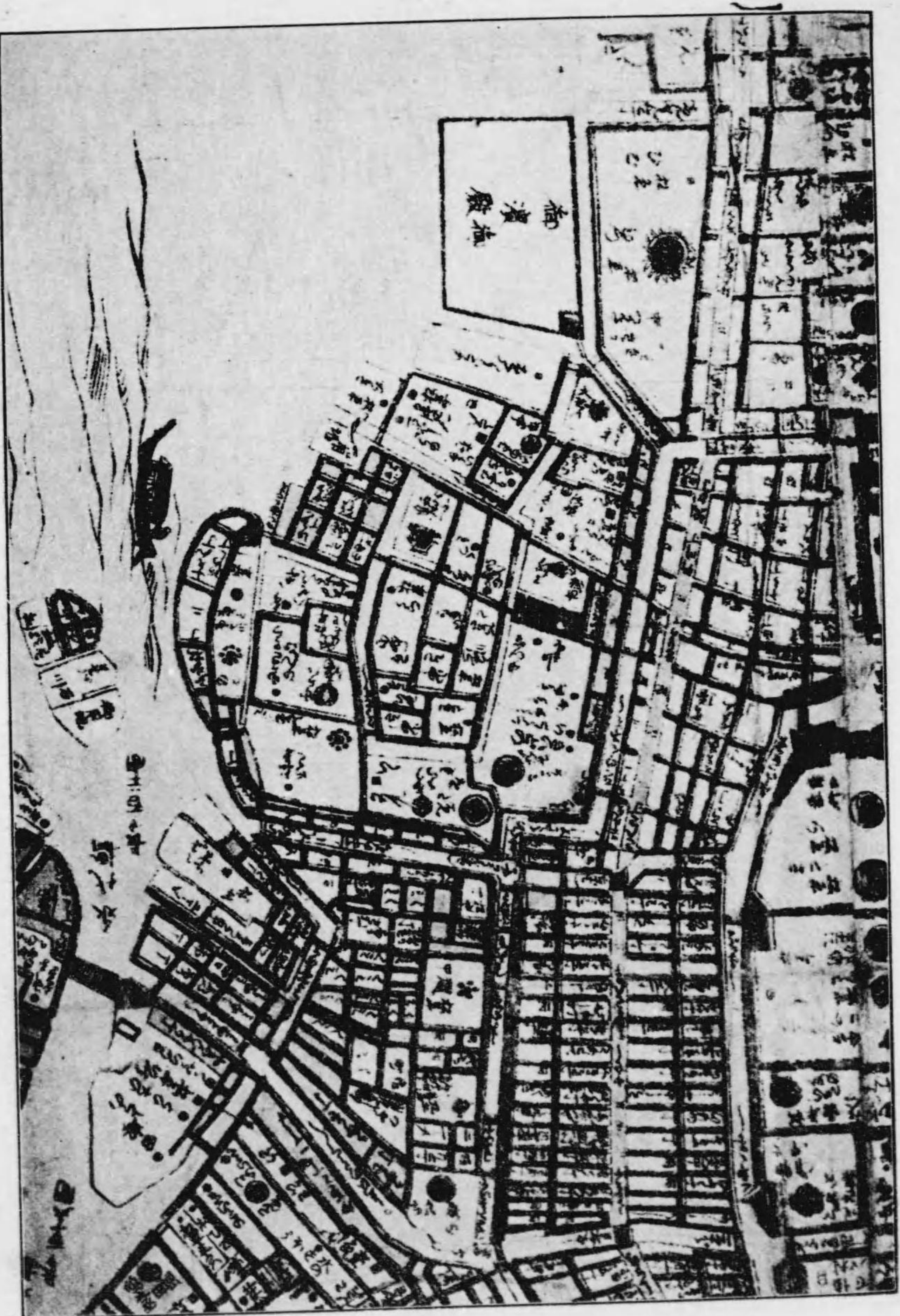
シヨール
毛布
膝掛
メリヤス類

よせ切見切反物澤山

拾圓以上御買上の方
には反物一反進呈

銀座

三上呉服店



維新前の京橋附近地圖(文政年間)



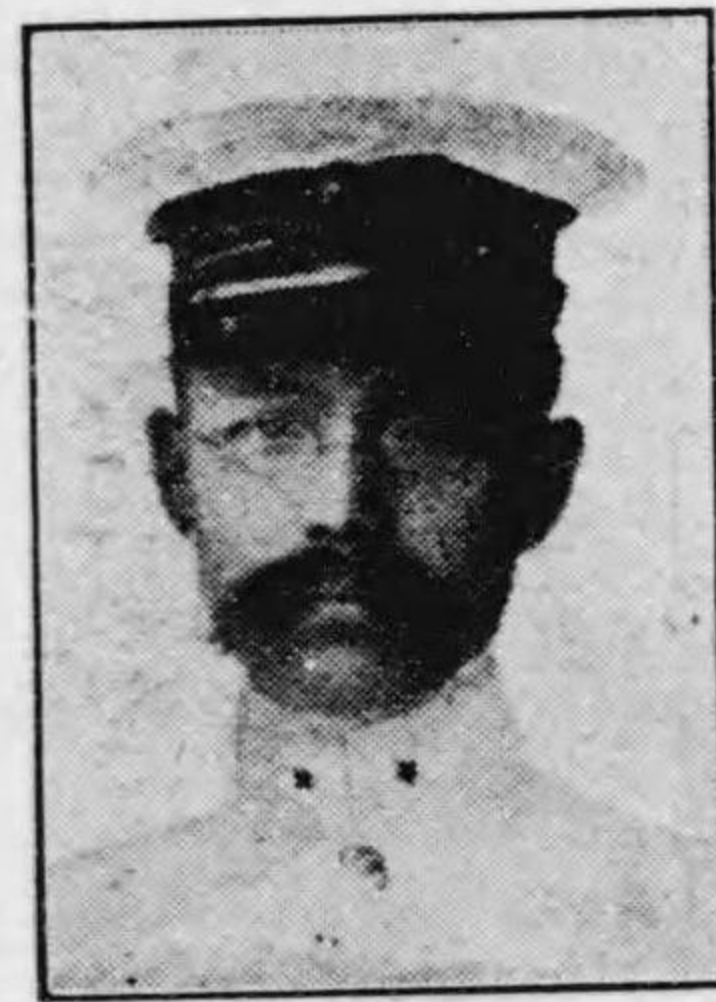
高島德右衛門君
市區會議員



辰澤延次郎君
市區會議員



秦源祐君
區會議長



小林一男君
東京東小水上警察署長



武東晴一君
築地警察署長



松尾清次郎君
區會議員



島村藤七君
區會議員

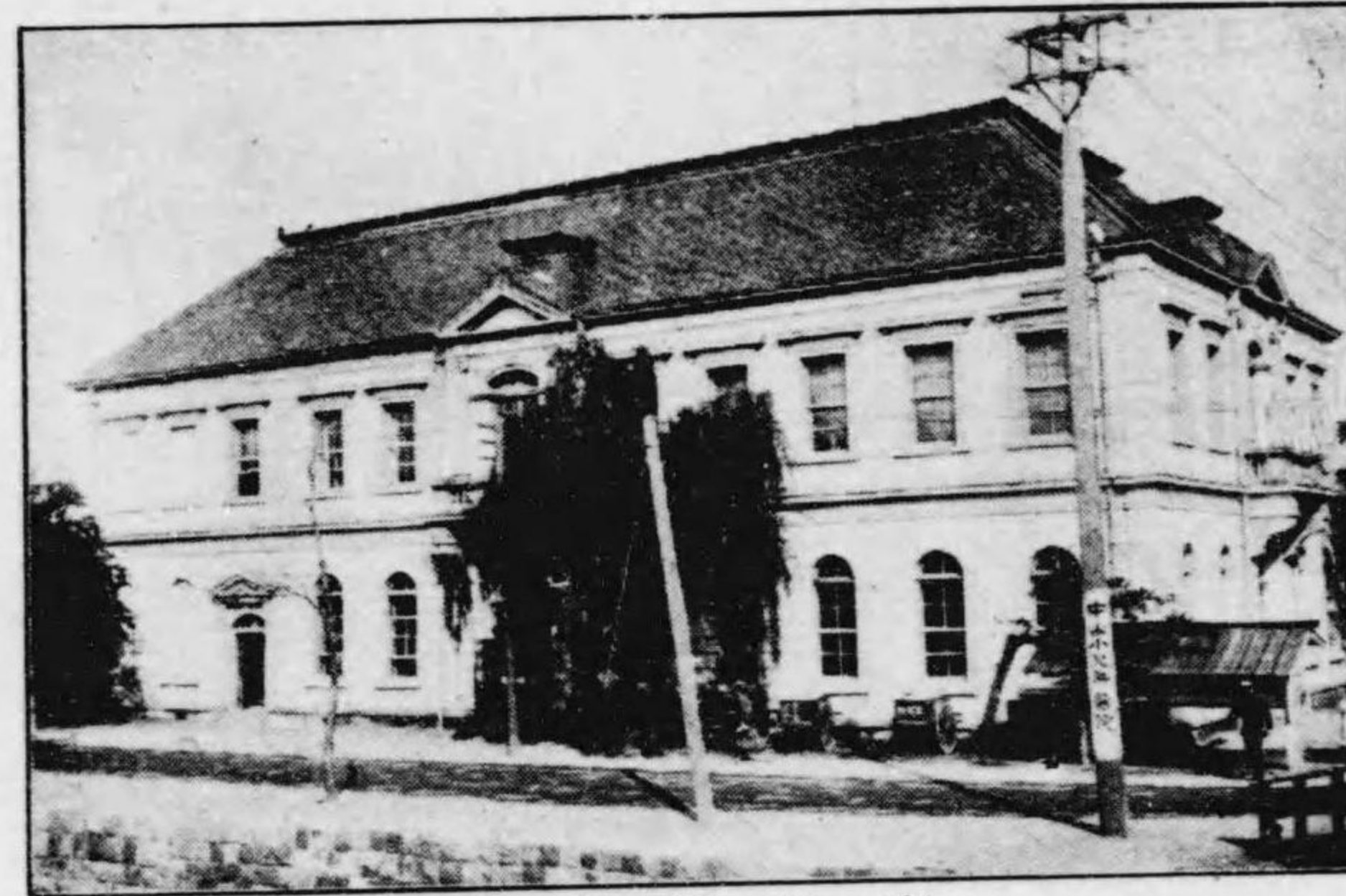


柴田幸三郎君
區會議員

庶務掛長
國枝捨次郎氏



京橋區長
藤原和吉氏

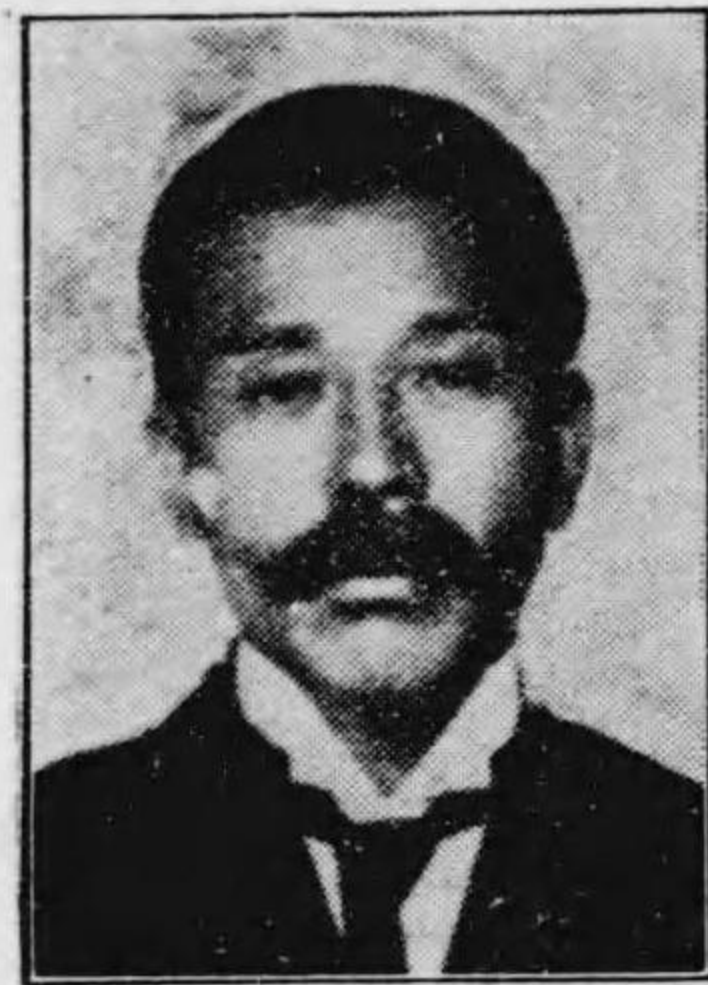


京橋區役所

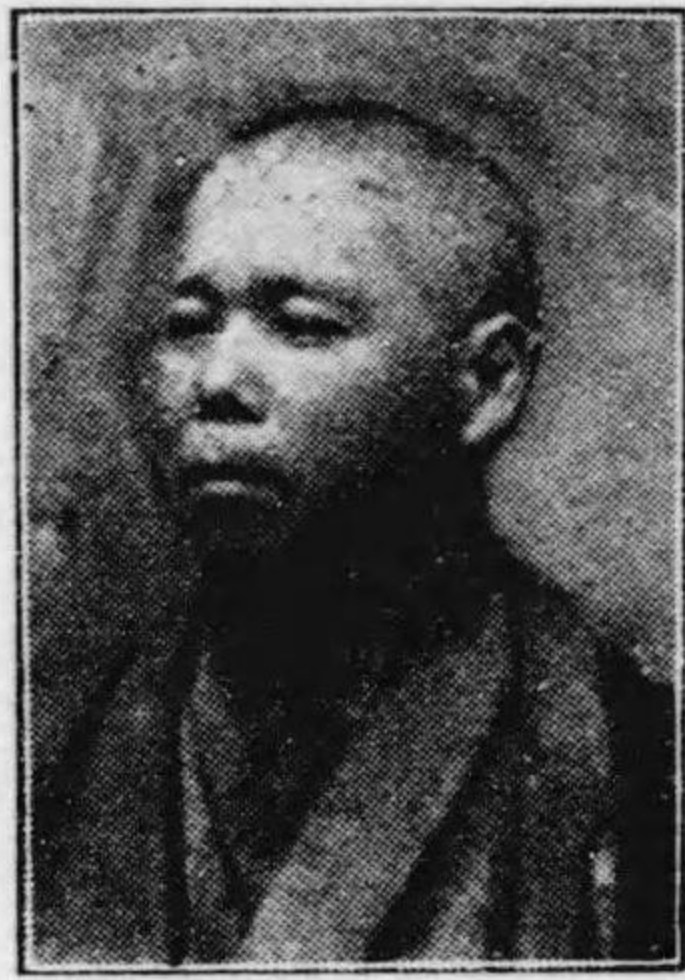
佛坂安文氏 中善七氏 西善七氏 會計掛長 寺田寬之丞氏 衛生掛長



名和耕藏氏 水道掛長 加藤賢道氏 兵事掛長 河內彌太郎氏 戶籍掛長



員議會區府
君吾純藤加



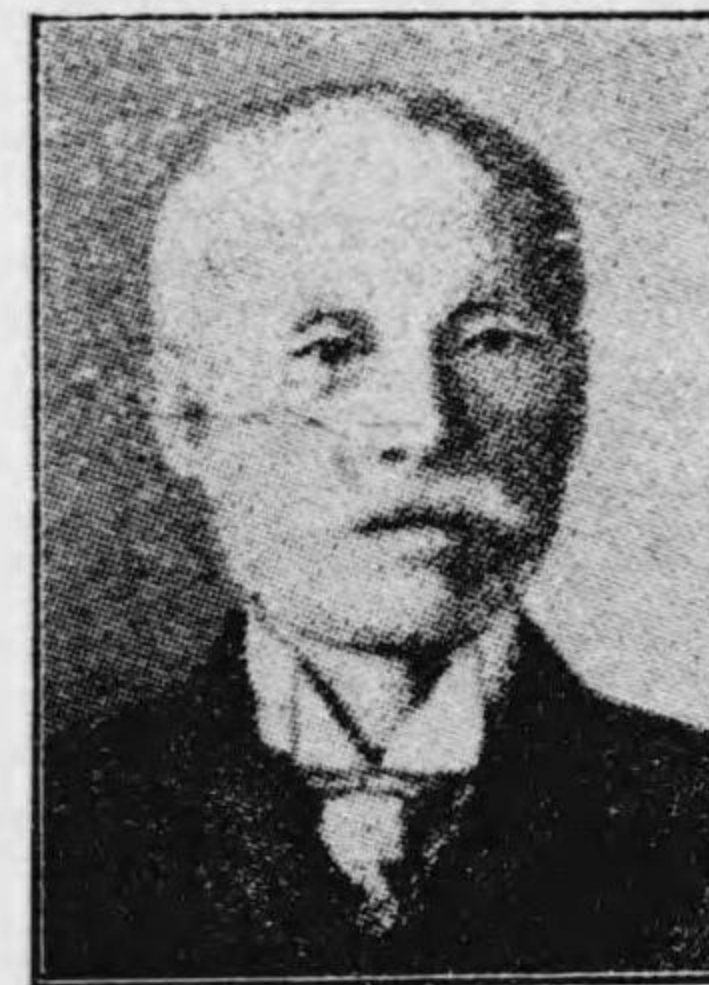
員議會府
君吉新尾瀬



員議會區市
君郎吾朝賢後尾



員議會區市
君郎三瀧田袴



員議會區府
君雄彦田内



員議會市府
君泰井酒



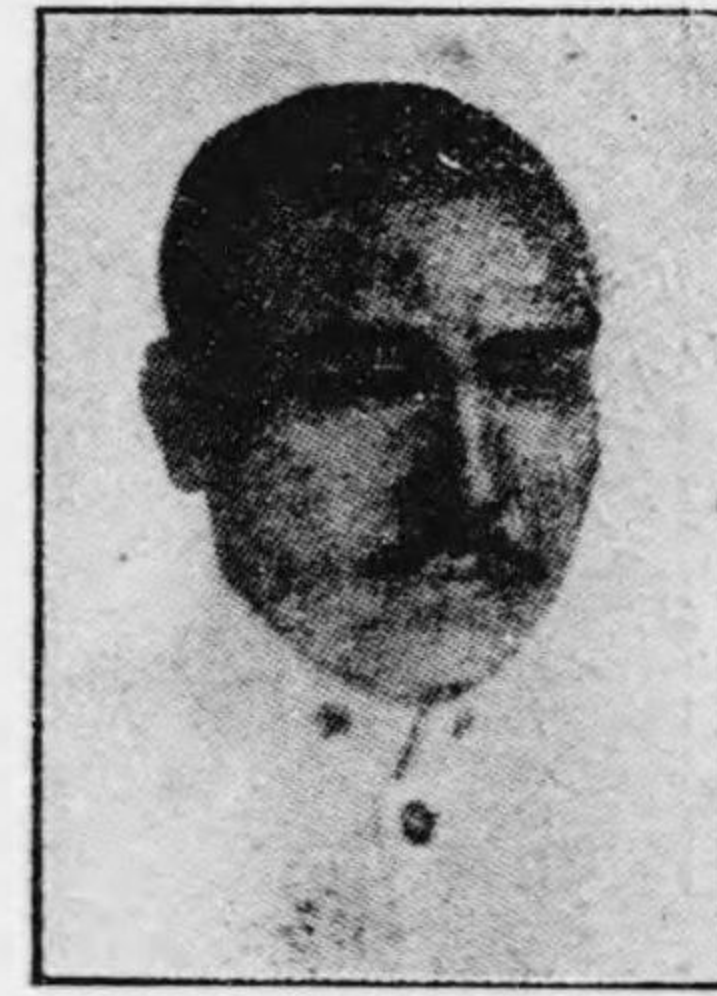
長署察警島巖
君郎太作藤加



長署察警石明
君義忠島木



長署察警堀間十三
君一文田吉



長署察警橋京
君實兼田前



員議會區
君衛兵利野吉



員議會區
君郎次龜田太



員議會區
君郎太増井日春



員議會區
君衛兵安東伊



員議會區
君助之善田山



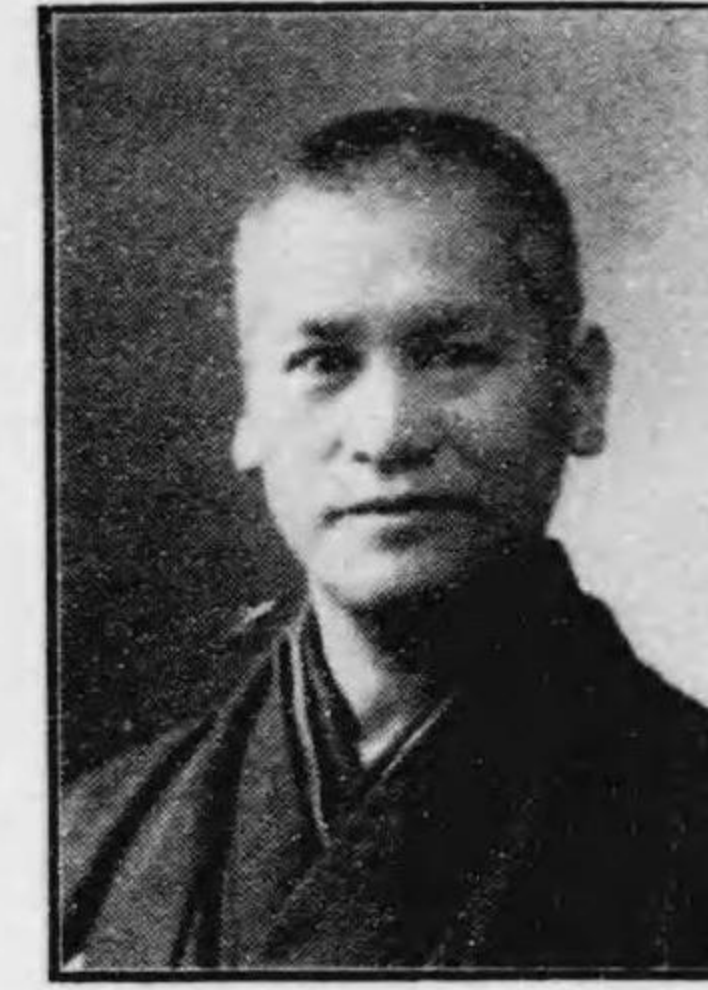
員議會區
君郎五金田柴



員委查調税得所
君郎次幸田吉



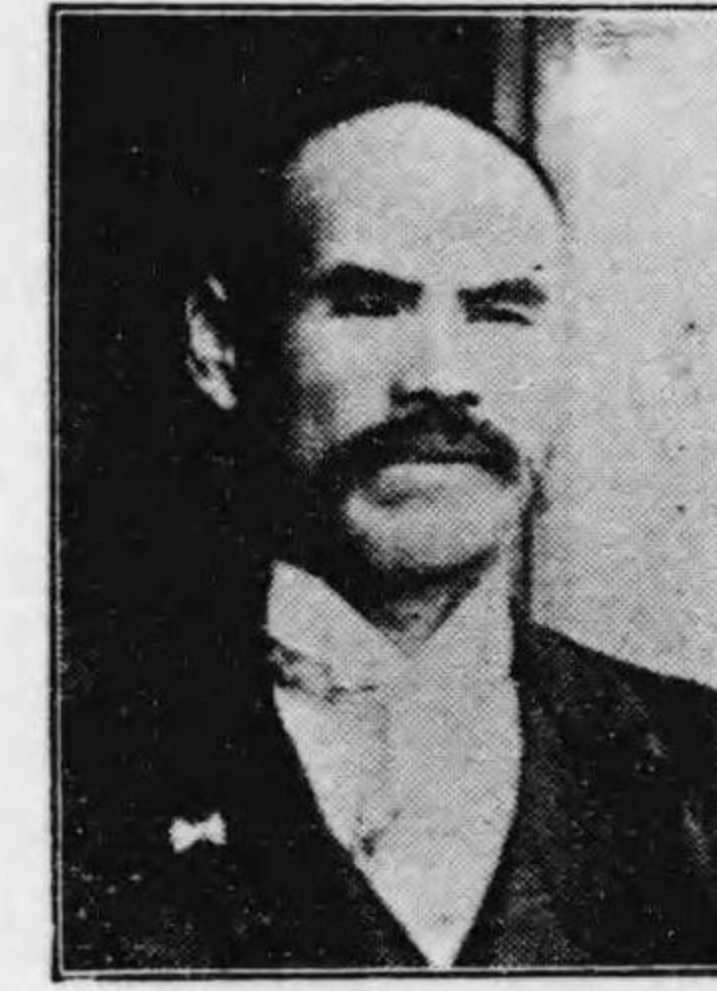
員委查調税得所
君門衛右長川松



員議會區
君門衛左五村大



長署務税橋京
君夫利川西



長署察警島月
君郎太壽瀬廣



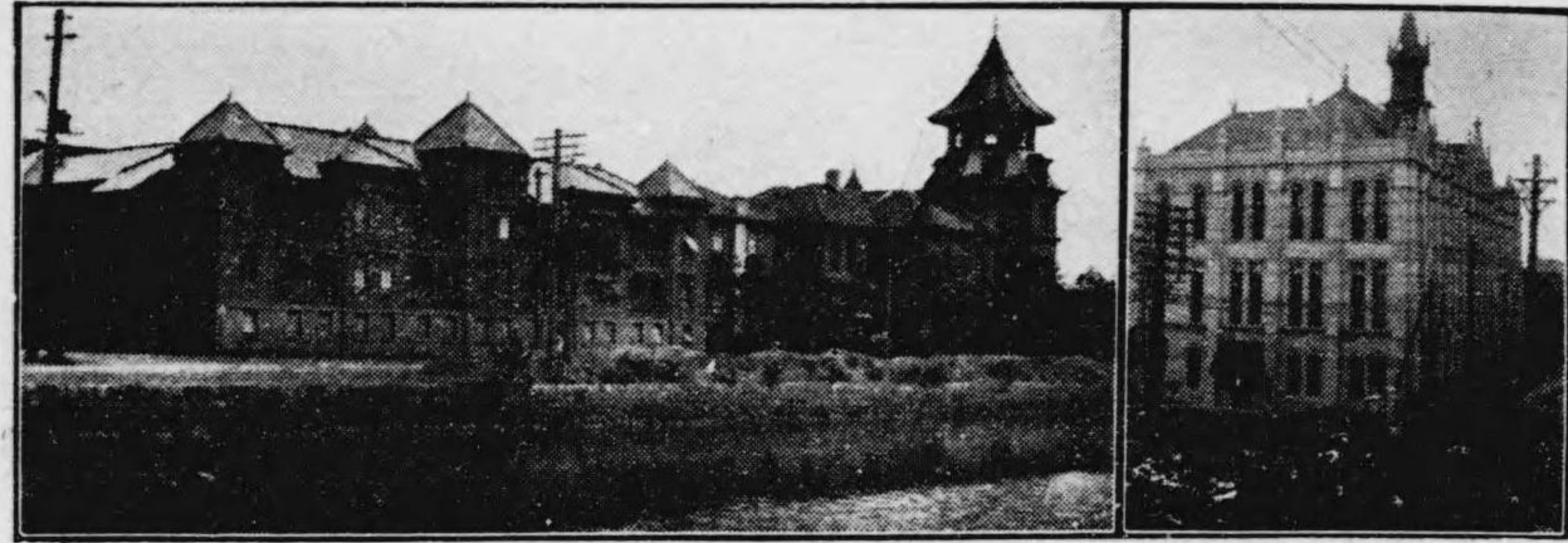
長副會分橋京人軍郷在
君郎次仲 關



長會分橋京人軍郷在
君芬澤 黒



長局便郵橋京
君雄充岡武



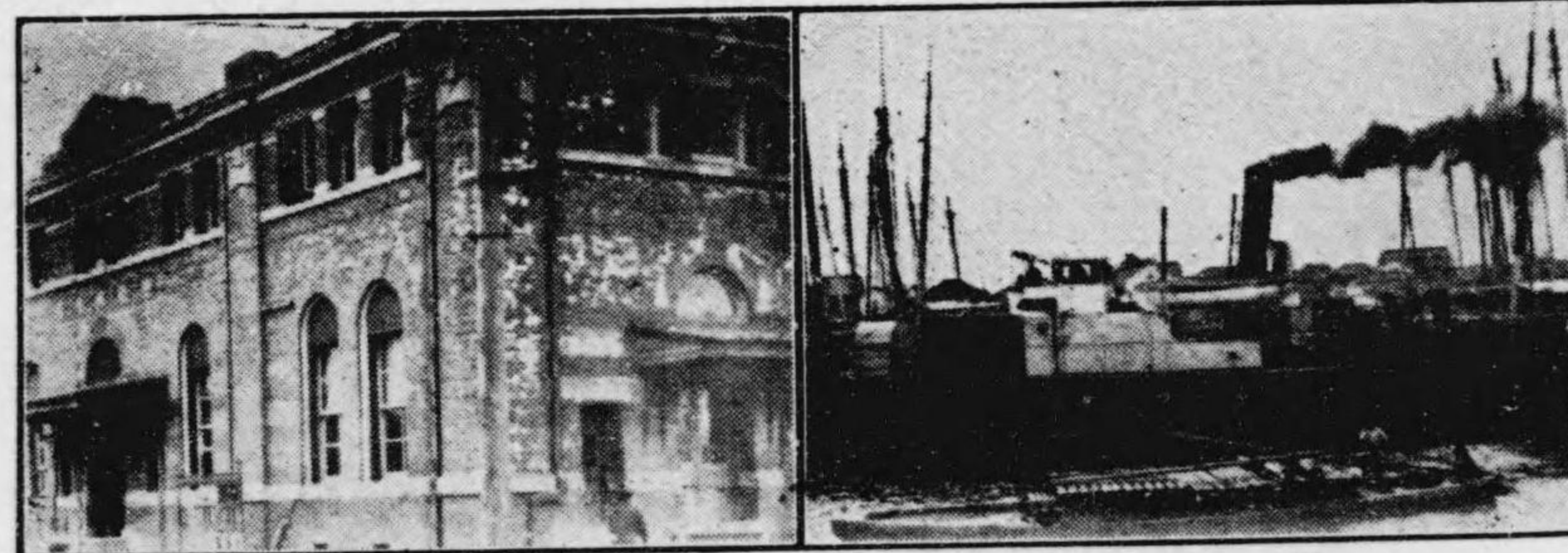
學大教立

局話電橋京



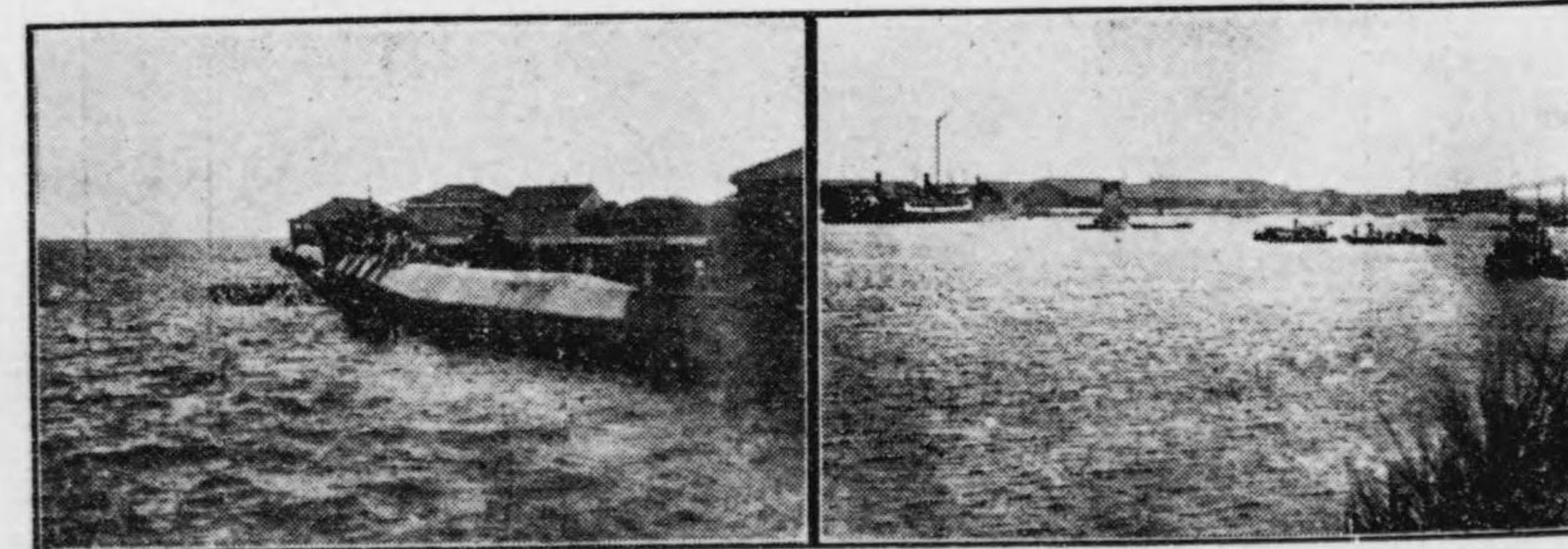
し渡の佃

し渡汽蒸島月



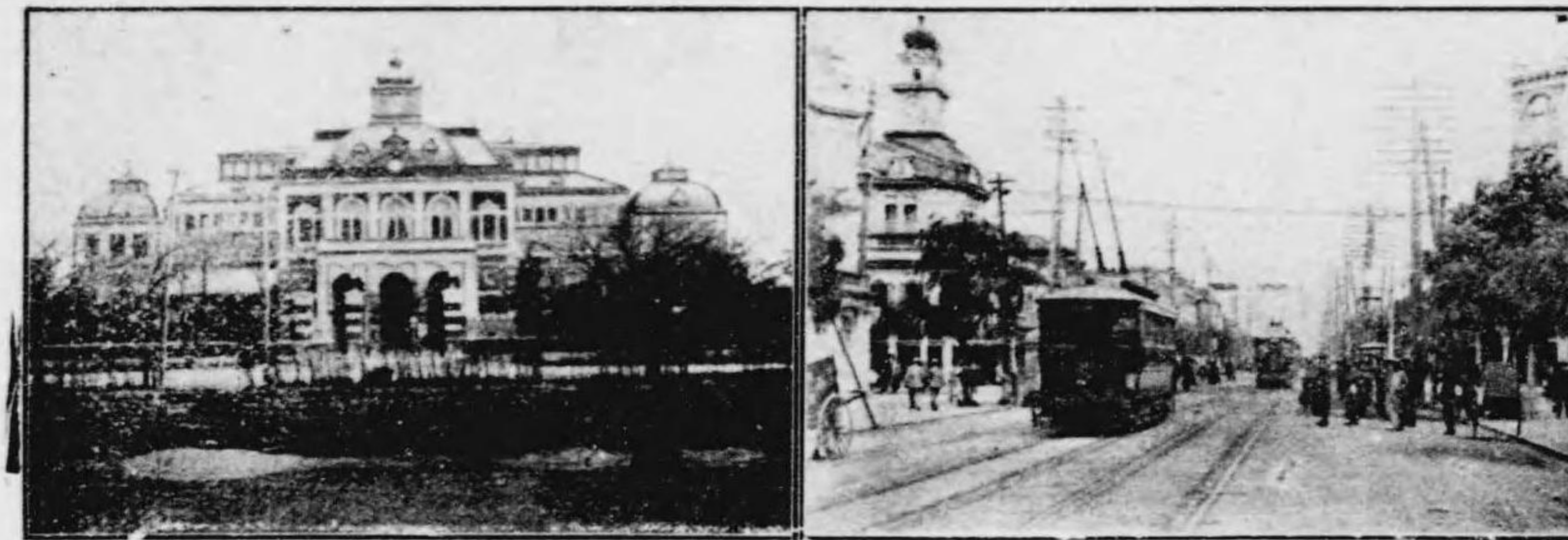
局便郵橋京

島巖靈



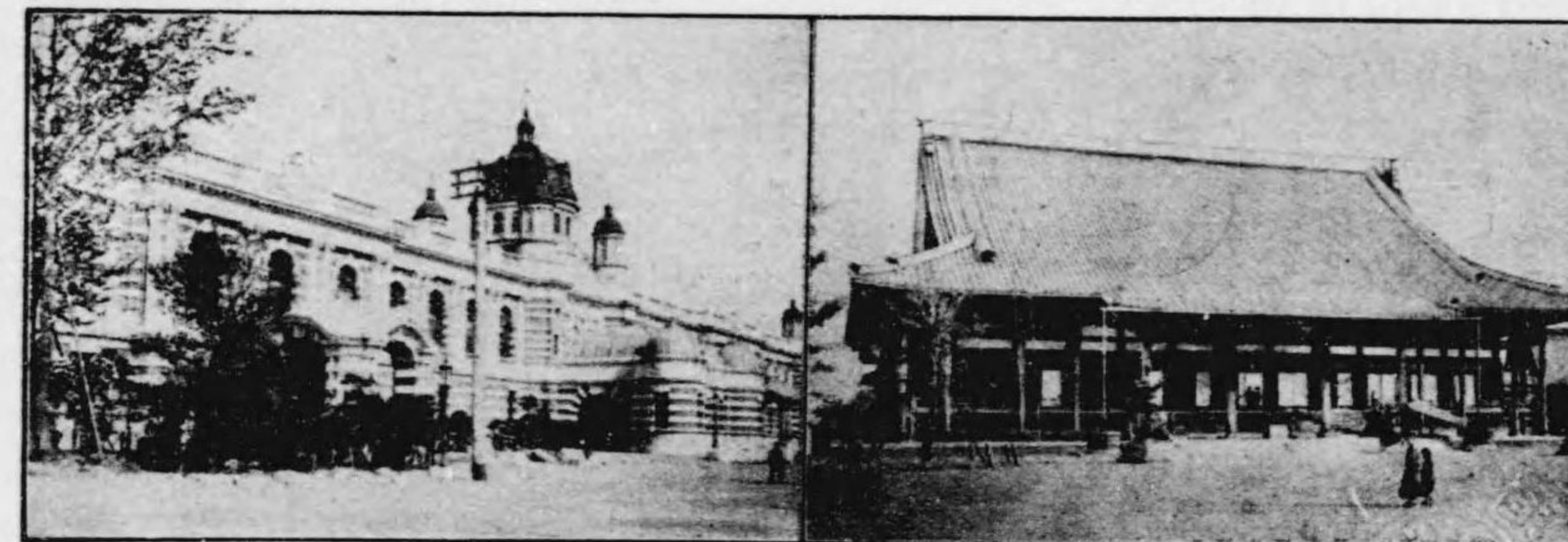
場泳水會育教區橋京

岸海地築



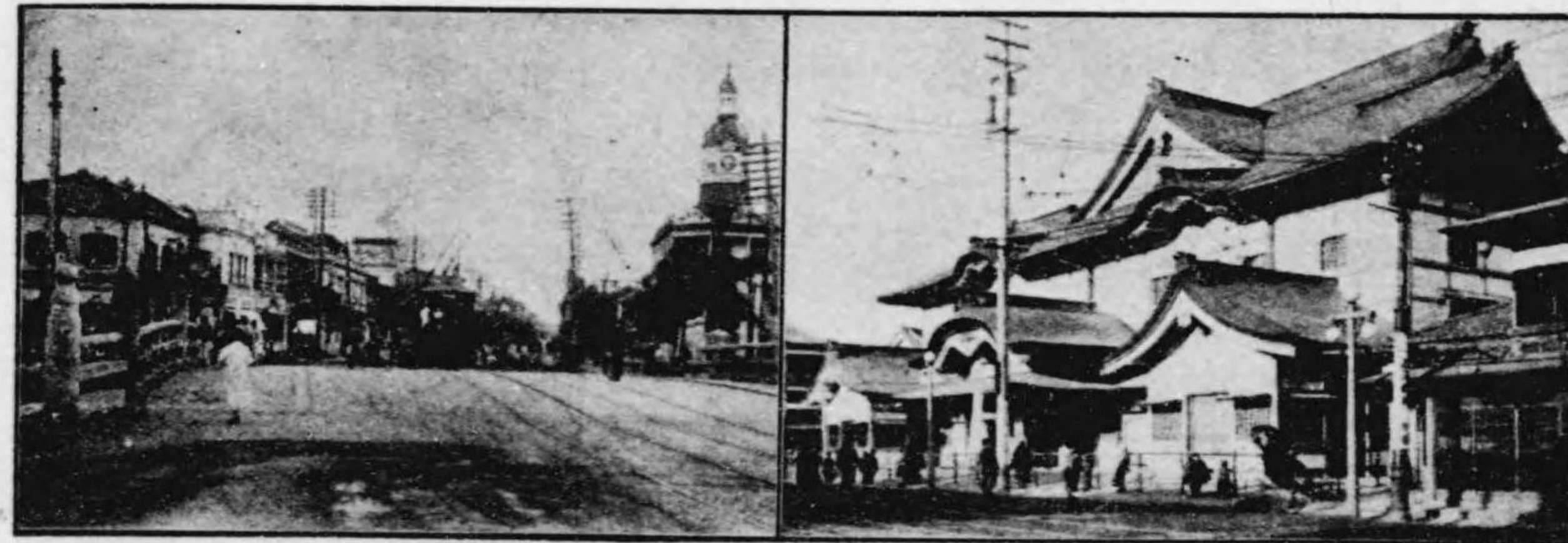
館考參軍海

り通座銀



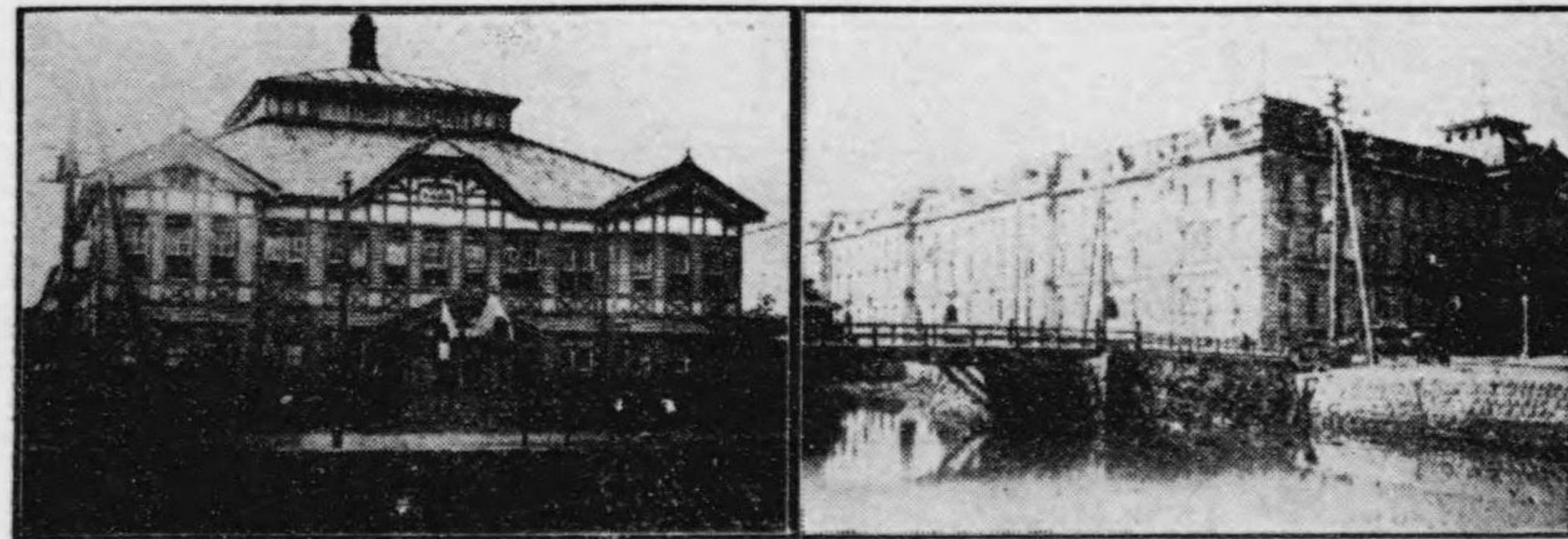
省信遞

院別地築寺額本



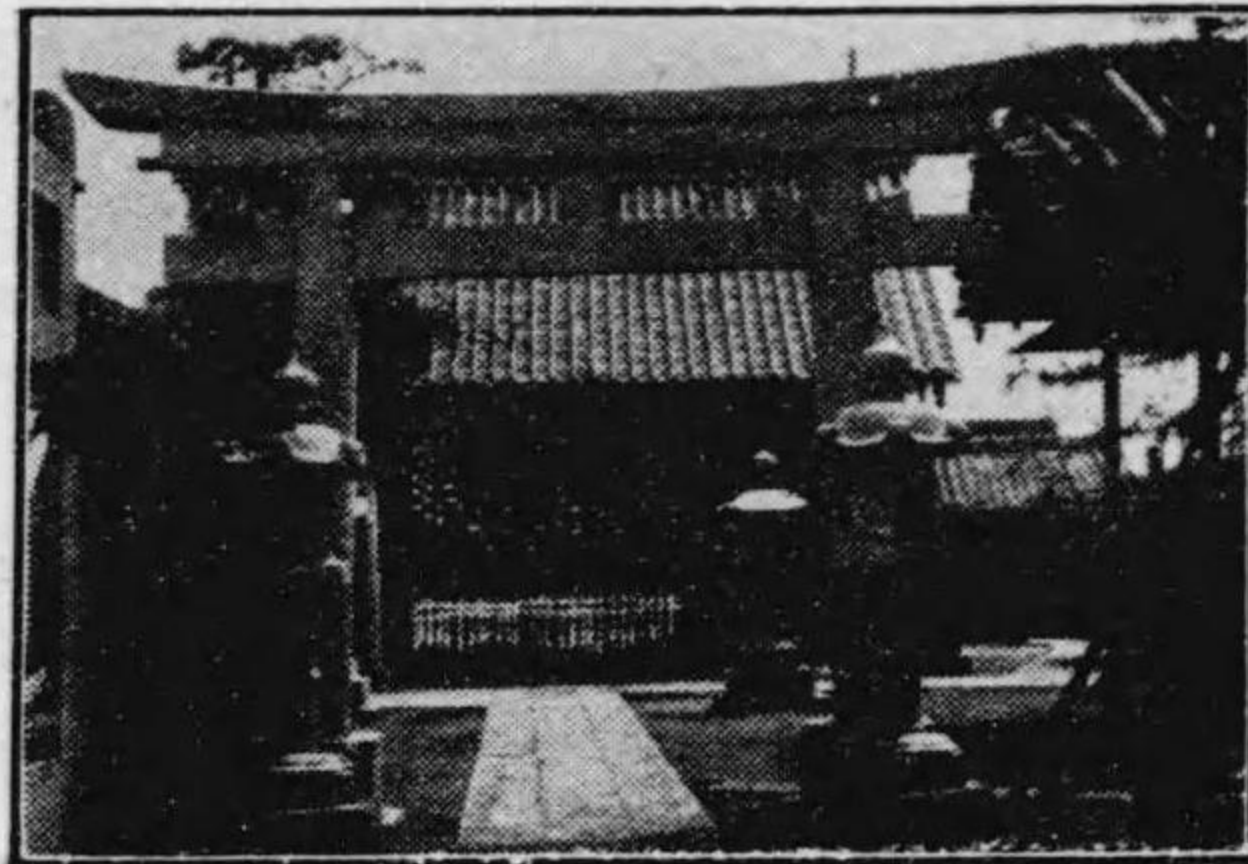
橋京

座伎舞歌

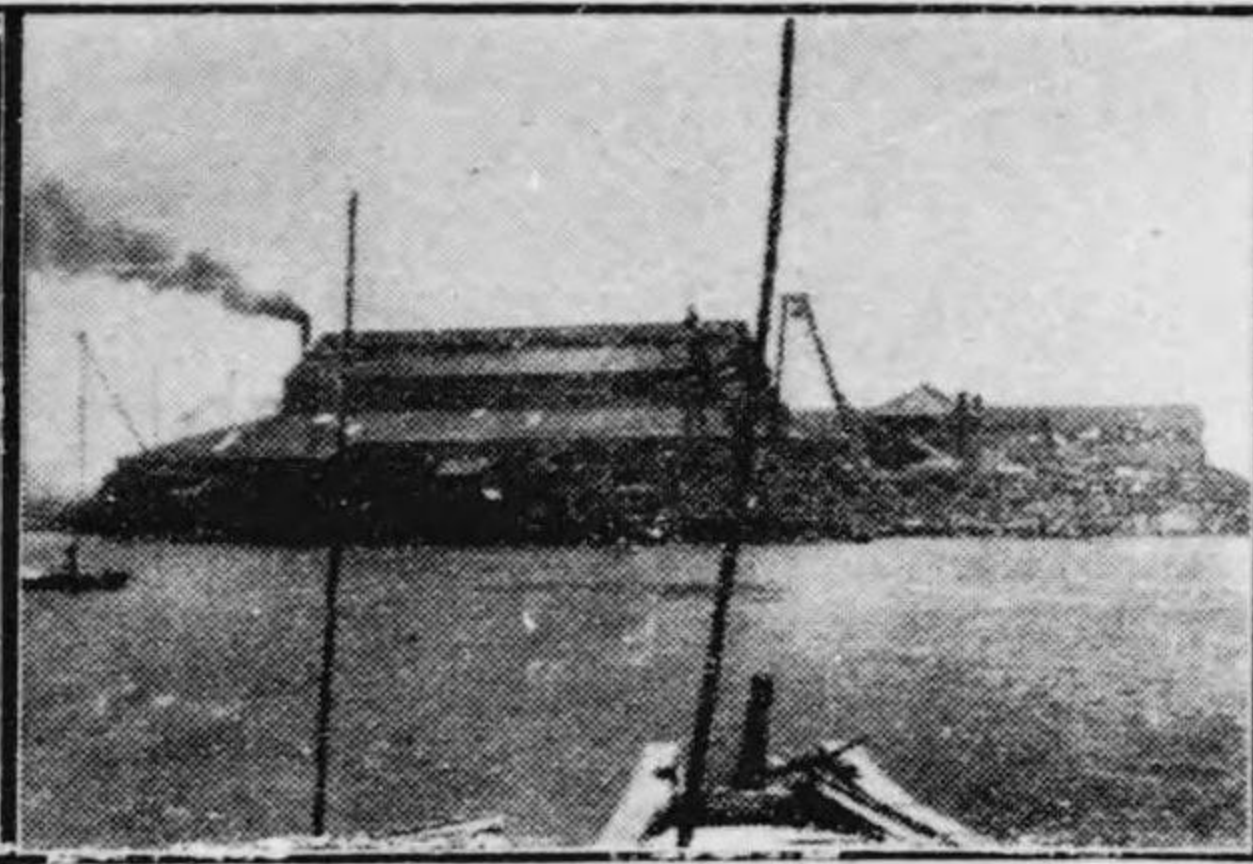


院病療施立市京東

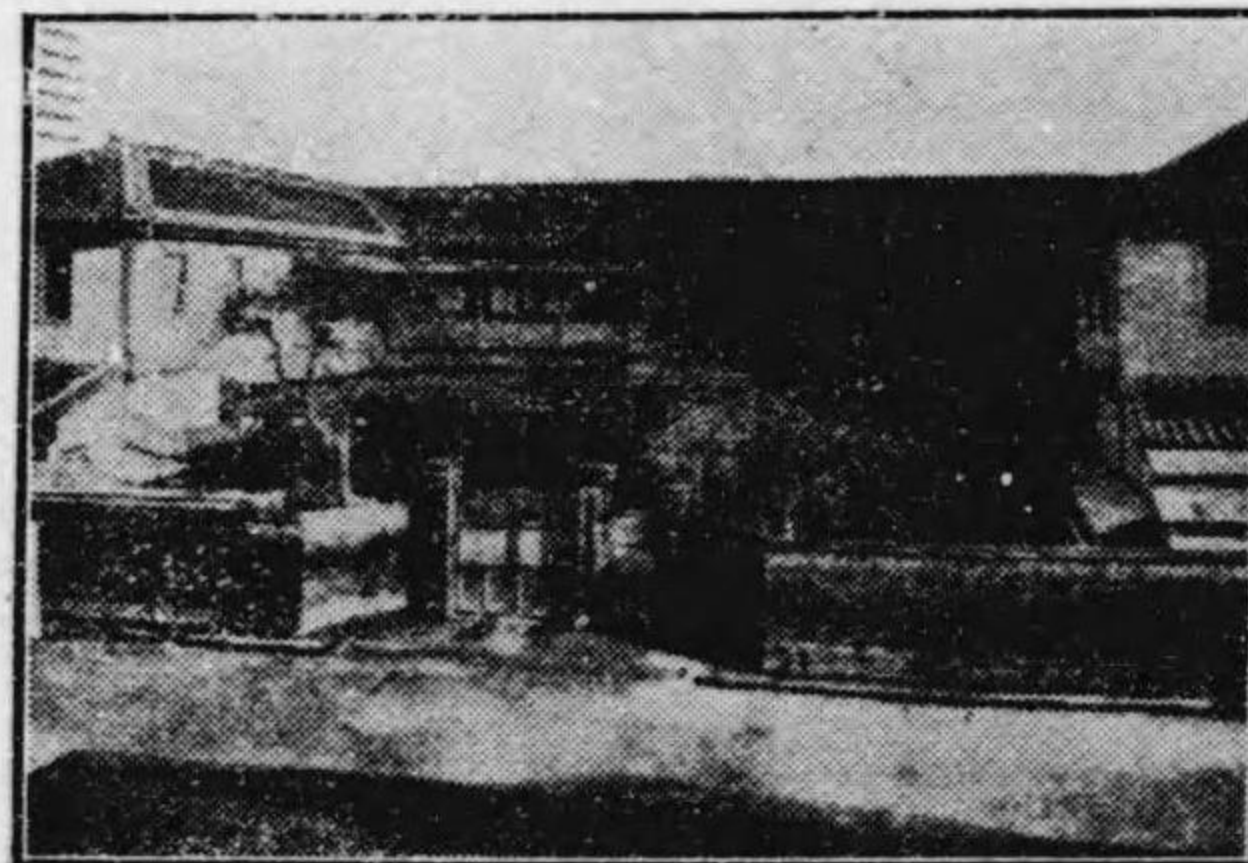
省務商農



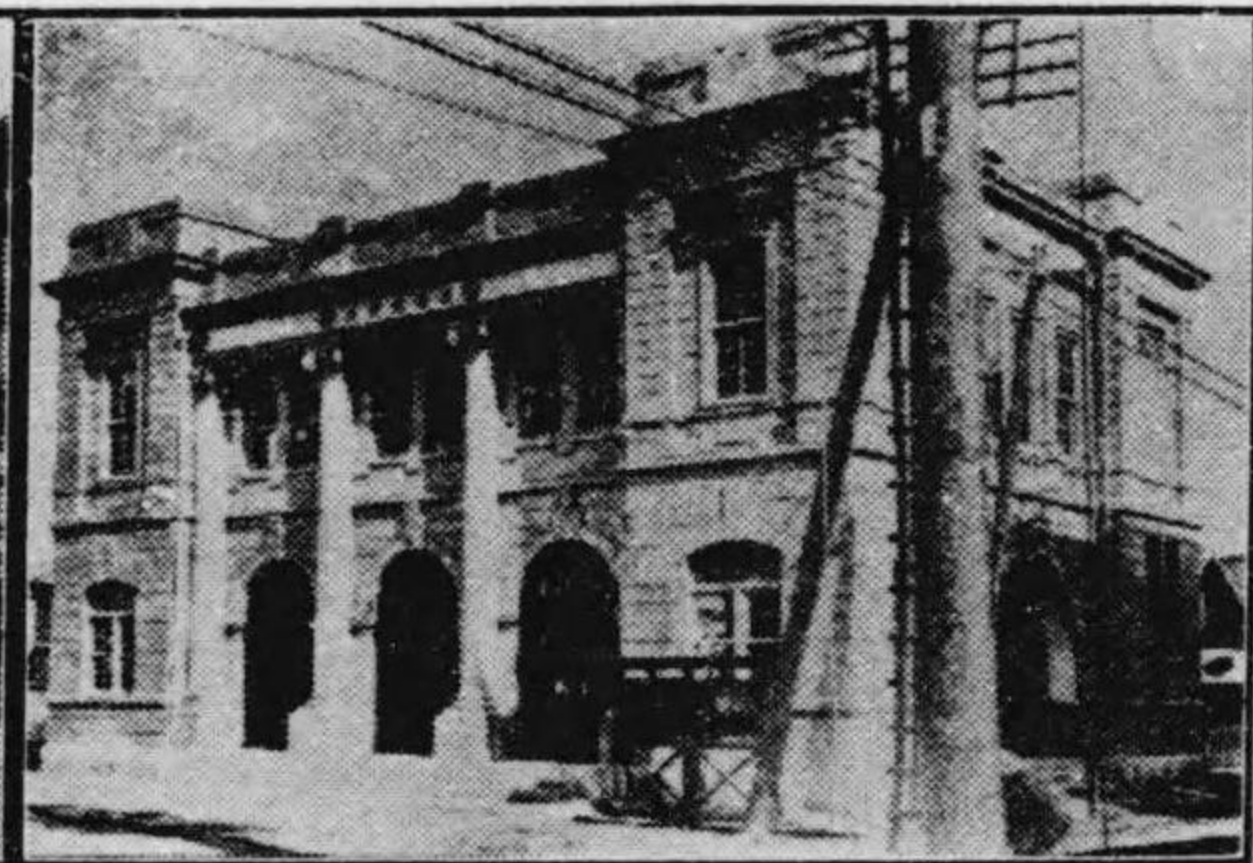
住吉神社



石川島造船所



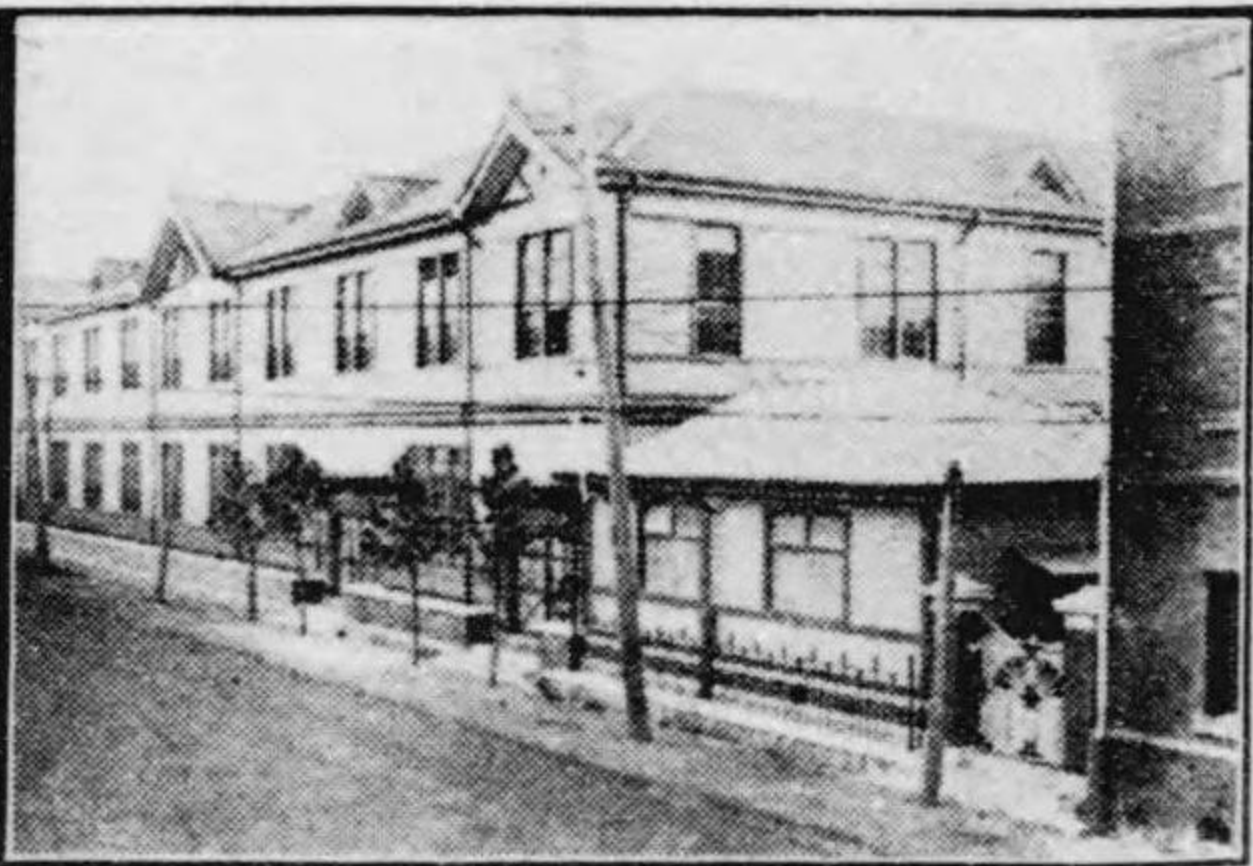
寶田尋常小學校



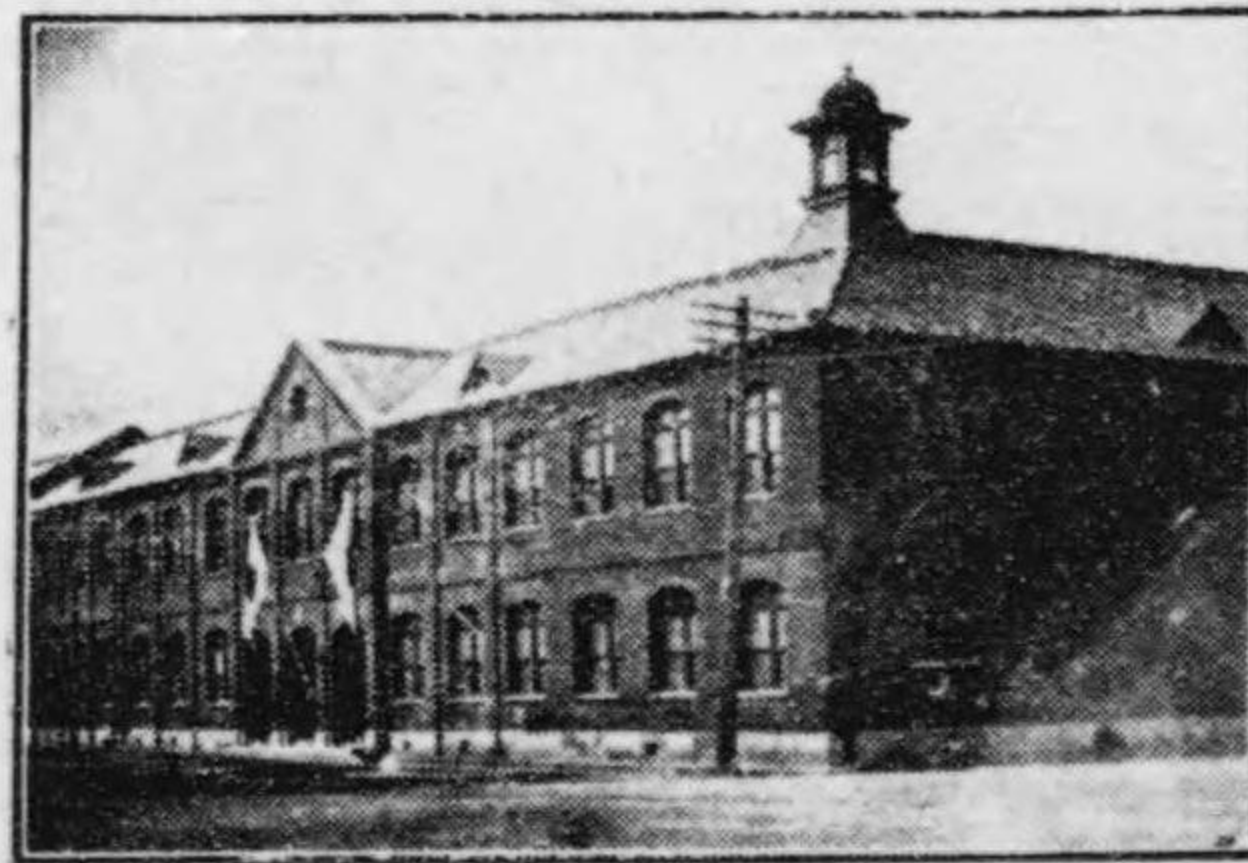
東京橋稅務署



秦明尋常小學校



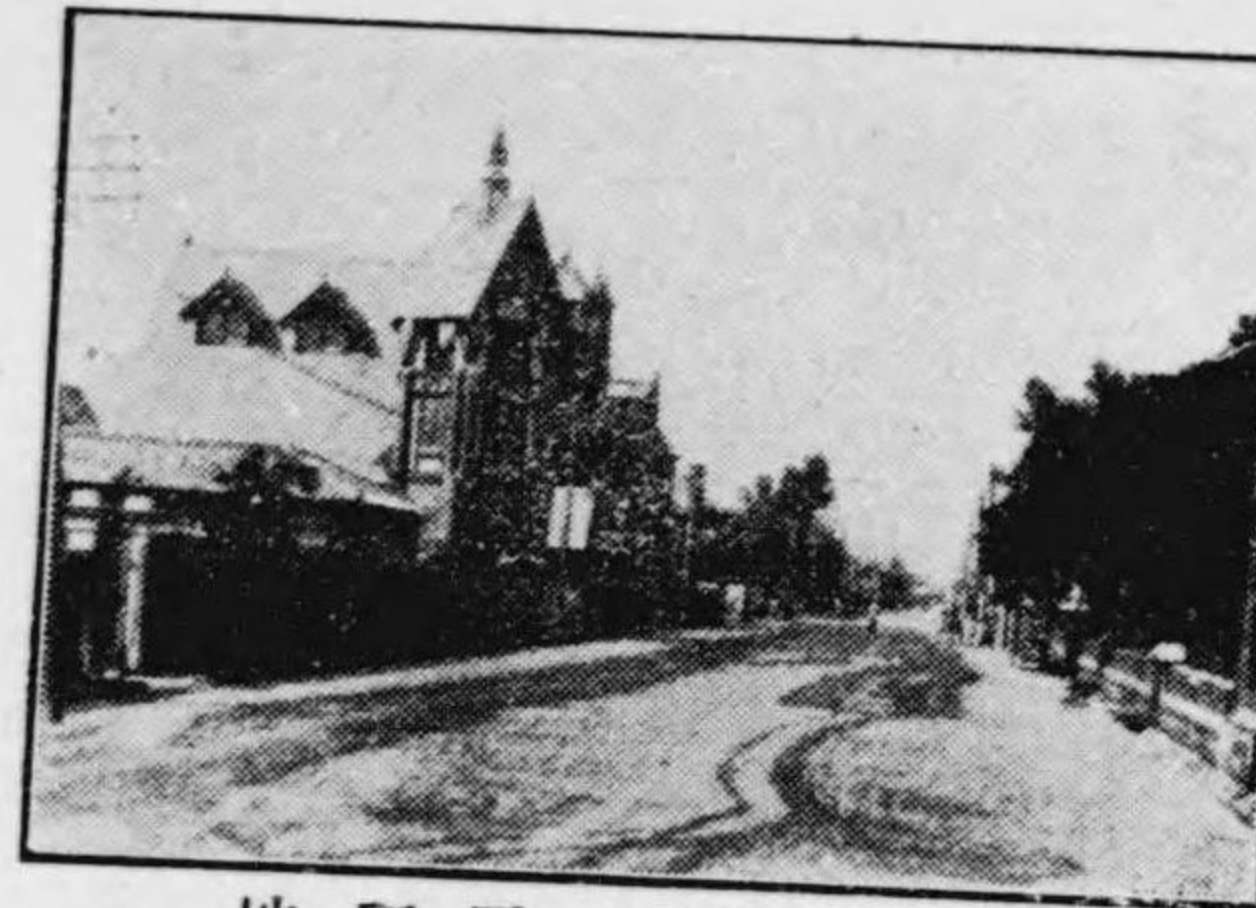
築地尋常小學校



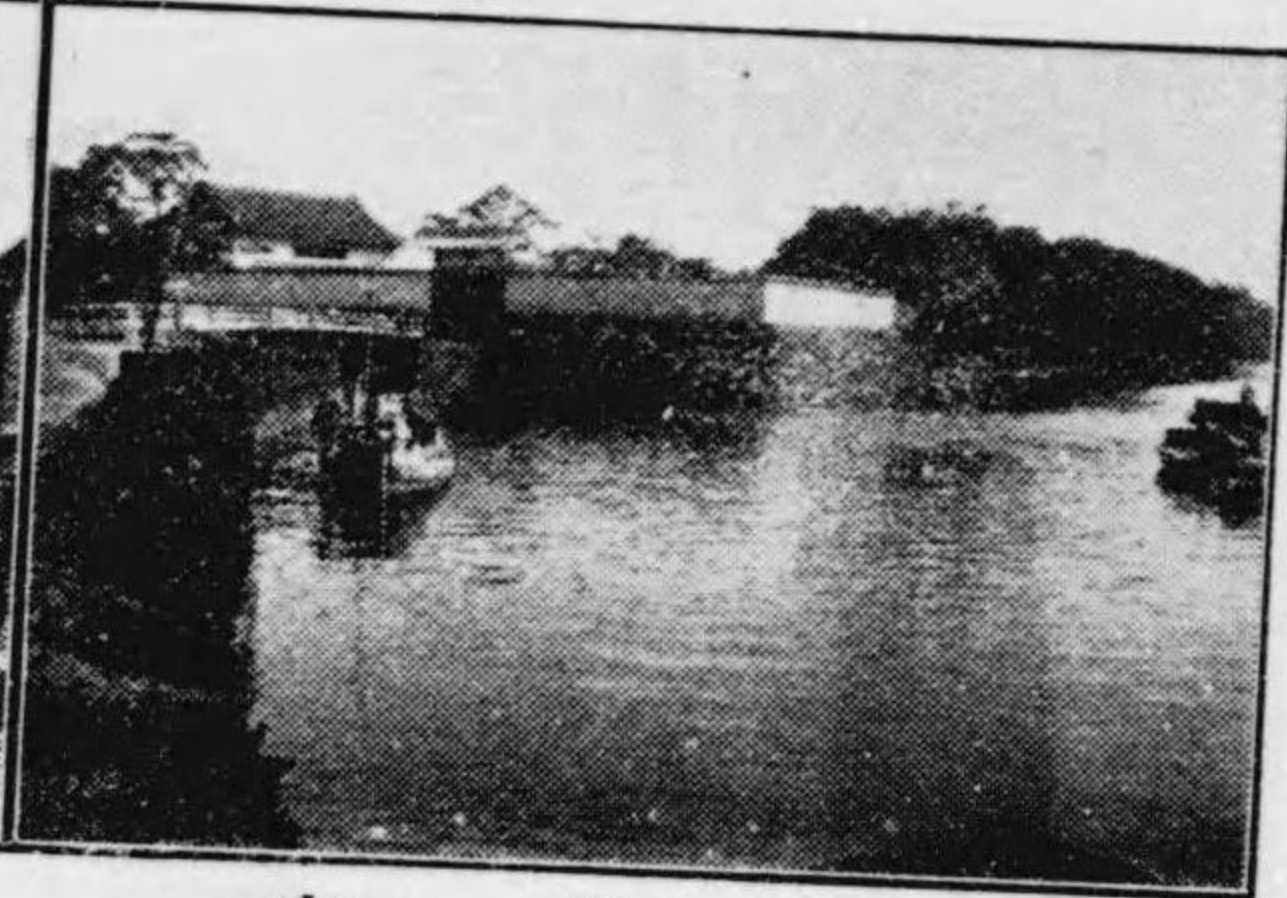
東京高等小學校



東京尋常小學校



舊外國人居留地



濱離宮



新宿富座



新宿橋附近



新宿町の東京橋家畜醫院



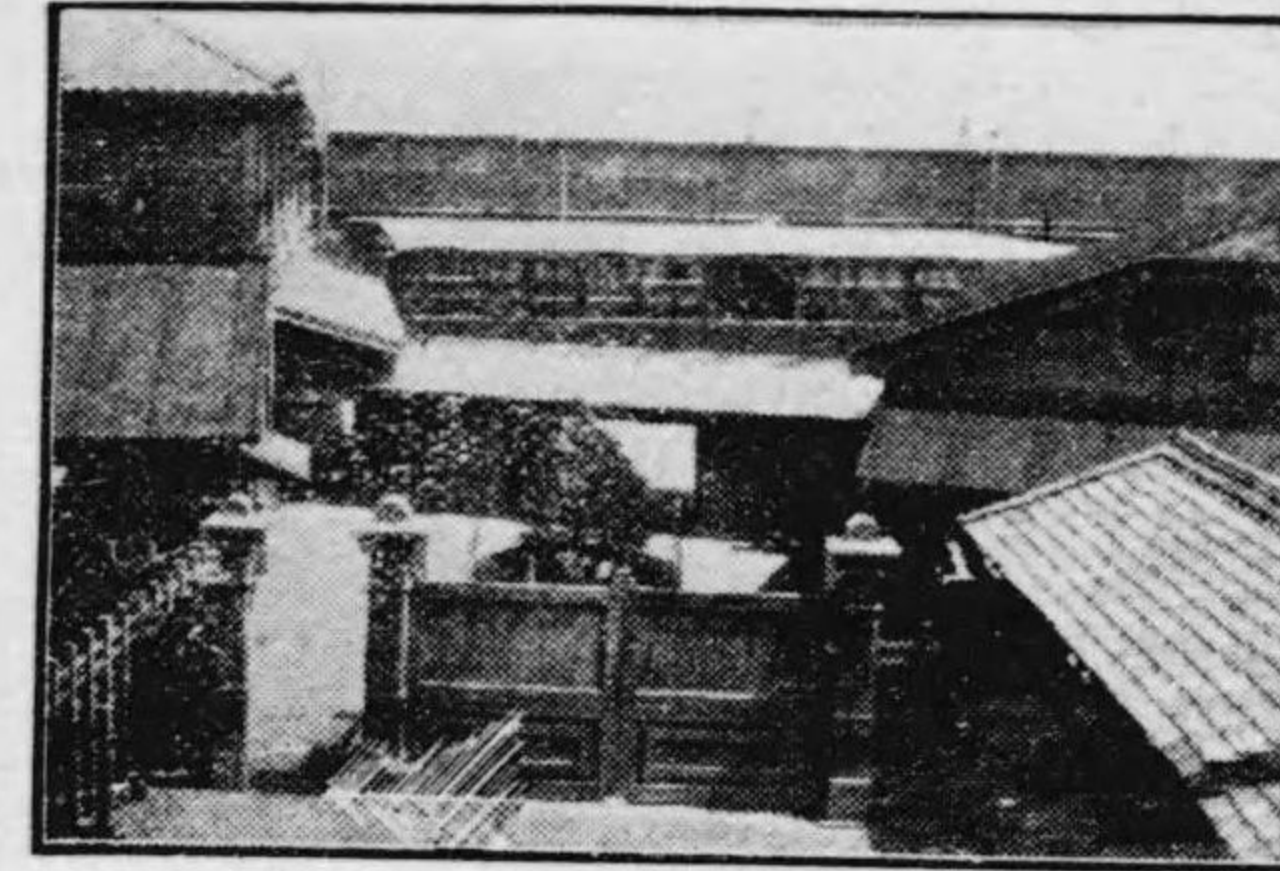
長校學小等高橋京 長校學小坂前越 長校學小橋京 長校學小明泰
 氏郎太峯原小 氏郎太茂田與 氏美豐野笹 氏藏鐵橋高



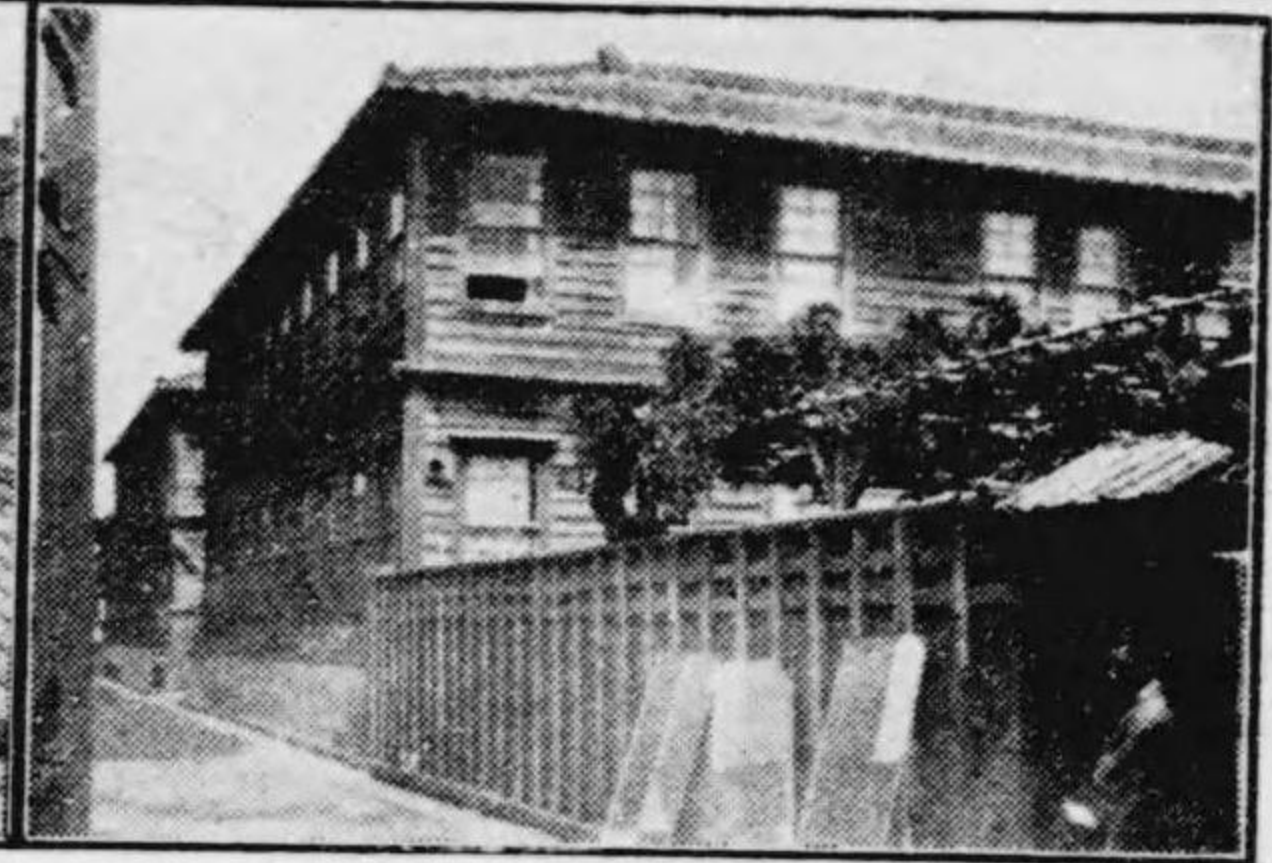
長校學小二第島月 長校學小地榮 長校學小石明 長校學小町橋南
 氏景花井櫻 氏傳左木並 氏助之俊橋本 氏二厚澤大



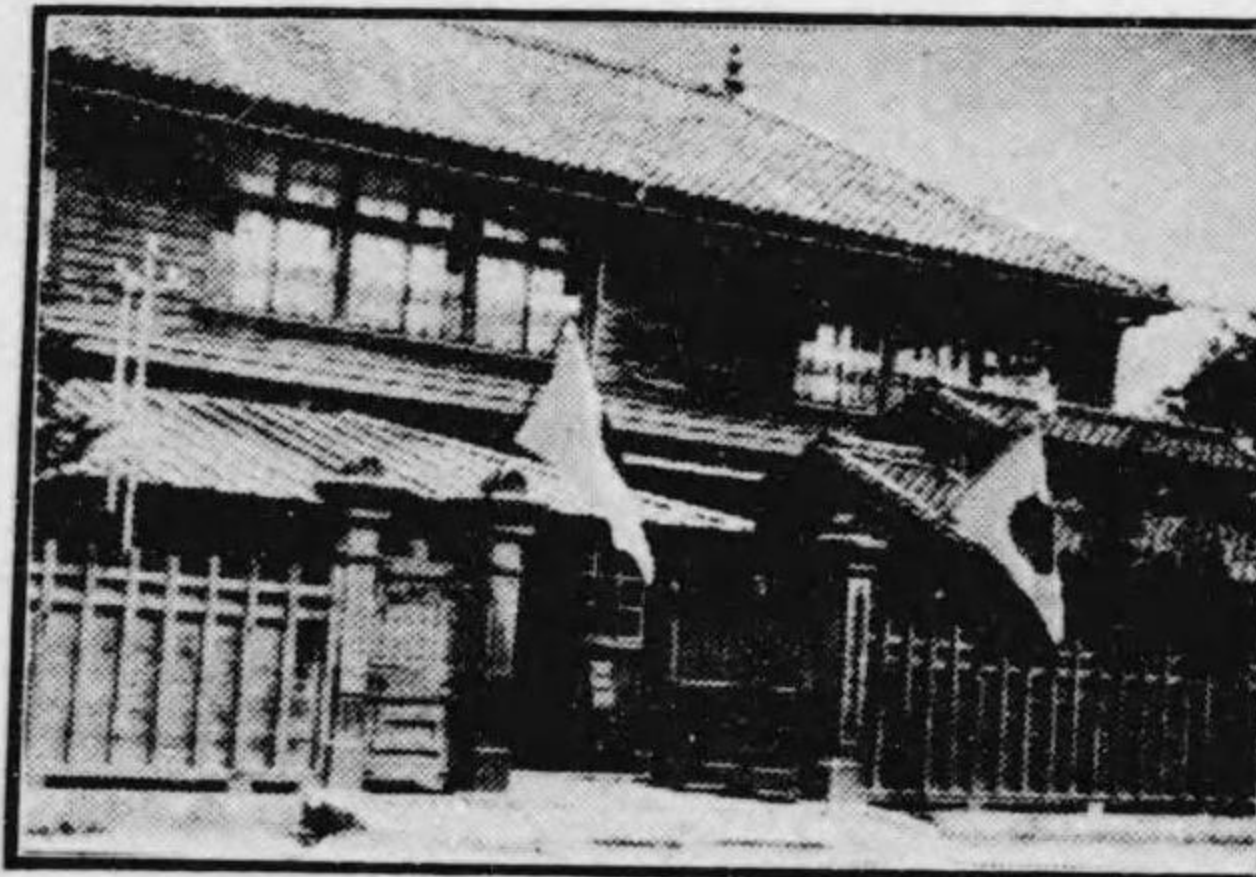
長校學小華京 長校學小島月 長校學小洲砲鐵 長校學小田寶
 氏造幸田石 氏二光山遠 氏郎太吉中弘 氏郎次助口井



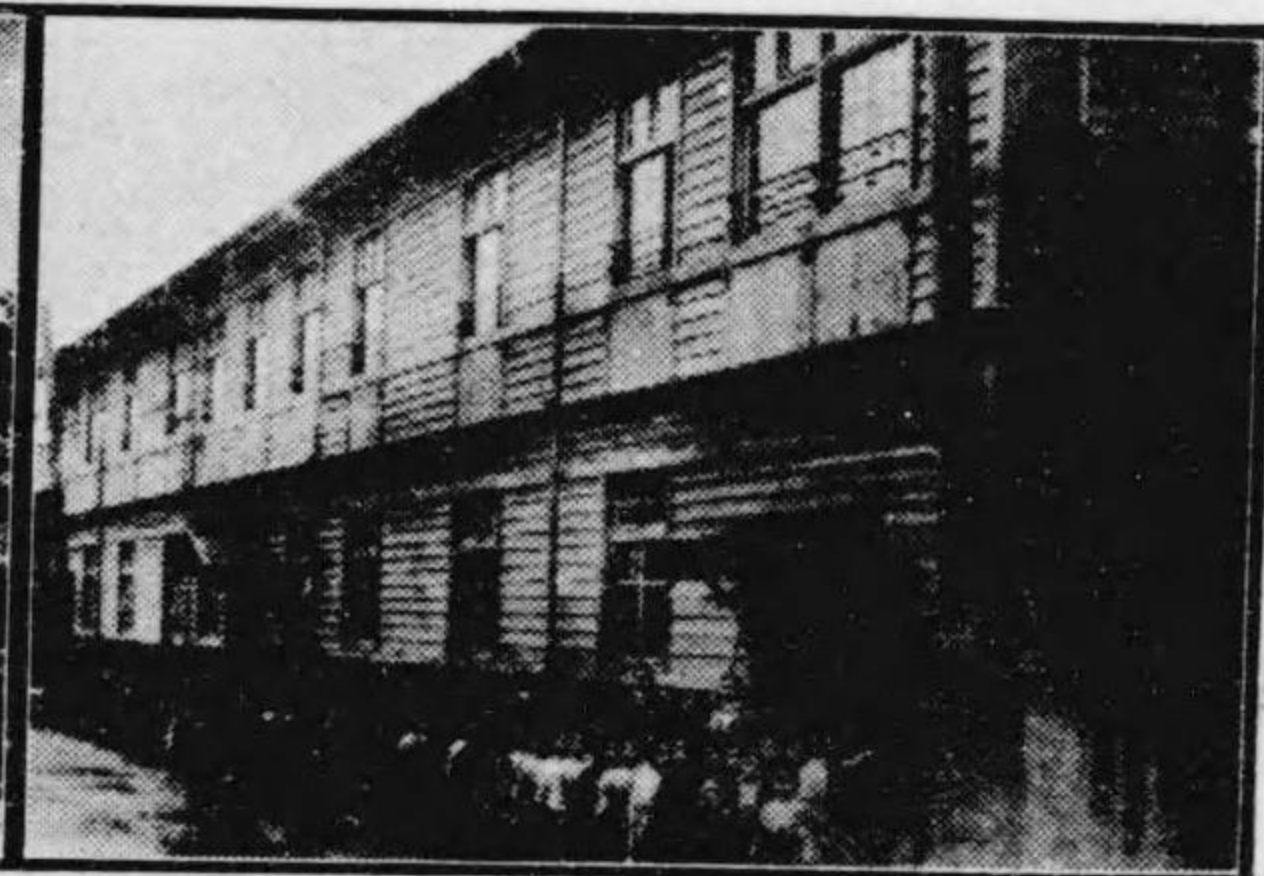
校學小常尋堀前越



校學小常尋島巖靈



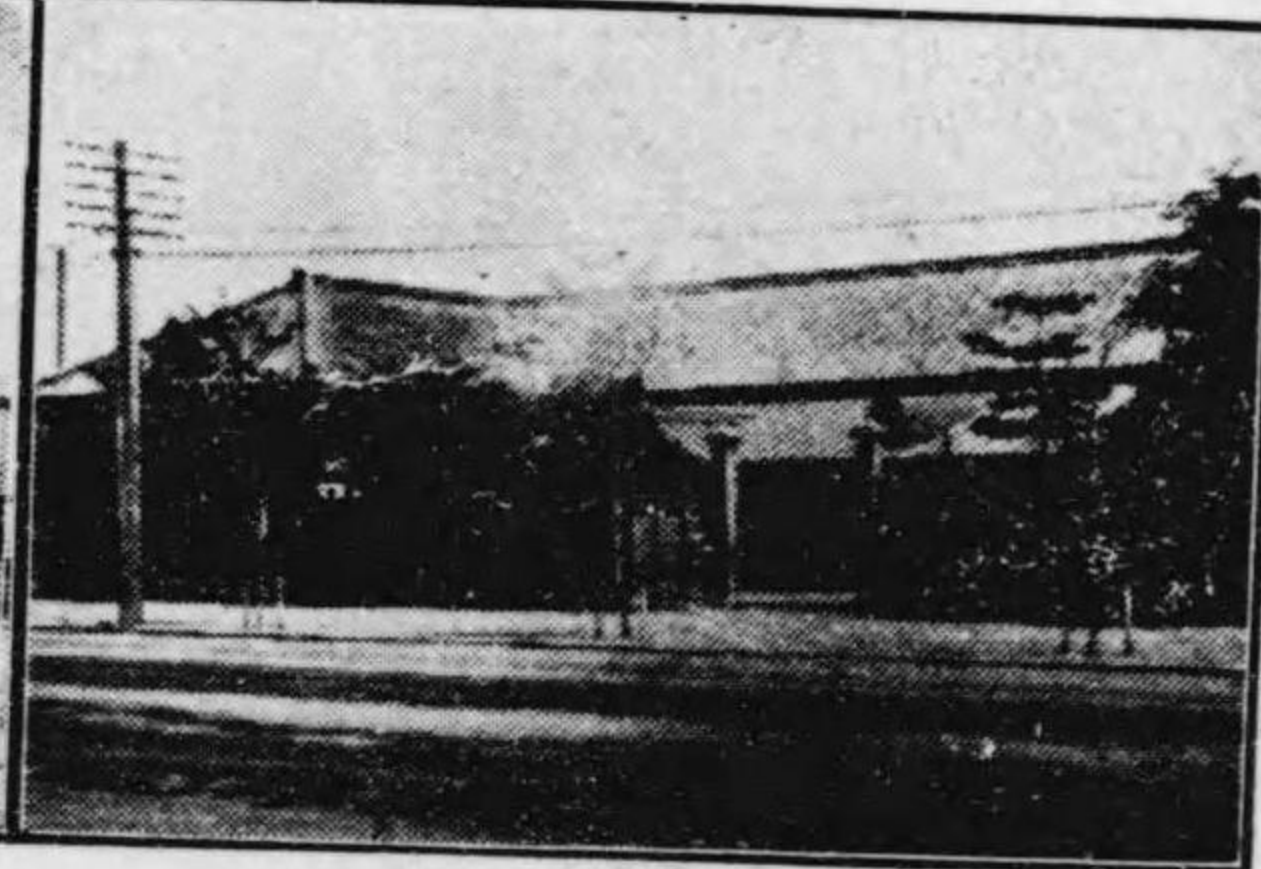
校學小常尋石明



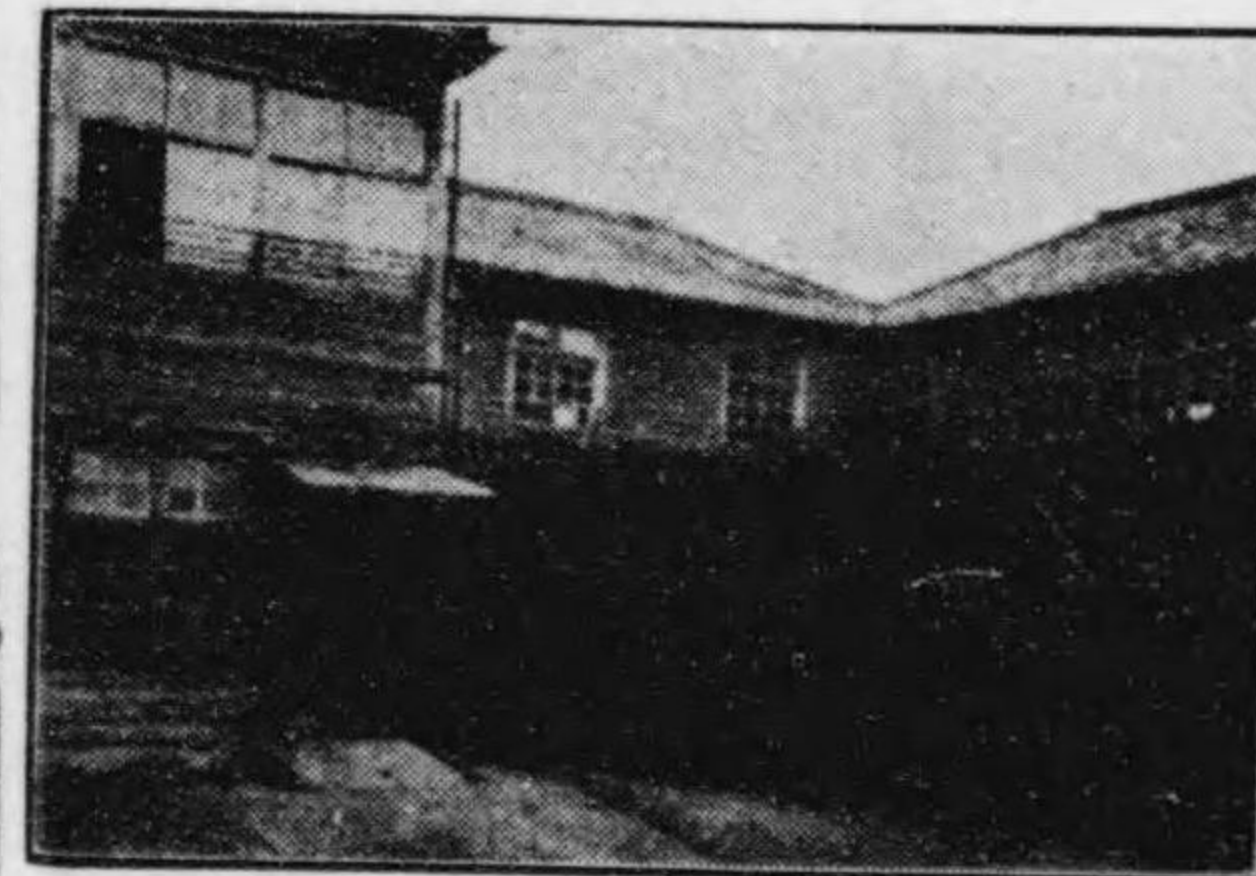
校學小常尋町橋南



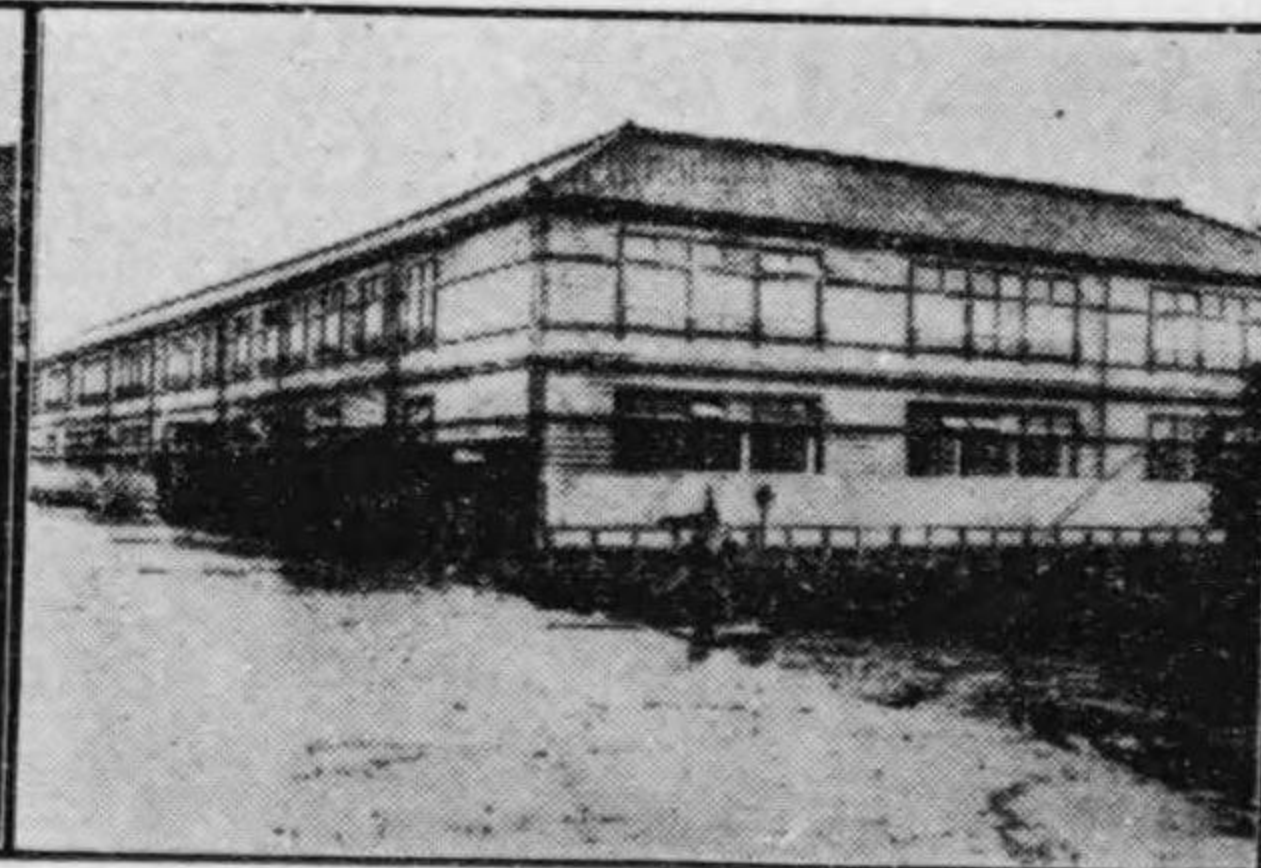
校學小常尋二第島月



校學小常尋島月



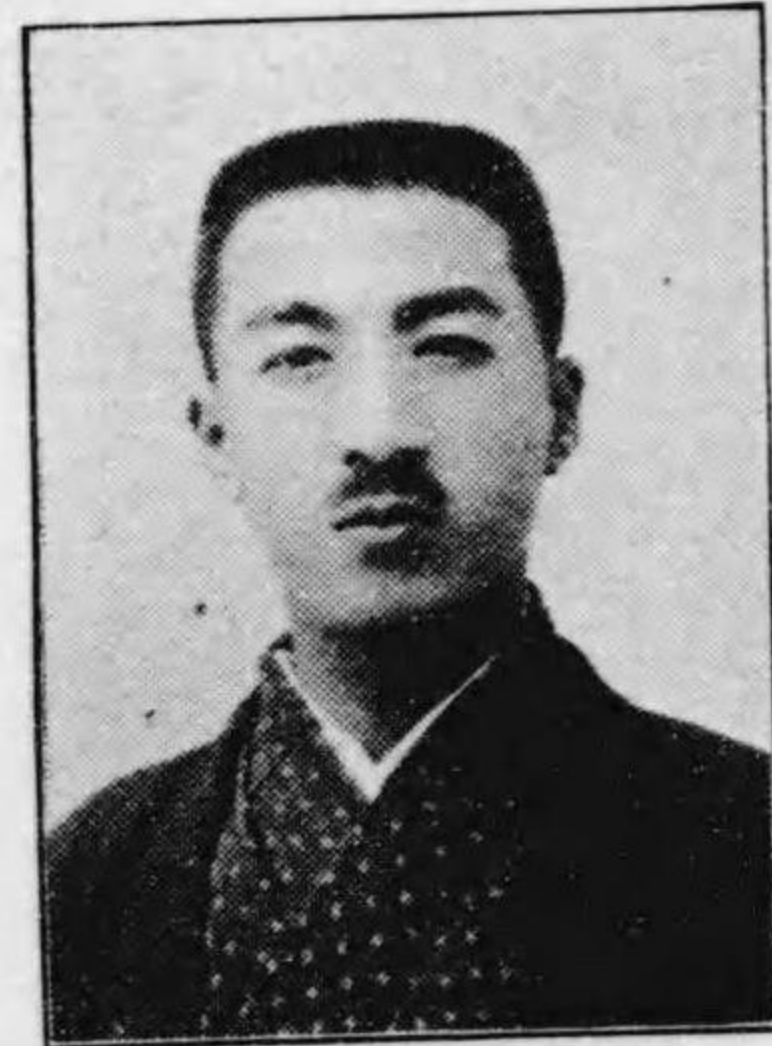
校學小常尋華京



校學小常尋洲砲鐵

報 畫 物 名 橋 京

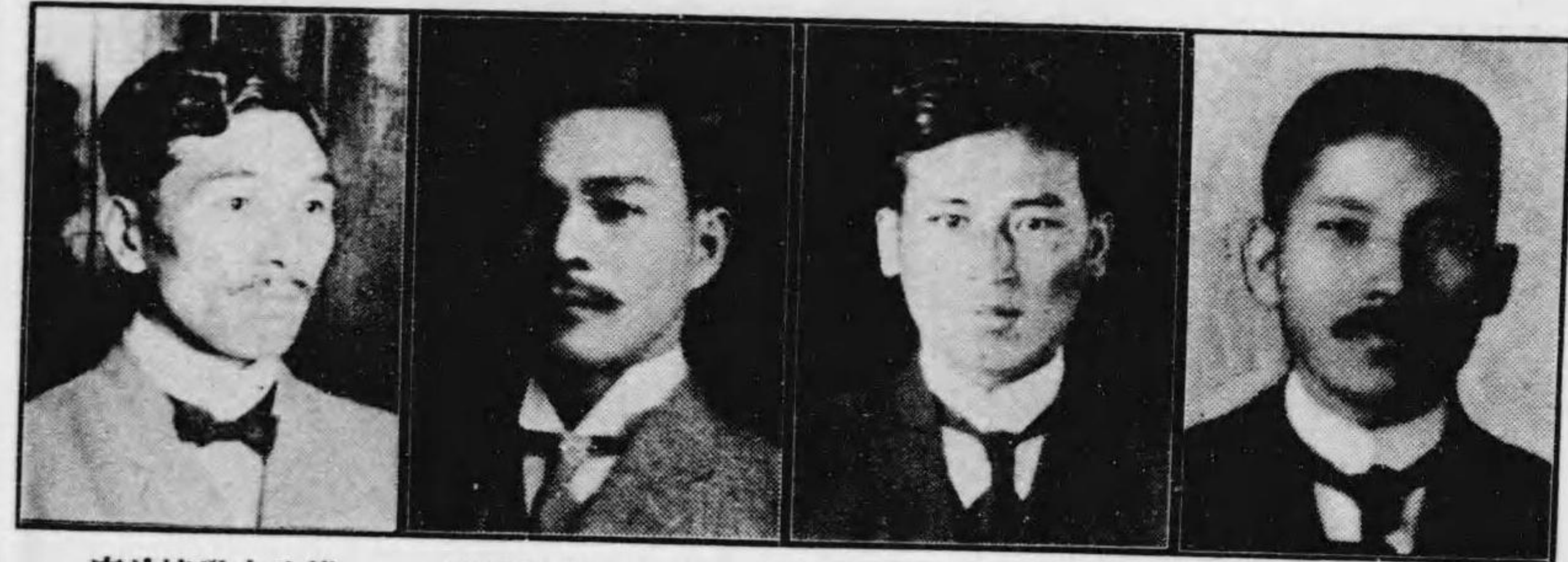
(一 其)



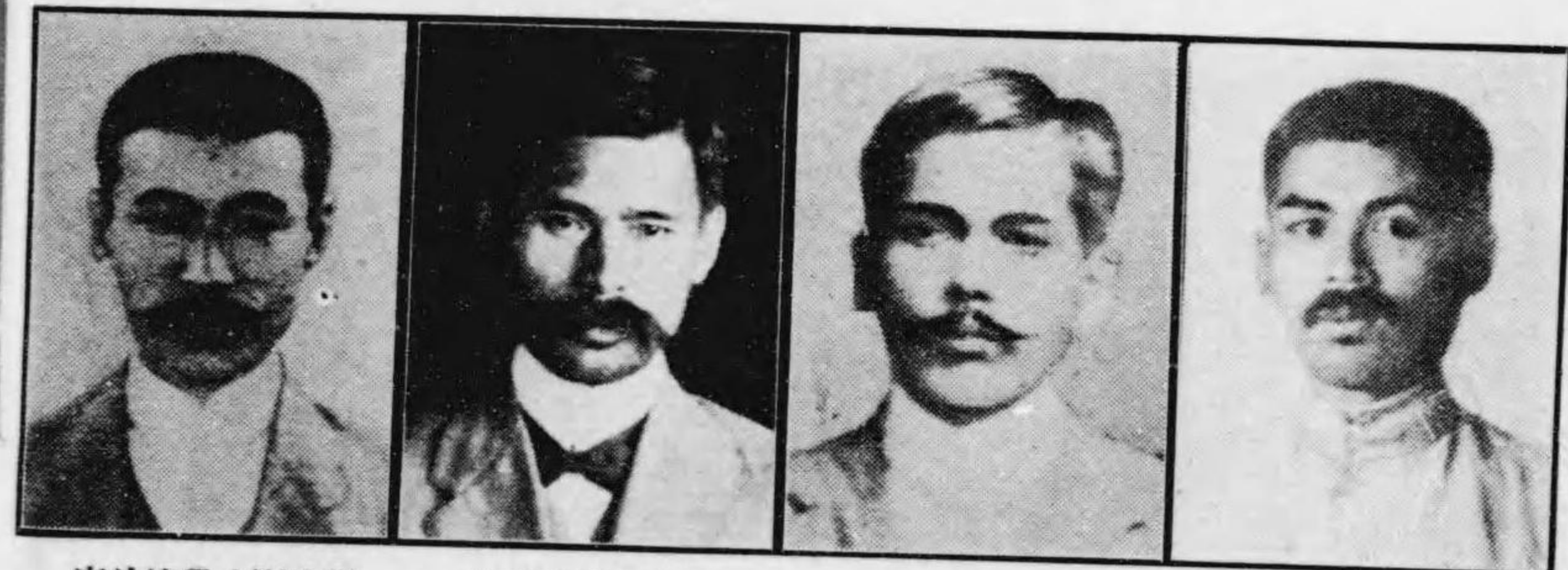
氏 郎 太 富 浦 藤



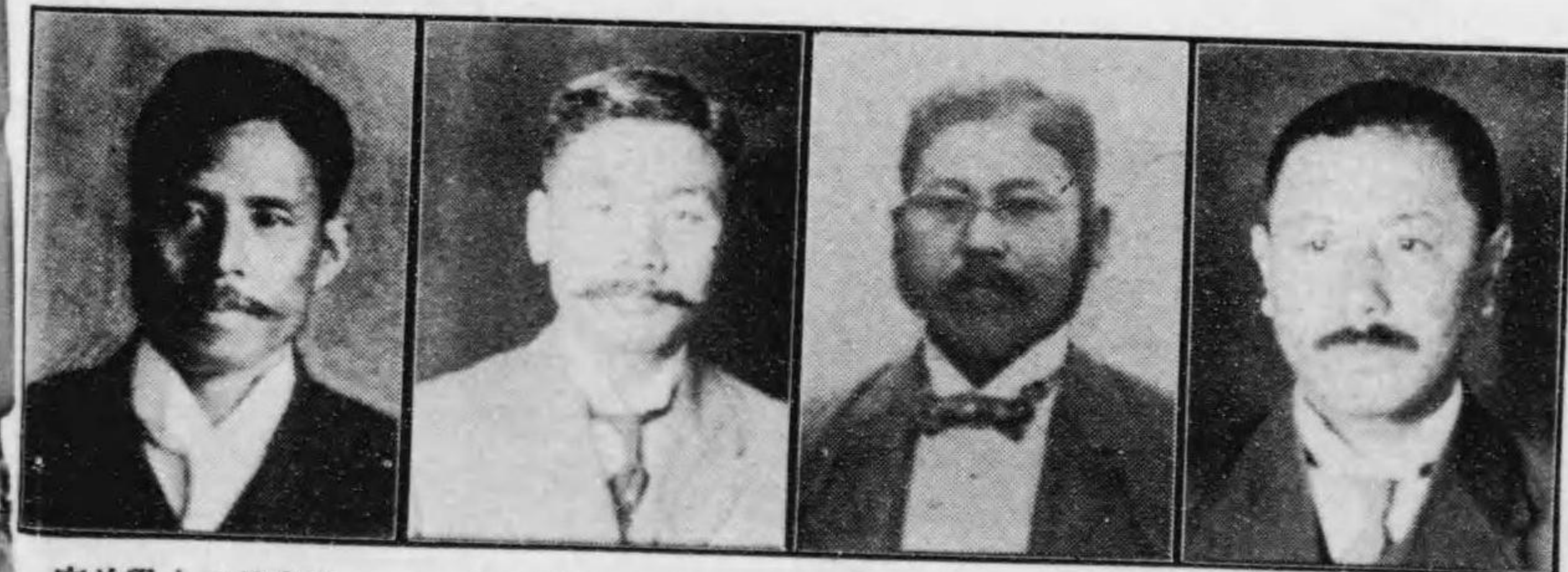
屋 間 物 青
店 商 周 三 の 岸 河 根 大
番 五 〇 三 二 橋 京 話 電



席 首 校 學 小 地 築 席 首 校 學 小 町 橫 南 席 首 校 學 小 島 巖 靈 長 校 學 小 島 巖 靈
氏 藏 正 川 及 氏 吉 得 幡 八 氏 郎 一 順 山 奧 氏 藏 綱 合 落



席 首 校 學 小 洲 砲 鐵 席 首 校 學 小 華 京 席 首 校 學 小 石 明 席 首 校 學 小 田 寶
氏 郎 太 金 木 青 氏 啓 幸 原 紳 氏 郎 三 彦 本 宮 氏 門 衛 左 市 木 高



席 首 學 小 二 第 島 月 席 首 校 學 小 島 月 席 首 學 小 等 高 橋 京 席 首 校 學 小 堀 前 越
氏 衛 辰 暮 小 氏 亮 邊 渡 氏 郎 太 政 田 池 氏 正 野 盛



新橋竹川町煉瓦
 大通交番前
角店
 ぶり
 治

見切部開始以來豫想外の御用命を蒙り難有奉
 謝候大割引均一品は五六年來の持備へ品にし
 て渾て京都本場の技術上最良優等の染織刺縫
 絞りの加工品のみにして粗雑なる品は持殘し
 なく加ふるに日々新製品を續々差加へ居候得
 ば再三幾度も御縦覧の榮を賜り度奉懇願候
 敬白

目 大割引均一見切部

本支店冬物御珍敷各品全部取揃へ廉價販賣
 新橋竹川町十二
 電新二〇二七
 本店 ぶり 治
 神田表神保町一
 電本局九五二
 支店 ぶり 治

嶄新 各類 マフラー 〇實用新案 千歳シヨール
目 秋冬季節 嶄新獨特 半ぶり帶揚



川辰中老松
 花家の花
 丸音村菊

花家の藤
 都濱壽
 福壽

花叶三菊
 家外三吉
 靜榮小桃
 江龍桃

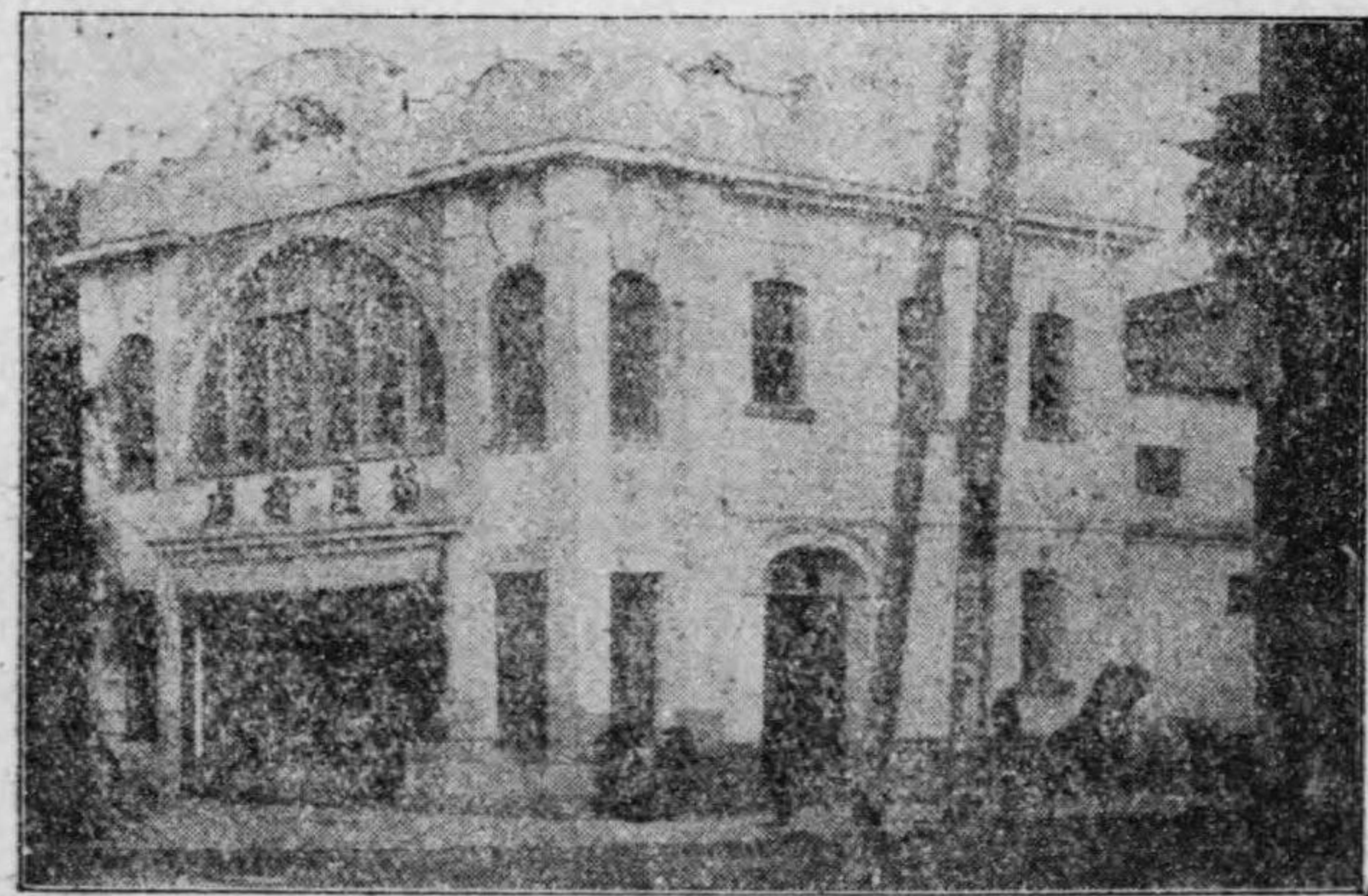


外 鶴 家 秀 勇
竹 寺 島 小 初
辰 中 村 辰 中

辰 中 村 元 香
寺 島 家 紅 葉
叶 家 艶 香

花 玉 家 か づき
平 井 家 榮 三
新 叶 家 園 香

激務に従事する人は食物の美味により終日の勞を癒し滋養
 珍品を以て身體の營養を増進さるべし
 夕餐の膳に珍物を供へ夫の終日の勞を癒し給ふは婦人がたの
 つさめにして家庭の圓滿も延て開かるべし
 數種の珍品を常に蓄へ不時の來客に即席御手料理を供さるゝ
 は實際の善訣ならん
 祝儀其他の進物に珍らしく重寶なるものを撰ばるゝは此れ又
 實際上必要の事なるべし
 航海、嶺山、旅行等には殊に變味の憂なき品と確實なる食料
 品御携帯の必要これあるべし
 外國の地にありて母國の珍味を口にするを得るは誰人とても
 此上の樂なるべし
 以上の事柄を満足に容易に得んと思召す方は常
 に「菊屋商店販賣品」に御注意願上候
 營業案内御入用の方は御申越次第郵送致候



銀 座 二 丁 目
 菊 屋 商 店
 電 話 京 橋 四 一 八 番



新叶家照葉
新若松の
梅千代子

本花家小萬
松中田秀千代
月家の鯉香

河辰中千里代
金三舛花駒
新玉中千鳥

京橋繁昌記

京橋協會編纂

總說

時は第百一世後花園天皇の御宇、康正二年の花咲く春鎌倉の管領上杉定政は老臣太田資長入道々灌を召して草より出で、草に入る月と詠じけん月影照らす武藏野の原を相して城を築けと命を下しぬ。

實に其の名轟く千代田の城はかくて築き成されしが文川の十八年、其の主定政の妬みを受けて、あたら英雄も非業の刃に斃れてより春風秋雨茲に四百有餘年、

七重八重花は咲けども山吹の

みの一つだになきぞかなしき

のやさしき古事を形見にして夢茫々追はん影なく、千代田の城と諸共に其の名ばかりぞかしましき、

かくて大永四年に小田原なる北條が支城となり遠山丹波守をして守備せしめしも只僅かに二千員に足らざる城下のことゝ町らしき町とてはなかりしなり、然るに天正十四年北條氏は豊臣秀吉、徳川家康の聯合軍に打ち破られて徳川家康關東に封ぜられ慶長八年入國の後には原野を開きて都會となすに心を碎きぬ。

さはさりながらわが京橋の地は此の時未だ茫々たる海にして一の土地をもあらざりしなり、此處に於てか將軍家康は先づ八丁堀より南傳馬町及び銀座邊を埋立つるに至りぬ、かくて後靈岸島成り築地成り月島成りて今日の繁昌を極むる迄に至りし次第なり。左に參考の爲め東都紀行の一節を掲載す。こは寶永年間所作なり。

米河岸、伊勢町などいふ市廓を経て鐵砲洲に行き

かゝりぬ、此處をかき名付けける事は寛永の昔、大筒の試し打を將軍家英覽あるべしとて井上稻富打ち試しける所故に其後築き立てられたる名はなりしとかや、されは此所御城下近し大筒の稽古はさけらるべしとの公議極り其後は鎌倉由井ヶ濱にて稽古しける、其矢倉入争論師匠々々の遺恨となり井上稻富は喧嘩しけるとぞ語り傳へし、されば近年迄我がかよひたる所も所々皆改まりぬ、殊には類焼まもなければ大方は藁屋のみにして只草のみ生ひ繁りたりな。

通ひこし道の露芝しばしまに

人は逢が本あらにして
今は昔の小路とはあまた取替れる處を堅に行き横にたづねて見れば見る程京橋の南も一二町が程は火除に成りぬ。此處より紀國橋にかゝりて南北にわたり東西に行く、此の筋は典藥の良醫多ければ町裏商家の邊たづねて築地の武家町に出ぬ。

甲乙なしと聞きしにみ縁所は大給櫻井の館とは異なるかな。是より稻荷橋にかゝりて南八丁堀に出でばやと此處をば行くに稻荷橋の社並に近き頃正一位の贈爵ありと聞く額あらたにかゝりたり、此筋にも武家は少々有りけり、河の洲崎海ちかく島見ゆるは住吉の宮居ありといふ縁松森々として神さびて見ゆ。

神も亦こゝ住吉とまつられて

岸の姫松まつ守るらし
かくて永澤町を尋ね其處より打ち續きたる武家漸く多く北八丁堀眞福寺橋より東の河岸昔鳥井左京師の館の跡今は本多遠江守其隣は松平越中守數代の事は日向守此兩家軒高く誠にいかめしき屋敷其類焼の後は板屋の陣屋同然なる有様すべて此門ならびはるゝと見わたしたる家共主も屋敷も大かた替りにけり。牧野因幡守ばかりぞ數度の回祿類焼を通れ昔のまゝにいよくみやびをつく

此處も亦祝融にかゝりたるまゝに普請せざるもの多し、西門處のうらやしきにて暫時汗入るゝとて思へば此の築地も南北十八丁宛に定められし故に堅横往復刻のうつりけり、此處より海際御殿まで行きつくして亦思ふに江南江北往來せし所々いづこかはれど此筋今日見る所殊に改まるやうなるはめづらしく、火除地多く第一屋敷は其主の名のから垣さへまばらなる體たゞ芝草のみになりぬ。奥平の屋敷のみや有りしまゝなり、又此所旗本大名の藏屋敷多きを其同性の少身は多くは貸地してすまはるゝも數々なりや、古へ淺野内匠頭祖先より作りみがける家の作りも今は少身に割わたされたり、これを見ても古きを尋ねて新らしきをしる計りなるに温故の教を心付かざるこそ口惜けれ。松平遠江守元祿の初め迄大名小路鍛冶橋通りに見えし家の此處に移られける事よ、三州十八松平諸大夫上座松平和泉守と此の遠州のみこそ忌座の

さるゝとぞ見えし、此處に架れる橋は海賊橋とかいへり、延寶年中迄は石の橋なりしが如何なる故かありけん、天和の後は常の木橋に作り改められにける、されば遠流の輩は此の橋のほとりより舟にのするといへば赦にあふ人も亦此の橋よりこそよりけめ、いづれに憂喜相交る内に赦船は稀れに遠流の船は毎度聞く事なり。

流れゆく船つなぎてよ橋柱

此の川水の濁りなき世に
かくは申してみたれども此の川筋は随分濁水泥川にして水上は澄みとはすめども末はかやうに濁れる事よ、此近き川並に鎧の渡とて船渡しあり、甲の明神とて牧野因州が屋敷に古來より祝ひ祭る所皆將門の古き由緒を語り傳ふるにや。
▲位置 京橋區は宮城の東に位せる一大區にして東北は大川を隔て、深川區に對し、東南は東京灣に

臨む西方は一流の溝渠即ち外濠を隔て、麴町區と相對し、南方は土橋より芝區沙留町地先へ流る、沙留川を隔て、芝區と境し、北方は日本橋區に相隣せり。

▲廣袤 京橋區の極東は佃島にして、極西は八官町なり、此間の里程二十二丁、極南は濱離宮にして、極北は北橋町なり、此間の里程二十一丁、全區の面積は零方里二十七町にして、官有地五十七萬八千四百九十六坪餘、市有地二十一萬五千六百五十五坪、民有地四十八萬八千七百七十坪、合計百二十八萬二千三百二十一坪なり。

▲地勢 京橋區の地勢は一面平坦なる土地にして、東京市民が言ふ所の下町なるもの、一部分を占む、市街の最高地は銀座及び南傳馬町邊にして海面を抜くこと二十二尺、最低地は靈岸島にして海拔僅かに九尺に過ぎず、而して縱横に貫通せる河川は舟楫の便此上なく交通の便殊の外發達して北方の隣區日本橋區と繁昌の度に於て伯仲の間にありと稱するを得

べし。

▲地質 京橋區の地質は地質學上洪積層と稱すを得べし、此の土地は前記の如く總て埋立地にして種々雜多なる泥土砂土等より成り居りて土質の變化は殆んど極まりなし、されば山の手邊の往古より固着せる土質とは少しく異なるものあれども先づ洪積層の部に編入し置き差支なかるべし。

沿革

▲往昔の京橋 京橋區は總説に於て記述せしが如く徳川家康入國後埋築せられたるものなれば、他の區に比し沿革の記すべきもの甚だ少なし。徳川氏入國當時迄は日比谷の入江遠く灣入し海上に一二の沙洲ありたるに過ぎざりしを慶長八年に至り天下の諸侯に命じて千石毎に一人を出さしめ神田山の土を取りて日本橋區沿町邊より以南八丁堀、南傳馬

町邊銀座通り附近にかけて埋築工事を施されたるを以て京橋の紀元とも稱すべし、此の工事に付き徳川實記を見れば市街の名は皆後夫の國名に取らあり、因幡町、山城町、尾張町、加賀町等の名ある當時の命名ならん、慶長十七年に至るや、南八丁堀、三十三間堀等を開鑿し後藤光次に命じて新開市街の區劃を定め、京都、津、堺等の商人に其地を與へたり、三十間堀邊の市街となりたるは實に此の時なり、次で寛永元年、僧靈巖なるもの海洲を埋築して寺を建てしが、後深川區へ移轉せしにも拘はず其名に因みて靈巖島と稱し來れり、今の靈巖島即ち是なり、是より先き攝洲佃村の漁民、戸近海に來りて漁業を營みつゝありしが、寛永年間大川口の海洲三國島を改めて佃島と稱し埋築完成し正保元年に至りて家を建てたり。寛永十年には南傳馬町三丁目北側の埋築工事をなして町屋となし、承應三年には城濠を浚深して數寄屋橋附近を埋立て、萬治元年には木挽町海

洲の埋立大工事完成せられたり、越えて萬治二年、徳川綱吉に木挽町の海上一萬五千坪を賜ひ埋築工事を施して別墅となさしむ、今の濱離宮即ち是なり、是より先き鐵砲洲の地は幕府の砲術隊士、井上、稻富二氏の砲術演習所なりしが、桑山貞壽なるもの幕府の命を受けて填築して市街となしたり、明和三年に至るや、靈巖島の海洲を埋築せしが俗に之を藪蕨島といふ。明治二十五年より二十七年の間に月島一號地二號地成り、明治二十九年には新佃島完成せり、斯の如く昔時の海面は繁華の市街と化し魚住む海は人住む土地と變り果てたり。有意轉變の世の中亦面白いかな。

而して荏苒時代は東海道筋を初めとし、日本橋區に續きて町屋あり、築地木挽町邊には諸大名及び士族の邸宅並に寺院多く、八丁堀には町奉行附の與力同心屋敷あり、新川邊には酒問屋あり、斯くて明治五年の少災の後銀座方面は煉瓦建の家屋に改築せられ

て今日の繁昌を來すに至りし次第なり。
今埋築せられたる土地の順序を年代に依て示せば即ち左の如し。

- △八丁堀以南銀座邊 慶長八年
- △靈巖島(今の靈巖島町) 寛永元年
- △南傳馬町三丁目北側 寛永十年
- △佃島 寛永年間
- △數寄屋橋邊 承應三年
- △築地及び木挽町 萬治元年
- △濱離宮 萬治二年
- △鐵砲洲 萬治二年
- △靈巖島(俗に蒲島) 明和三年
- △月島 明治二十五年より同二十七年に至り完成
- △新佃島 明治二十九年

▲現在の京橋區 現在の京橋區は其の面積より言へば十五區中の第十位にあれども、京橋區は日本橋區と共に相並べて商業の中心點なりとせられ人家の稠密なる事比すべきなし。然かも十五區中のハイカラ區と稱せられ商家にして京橋區内に店舗を有せ

- 一、二丁目、新佃四町一、二、三丁目。
- 六の部 築地一、二、三、四丁目、南小田原町一、二、三、四丁目、南本郷町、上柳原町、南飯田町。
- 七の部 高代町、本八丁堀一、二、三、四、五丁目、松屋町一、二、三丁目、岡崎町一、二丁目、元島町、長澤町、八丁堀仲町、水谷町、永島町、幸町、日比谷町。
- 八の部 東港町一、二丁目、新船松町、越前堀一、二丁目、川口町、長崎町一、二丁目、銀町一、二丁目、大川端町、鹽町、靈巖島町、四日市町、南新堀町一、二丁目、富島町。
- 合計二百〇七ヶ町

此の外に河岸と稱するものありその名を擧ぐれば即ち左の如し。
城邊河岸(北横町より五郎兵衛町に至る外濠際)、大根河岸(北紺屋町河岸)、横河岸(同上)、竹河岸(炭町)、材木河岸(本材木町)、銀座一丁目裏河岸、西豊玉河岸(銀座二丁目以南の河岸)、白魚河岸(金六町)、竹川町裏河岸、東豊玉河岸(木挽町)、新富河岸(入船町西川岸)、櫻河岸(本八丁堀橋河岸)、楓河岸(松屋町)、龜島河岸(龜島河岸)、日比谷河岸(日比谷町)、將監河岸(東港町)、解屋河岸(川口町)、南新河岸(銀町)、北新河岸(四日市町)、南新堀河岸(南新堀)。

ざれば耻辱の一つとなされつゝある傾向に見ても如何に繁昌し然り進取的の繁昌、世界的の繁昌、積極的の繁昌を極め居れるかを察知するを得べし。

- 京橋區は本區關係事件の取扱、上區民の便宜に依り八區劃に分たれ居れるが其町名を示せば左の如し。
- 一の部 北横町、南横町、桶町、南大工町、南鍛冶町、五郎兵衛町、疊町、北紺屋町、中橋廣小路町、南傳馬町一、二、三丁目、中橋和泉町、大鋸町、南新堀町、松川町、鈴木町、常盤町、具足町、因幡町、柳町、本材木町三丁目、炭町。
- 二の部 南紺屋町、西紺屋町、弓町、彌左衛門町、館屋町、新着町、銀座一、二、三、四丁目、南水谷町、金六町、三十間堀一丁目。
- 三の部 三十間堀二、三丁目、元數寄屋町一、二、三、四丁目、尾張町一、二丁目、尾張町新地、南鍋町一、二丁目、山下町、宗十郎町、山城町、南佐柄木町、瀧山町、八官町、加賀町、日吉町、丸屋町、南金六町、出雲町、竹川町。
- 四の部 木挽町一、二、三、四、五、六、七、八、九、十丁目、采女町。
- 五の部 新富町一、二、三、四、五、六、七丁目、南八丁堀一、二、三丁目、入船町一、二、三、四、五、六丁目、新榮町一、二、三、四、五丁目、新港町一、二、三、四、五丁目、明石町、船松町、本港町、月島通一丁目より十一丁目に至る、月島東中通一丁目より十一丁目に至る、月島西中通一丁目より十一丁目に至る、月島西河岸通一丁目より十一丁目に至る、佃島、新佃東町

區勢

- ▲京橋區役所 本區區政の中心にして明治十一年十一月築地一丁目に開應したるを本役所の初めとし明治十七年十二月水谷町に移轉し、明治二十六年一月日吉町、明治三十年四月築地二丁目に移り、明治三十一年八月現在の地築地一丁目一番地に移轉せしものなり。
- 今開應以來の區長を示せば左の如し。
- 江塚 庸謹 明治四十二年十一月任 同十四年六月罷
- 池田 德潤 明治十四年六月任、同十六年五月罷
- 林 厚德 明治十六年五月任、同二十三年三月罷
- 大森 敬之 明治廿三年三月任 同廿四年三月罷
- 桑田 房吉 明治廿四年三月任、同卅六年十二月罷
- 長谷川壽太郎 明治卅六年十二月任、同四十二年八月罷
- 川田 久喜 明治十二年八月任、同四十四年六月罷
- 藤原 和吉 明治四十四年六月任

本區役所内に庶務、稅務、戶籍、兵事、衛生、水道、會計の七掛を置き左の區事務を掌理す。

庶務掛(掛長 國枝檢次郎)

左の各件に關する事務を掌理す。
一 議員其他の選舉、一 區會其他の會議、一 區費の豫算區有財産學校
基本財産及營造物、一 學校幼稚園及其職員、一 學齡兒童の就學及
學事獎勵、一 學務委員及學校醫、一 學事に關する諸願届、一 褒賞、一
海外旅券願、一 市區改正、一 移住民、一 公園、一 社寺、一 農工商業、一
會社組合取引所、一 度量衡、一 統計、一 行旅病者行旅死亡人變死人
及遺棄兒見送兒、一 土木事業、一 道橋梁の掃除、一 濟民救恤、一 災
害、一 浦留場事務及漂流物、一 區長職印所印管守、一 區吏員の進
退及宿直、一 文書の收受及編纂保存、一 諸證明、一 他掛の主管に關
せざる事件。

稅務掛(掛長 佛坂安文)

左の各件に關する事務を掌理す。
一 諸税金等の賦課、一 土地建物及舟車、一 共葬墓地使用、一 諸營業
の願届、一 諸稅の滞納處分、一 徵發令に據る使用辨償、一 諸證明。

戶籍掛(掛長 加藤賢道)

左の各件に關する事務を掌理す。
一 戶籍、一 身分、一 寄留者、一 統計小票及戶口調査、一 文官恩給及扶
助、一 埋葬認可證、一 印鑑届、一 戶籍吏職印及役場印管守、一 諸

兵事掛(掛長 河内彌太郎)

左の各件に關する事務を掌理す。
一 徵兵及志願兵、一 陸海軍諸召集、一 陸海軍諸生徒、一 徵費、一 在郷
兵及國民兵、一 軍人軍屬恩給扶助及賞勳其他身分。

衛生掛(掛長 寺田寬之丞)

左の各件に關する事務を掌理す。
一 傳染病地方病獸畜傳染病及種痘、一 清潔方法及預防消毒方法、一
市區及病院産院、一 賣藥及賣藥部外品、一 醫師藥劑師産藥種商及
針灸治、一 墓地火葬場、一 溝渠井戸及便所等掃除清潔、一 解剖及胎
兒保存願、一 窮民救療、一 精神病者看護、一 衛生組合及傳染病豫防
委員、一 死體檢案、一 撤水除雪。

水道掛(掛長 名和耕藏)

左の各件に關する事務を掌理す。
一 水道給水、一 水道諸材料金及工費其他徵收並に下戻し、一 水道諸
材料金滞納處分、一 水道の保護及取締。

出納掛(掛長 中西善七)

左の各件に關する事務を掌理す。
一 諸税金等の收入及所費區費の出納決算、一 陸海軍人召集諸費出、
一 諸物品の購入出納及保管、一 諸貸下金、一 公金取扱所預金、一 區
長收支の印管守所内營繕、一 所中取締及使丁の進退。

▲土地 本區内の土地所有者は市内に居住するもの

一千二百二十人にして其坪數總計四十四萬九千〇十
四坪二三、此の地價四十六萬六千四百四十五圓四
八錢、市外に居住するもの六十六人にして其坪數總
計三萬四千八十四坪一一、此の地價九萬四千三百九
十一圓五十四錢、合計四十八萬三千〇九十八坪三四、
地價百四十八萬二千九百四十七圓九十四錢なり、而
して此の地租は二十九萬六千五百八十八圓七十二錢
三厘あり。

▲戶數人口 京橋區の戶數及び人口は左の如し。

戶數 三萬八千四百六十二戶。
人口 男七萬一千〇〇八人。
女六萬一千二百五十八人。
合計 十三萬二千二百五十八人。

▲納稅 京橋區民が國稅、府稅、市稅、區費に對
して幾千の負擔を有するかは本區の區勢を推測する
の一資料たり。

一 國稅 (百三十六萬〇三百五十五圓二十一錢八厘)

地租 二十九萬六千五百八十八圓五十八錢八厘。

所得稅 五十四萬二千三百八十三圓〇四錢。

營業稅 五十二萬一千三百八十二圓五十九錢。

一 府稅 (二十二萬四千〇九十二圓五十四錢六厘)

地租割 二萬五千八百二十圓十一錢六厘。

營業稅附加 三萬七千八百二十一圓八十四錢。

營業稅 七千七百七十九圓七十三錢。

家屋稅 九萬七千七百四十二圓六十五錢。

雜稅 五萬五千五百二十七圓二十一錢。

一 市稅 (三十八萬八千三百六十八圓四十六錢四厘)

地租附加 一萬一千百十圓十九錢二厘。

所得稅附加 二萬三千九百三十四圓五十二錢。

國稅營業稅附加 三萬四千四百六十八圓三十七錢。

府稅營業稅附加 三千三百六十八圓〇四錢。

雜稅附加 二萬三千二百九十九圓七十八錢。

家屋稅附加 九萬二千四百三十七圓三十八錢。

特別稅船車稅 十九萬九千七百五十四圓十八錢二厘。

一 市區改正特別稅 (十一萬三千三百四十七圓五十五錢五厘)

區費 (七萬六千三百四十二圓)

所得稅割 八千八百四十五圓三十六錢。

國稅營業稅割 一萬九千三百三十九圓八十五錢。

雜種稅割 二千〇四十三圓五十一錢。
家屋稅割 四萬六千三百三十三圓二十八錢。

▲選舉 本區に於ける府、市、區會議員定員數は府會議員四名、市會議員六名、區會議員四十二名にして選舉有權者は五千六百六十余名あり。

▲住民 京橋區民は全區を通じて商工業者なりと稱するも敢て差支なき程なり、而して其の營業の種類は多種多様なりといふの外なし。

名譽職

▲區會議員 (大正元年十月現在)

- 河合萬五郎 島村藤七 柴田幸三郎
内田彦雄 袴田瀧三郎 尾後貫朝吾郎
長井越作 佐藤作二 三枝代三郎
早川喜兵衛 田村藤兵衛 伊東安兵衛
田中經一郎 葛目猪太郎 森竹五郎

高島徳右工門 尾後貫朝吾郎 佐藤作二

▲府會議員 本區選出定員は四名にして其の氏名左の如し。(大正元年十月現在)

- 内田彦雄 瀨尾新吉 酒井泰
加藤純吾

▲所得稅調查委員 本區に於て選出したる委員左の如し。(大正元年十月現在)

- 酒井泰 松川長右工門 秦源祐
早川庄太郎 吉田幸次郎 長谷川三重
柴田幸三郎

▲京橋區學務委員 十名の學務委員あり其の氏名左の如し。(大正元年十月現在)

- 松尾清次郎 袴田瀧三郎 高島徳右工門
中北庄吉 大平孫兵衛 細谷半兵衛
蜂須賀與平 小原峯太郎 本橋俊之助
並木左傳

- 松尾清次郎 鷺塚清次郎 高島徳右衛門
山科禮藏 西實之助 柴田金五郎
吉井立吉 太田龜次郎 春日井増太郎
麻生金七 長谷川三重 秋田太郎兵衛
山田善之助 瀧島桑次郎 加藤純吾
石黒伊吉 秦源祐 池田鎌太郎
吉野利兵衛 早川庄太郎 齋藤丑五郎
高橋門兵衛 齊田岩太郎 辰澤延次郎
大村五左衛門

以上四十名にして、一級選出十三名、二級選出十四名、三級選出十三名なり、中にて一の部六名、二の部四名、三の部六名、四の部五名、五の部七名、六の部四名、七の部四名、八の部四名を數ふ。因みに七の部議員たりし村田七藏氏、八の部選出議員たりし中澤彦吉氏は共に死亡せし爲欠員となり居れり。

▲市會議員 本區選出定員は六名にして其の氏名左の如し。(大正元年十月現在)

團體

京橋區内には各種の團體ありて、或は教育に、或は衛生に、或は在郷軍人會、或は救濟慈善團體、或は區民相互の親睦を謀る團體等あり、今其重なるものを擧ぐれば左の如し。

▲京橋區教育會 本教育會は其の始め東京市教育會の京橋支會なりしが、明治二十一年三月三日、時勢の進運に鑑みる所あり、京橋區の教育事業を完成し併せて本區教育關係者及び小學兒童保護者の連絡親睦を謀るには從來の組織を改革せざるべからずとなし東京市教育會と分離して本會の設立を見るに至れるなり、本會の目的は京橋區教育事業の完成及び學校と家庭との連絡を圖ることを宣言し、事務所を京橋區役所内に設置し、京橋區民並に教育關係者及び小學兒童保護者を會員とす、經費は會費及び寄

附金を以て支辨す、會員を別ちて通常會、名譽會、員の二となし、會長、副會長各一名、幹事五名、評議員三十名、及び常務主任書記一名を置く。

本會の事業として見るべきものは新佃なる相生橋側に水泳場を設置して水泳を練習せしむる傍ら體力を養成すべく毎年夏期に開場しつゝあり、猶毎二回春秋の頃總會を開き有益なる講話等をなし居れり。

▲帝國在郷軍人會京橋區分會 抑も此の帝國在郷軍人會は、必任義務兵役の法實施以來、在郷軍人を主眼とする尙武團體漸く其の數を加へ、現時各市町村殆んど其設立を見ざるなきの盛況を呈するに至りたり。而して此等の團體は主として在郷軍人の品位を高め、國民の軍中思想を啓發するに努め、以て過去數回の戦役に於て貢獻する所尠少からずとす。然りと雖も其設立及經營は從來全く各郷箇々

のものに屬し、其の目的及行動に關し連繫統一以て之を指導し之を振作するの機關なし、加之來軍の編成は在郷軍人の精銳を必要とすること愈々切實なるを以て復た之を現時の狀態に放任するを許さざるに至れり。依て茲に各市町村に於ける在郷軍人の既設團體を糾合し其の目的を統一にし其の行動を整齊にし、尙ほ未だ其の設備を見ざる地方に於ては其の創立を獎勵し、以て在郷軍人をして地方良民の模範たらしむると同時に益々軍人精神の鍛鍊と、軍事智識の増進とを圖り、併せて會員の相互扶助恩藉の方法を講せしめんとす。是れ帝國在郷軍人會を設立する所以なり。

支那たるなり。

京橋區分會は明治四十四年一月十五日發會式を舉げ事務所を京橋區役所内に設置し居れり。而して京橋區を左の九部に分ち各部に班長及び副班長を置き各部の事務を取扱はせ居れり。

- 第一班 一の部全町。
- 第二班 二の部全町。
- 第三班 三の部全町。
- 第四班 四の部全町。
- 第五班 五の部(月島佃島を除く)
- 第六班 六の部全町。
- 第七班 七の部全町。
- 第八班 八の部全町。
- 第九班 月島、佃島、新佃島全町。

本會の目的、趣意書に記載しあるものと同一にして會員約三千名あり。今現在の本分會役員氏名を擧ぐれば左の如し。

分會長 新富町一ノ六電京二二三 二軍醫 黒澤 芬

分會副長

長崎二ノ五電京一五五二 步少尉 關 仲次郎

理事

(常務) 東漢一ノ二十三電京六八七 三主計 星井忠左衛門
 (全) 新漢一ノ十一電京二九〇二 三軍醫 鈴木勇次郎
 (全) 月島西河岸五ノ二電京一九七三 三軍醫 竹内靜太郎
 (全) 新榮町二ノ一 三軍醫 小栗三吉
 (全) 新富五ノ十四電京二〇六四 三獸醫 須永孝三郎
 (全) 月島東仲十一ノ六電京五四六 步特曹 小林俊朗
 竹川十四共益社電新三三三〇 步中尉 福島 銳雄
 築地二ノ三十電京一八八九 步少尉 柏原市太郎

監事

南鍛冶二十五 二主計 片田江駒三郎
 高代四 熊谷宗太郎
 木挽二ノ十三 國友眞八郎

評議員

木挽九ノ二 一主計 河元九十郎
 南嶺六 二主計 吉田長三郎
 船松二清水方 步少尉 末松 綠二
 銀座一ノ九 步少尉 佐々木玄兵衛

月島東仲八ノ二平野方
 木挽二ノ三
 北紺屋十三
 新佃東一ノ五
 新富三ノ四
 靈岸島町五
 月島西河岸三ノ八
 銀座二ノ十
 因幡一
 南傳馬三ノ八三
 出雲五
 本八一ノ十五
 山下十二
 築地三ノ十五
 南小田原一ノ十四
 南本郷二
 本八二ノ三
 靈鹽九
 築地二ノ四
 尾張二ノ十一

步少尉 佐藤 弘毅
 步少尉 阿部 六郎
 步少尉 藤芳 錦里
 步少尉 濱田 宗三郎
 步少尉 乙骨 安昌
 砲少尉 岡村 岑三郎
 砲少尉 進士 安太郎
 輜少尉 片桐 峯藏
 三軍醫 土屋 貞三
 三藥官 藤田 茂吉
 大塚 盛秀
 押鐘 良藏
 宮原 六郎
 松平 慎四郎
 御園 理兵
 松岡 庄太郎
 田中 勝輔
 山田 留藏
 山口 鏡三郎
 澤井 七之助

中橋和泉五 ●第一班
 班長 南鍛冶十
 副班長 柳五
 組長
 北横二十
 南横十六
 南大工七
 南鍛冶十二
 桶一
 疊六
 中橋廣小路四
 南傳馬三ノ一
 大鋸三
 南鞘二十一
 松川十二
 鈴木一
 且足五
 因幡一
 本材木三ノ二

木村安次郎
 佐久間新太郎
 栗原源藏
 狩野 象吉
 根本 正
 岡宮 德太郎
 室内 伊助
 木内 三郎
 高島 清次郎
 波土場 源次
 片桐 金二郎
 池田 清助
 坂田 金太郎
 栗田 新吉
 永井 誠治
 齋藤 彦藏
 高橋 清之助
 金子 松太郎

中橋和泉六
 北紺屋十六遠州屋方
 南大工六
 ●第二班
 班長 銀座二ノ十電京八八〇
 副班長 弓二十二
 組長
 南紺屋六
 全十七
 弓十
 全二
 彌左衛門十
 鎗屋十四
 水谷九
 銀座一ノ八
 全一ノ七
 全二ノ十三
 全二ノ十
 全二ノ二十二
 全四ノ五清水方

鹿嶋 象吉
 字田川 清吉
 荻村喜久太郎
 青山 收治郎
 竹内 喜太郎
 川村 萬藏
 山崎 幸五郎
 鈴木 政次郎
 丸川 直次郎
 國枝 東一
 清水 正治
 小川 幸次郎
 山本 象藏
 鈴木 孫太郎
 小泉 太郎
 吉田 源三
 田尻 芳次
 松丸 作次郎

三十間堀一ノ一
 西紺屋五
 ●第三班
 班長 出雲四電新二九四
 組長
 元數寄屋一ノ三
 山城二
 加賀四
 三十間堀二ノ三
 加賀三
 竹川十九
 ●第四班
 班長 木挽一ノ十一
 副班長 全三ノ十二
 組長
 木挽一ノ十一
 全一ノ十一
 全一ノ十四
 全一ノ十四
 全二ノ十三

鈴木 慈治
 山口 日出吉
 安藤 勝次
 工條 勝太郎
 山本 平吉
 三橋 清松
 田村 長兵衛
 田邊 秀吉
 德増 英三郎
 田村 謙二
 大石 國太郎
 富樫 作太郎
 藤森 清太郎
 向笠 由次郎
 甲田 藤太郎
 松本 菊三郎

全二ノ十三
全二ノ十三
全二ノ十一長久保方
全三ノ十二
全三ノ十二
全四ノ九
全九ノ四
全十ノ九
采女三十六

●第五班
班長 入船三ノ二
副班長 南八ノ十六
組長

入船三ノ一
全四ノ四
南八ノ十二
新湊二ノ八
南八三ノ九
新榮二ノ一
全四ノ二

進藤 豊次郎
宮川 鐵次郎
板倉 仁七
田中 喜三郎
岡山 竹松
菅沼 繁藏
平林 幸次郎
島田 幸次郎
長谷川惣左衛門

前原 榮次郎
鈴木 傳次郎

磯崎 安太郎
淺井 彦太郎
堀木 柳之助
武藤 新吉
山崎 義貞
清水 與一
平松 捨吉

船松河岸一
新富二ノ四
全三ノ一大崎方
明石三十五天主教會内
本湊二十五
新湊一ノ四
新富四ノ八

●第六班
班長 南小田原三ノ九電京一四二三
副班長 南飯田十
組長

南小田原二ノ二十六龜田方
南飯田一
南飯田一ノ六
全二ノ二十七
上柳原十二
築地一ノ六
全三ノ二十九

●第七班
班長 岡崎二ノ十一電京五八二

鈴木 佐一郎
奥村 忠雄
伊藤 孝吉
小川 武二
横田 庄太郎
仲田 龜吉
淺野 義八
綿谷 元周
石黒 寅松
關 英之助
中島 重五郎
山崎 力之助
飯吉 磯吉
鈴木 傳吉
野口 七郎
福並 定雄
加藤 清次郎

副班長 本八三ノ七
組長

明石二十八
日比谷一
岡崎一ノ四十二
本八一ノ十五
全三ノ五
全四ノ七
長澤九
幸一
永島九
八仲十四
水谷十三
岡崎一ノ一
全二ノ十三
松屋一ノ七
全三ノ九
元島一

●第八班
班長 越前堀一ノ十

松九 宗三

竹内 貞次郎
清水 伊作
山崎 軍次郎
清水 喜太郎
福田 武一
神谷 藤太郎
大久保 保
山本 恒吉
鈴木 熊吉
小島 寅吉
宮 虎吉
藤井 清之助
小野 武一
川名鐵右衛門
井田 彌平
松浦 銀次郎
野村 彦太郎

副班長 全一ノ二
組長

南新堀二ノ十二
全一ノ七森方
靈濱十
靈島二十一
四日市七鈴木方
全一
靈、鹽十六
長崎一ノ二
全一ノ九
越前堀一ノ一
全一ノ十
川口町二十一
全二十三
東湊一ノ二十
全一ノ二十二
全二ノ七
全一ノ二十
長崎一ノ三

犬伏 信吉
村田 久造
井後美之次
渡邊 榮太郎
古川 兼太郎
筒井 彦四郎
清水 幸之助
中村 卯佐二郎
大津 友吉
大橋 常吉
川村 竹藏
笹尾 文治
小島 秀太郎
佐藤 松太郎
石渡 初太郎
原 善藏
中西 要藏
陰山 又七
坂口 鶴三

銀町一ノ三 磯野榮次郎
全一ノ三 千足啓三
新船松十 淺田直吉

●第九班

班長 月島西仲四ノ十二電京四一七 山田貞司
副班長 月島東仲五ノ七 黒岩貞重

組長

月島通四ノ二 中川勇次郎
全西河岸三ノ五 池野長次郎
全一ノ三 渡邊勇太郎
全東仲八ノ二平野方 高橋淳藏
新佃二ノ四 中澤盤次郎
佃島二 柳源次郎

猶本分會に於ては毎年十一月に於て一週間其の年入營すべき壯丁に軍事豫備教育を施しつゝあり。

▲京橋區獎兵義會 本會は明治二十七年京橋區内に本籍を定め徴兵令に依り陸海軍の徵集に應じたる者の勞を慰し且つ兵役を獎勵するを目的として

三、物品消費を依頼せんとするものは其旨本所に申込むべし。

四、消毒物品受取及び返付方は當班人夫をして之を取扱はしむ。

五、消毒實費として物品一釜に付金五十錢全時に二釜以上の依頼者に對しては一釜に付金四十錢の割合を以て患家より實費を徵收す。

六、會員の紹介に依り無料消毒をなす事あるべし。

▲救濟慈善團體 救濟慈善團體としては、左の二會を擧ぐ。其他赤十字社 水難救濟會支部等あり。

女子同情會 本會は社會改善の爲め慈善事業を獎勵し且つ會員相互に風俗を矯だし交情を温むることを目的として明治三十三年六月一日發會式を擧行せられたるものなり。

本會事務所を築地三丁目十五番地に置き、庶務主任一名會計主任一名を置き、會長なくして板垣退助氏

區内の有志者を會員となし創立せられたるものにして、事務所を京橋區役所内に置く。會長は京橋區長藤原利吉氏にして外に幹事十六名、會計主任一名、主任書記一名を置けり。

▲京橋區衛生會 本會は京橋區内に於ける傳染病豫防の方法及其他衛生に關する事業を完成するを目的となし、其方法としては時々演說會又は燈會を擧行する事、衛生月報を發行して衛生思想を普及する事、及び消毒班を設置して依頼に應じ消毒を施行する事等をなし居れり。

本會に會長一名、副會長一名、幹事二十四名、評議員若干名を置き、會長には醫學博士山田鐵藏氏を推選し居れり。

今本會の消毒班なるもの、規則を掲載し置く。

一、本班は區内傳染病患者家の依頼に應じ物品消毒を行ふ所とす。

二、本班を假に京橋區役所内に設置す。

下田歌子氏等を顧問とし委員四十四名を置けり。

保育會

本會は東京女囚携帶乳兒保育會と稱し女囚の携帶乳兒を保育するを目的となし明治三十五年六月十四日發會式を擧行したるものにして板垣退助、清浦奎吾、下田歌子氏を顧問とし、委員數十名を以て組織せられたるものなり。事務所を築地三丁目十五番地に置く。

▲同氣俱樂部 本俱樂部は部員相互交情を温め智識を交換し世務を諮詢するを以て目的として設立されしものにして侯爵蜂須賀茂韶氏を總裁に戴き會員約五百名を有す。築地三丁目十五番地にあり。

▲政治的團體 政治的團體としては公民會、公民俱樂部の二ありしも公民俱樂部は有名無實のものとなりて換ふるに市政講究會となりし形あり。

▲水交社 海軍高等文武官を以て組織し社員相互の友誼を厚くし海軍に關する學術を研究し戰時事變

市街

其他必要の場合に於ては内外國の軍人軍屬又は海員を慰問撫恤し若くは之に關することを攝理するを目的となし築地四丁目に社を設置し、各鎮守府所在地、及要港部所在地に支社を設け社員より二十錢(候補生)以上五圓五十錢(大將迄の會費を徴收す。有栖川宮威仁親王殿下を總裁とし、海軍大將齋藤實氏を社長となす。現在社員は約四千名あり。最初芝公園にありしも赤坂葵町に移轉し後現在地に移りたるものにして、明治二十三年より水交社記事といへる雜誌やうのものを發行し居れり。

▲此の外 日本海員救濟會(元數寄屋町二丁目) 東京地學協會(西紺屋町)、東京統計協會(山城町)、日本電氣協會(鎗屋町)、日本鑛業會(加賀町)、日本貿易協會(宗十郎町)等あれども略す。

馬町一、二、三丁目 中橋和泉町、大鋸町、南靱町、松川町、鈴木町、常盤町、具足町、因幡町、柳町、本材木町三丁目、炭町。戸數は五千八百八十四戸、人口男九千三百四十八人、女七千九百八十八人合計一萬七千二百六十六人なり。東は楓川を隔て、七之部と相對し、西は外濠を隔てて麴町區と相對し、南は京橋川を隔て、二の部と境し、北は日本橋區に隣接せり。此の地は第百六代後陽成天皇の御時、即ち時の將軍徳川家康入國の後、慶長八年東京灣を埋築せられて今日の繁華を來せし所なり。

▲北横町 昔は中橋の入堀なりしも正保年間(徳川家光の時)之を填めて市街となせしが、明暦の火災(四代將軍徳川家綱の時)の後、廣小路を設けて火除地となしたり、享保五年より南北横町藏地となし元文三年其の北部を舊幕府用商人に與へ、天明七年(十一代徳川家齊の時)には其南部を女官に與へたり

▲總説 京橋區の市街は極めて均一なし難き市街なり、一方に都下の代表地たる銀座の如き繁華の極に達したる市街ありと思へば、月島、佃島の如き未だ江戸の俵をさへ止め居る市街あり、さはれ京橋區は銀座邊の煉瓦地を有するを以て他の區に誇るに足れり。京橋區は二百七ヶ町より成り居れるが、市街を分ちて一の部より八の部迄の八箇部に分ち居れり。左に一の部より順を追ふて説述せむ。

一之部

一の部とは左記二十三ヶ町の總稱なり。北横町、南横町、桶町、南大工町、南鍛冶町、五郎兵衛町、疊町、北紺屋町、中橋廣小路町、南傳

仲の屋と稱し居室は殆んど半町ばかりもある大なる家にして玄關先には常に槍長刀など威めしく並べて却々の幅利なりしといふ。

以前は一丁目二丁目に分れ居りしが、明治二年四月一丁目二丁目の稱を廢したり。

讓の井(名所舊蹟欄参照)あり。

戸數四百二十九戸、人口男八百〇九人、女七百人、合計千五百〇九人なり。

▲南大工町 昔は此の町を長崎町と稱せしが、明暦の火災後靈巖島に移して此處に廣小路を設け火除地となせり。然るに元祿年間(第一百二代東山天皇の御時、即ち時の將軍徳川綱吉の頃)日本橋區なる元大工町の代地を此處に給せられしより改めて南大工町と稱せり俗に南鍛冶町界の新路を藪店といふ。

戸數百三十六戸、人口男二百五十二人、女二百十五人、合計四百六十七人なり。

▲南鍛冶町 昔時、鍛冶工の國役を司る者の住居

間の新路を古着新路、北の横町を稻荷新路といふ。戸數百七十三戸、人口男三百十九人、女二百六十八人、合計八百八十七人なり。

▲北紺屋町 昔時、染物屋の國役を司る者住居せし故に名づく。明治二年四月白魚屋敷(名所舊蹟欄参照)を併す。昔は紺屋橋より左の河岸を竹屋町といひしが、今は紺屋橋より左を横河岸、右を大根河岸といふ。

横河岸とは薪炭商人多く住居し、大根河岸とは青物の市場あるが故なり。

戸數二百二十八戸、人口男四百〇二人、女五百五十四人、合計七百五十六人なり。

▲中橋廣小路町 昔は本材木町三丁目より榎川の流れありて入堀をなし紅葉川と稱せしと、茲に架せられたる橋を中橋と呼びしが、正保年間徳川家光の時、中橋以西を埋め、安永三年徳川家治に至りて其の以東を埋めたり(以東は中橋和泉町なり)而して天明七

せしに依り此の名あり。以前は一丁目、二丁目の稱ありしが、明治二年四月之を廢せり。五郎兵衛町に界する方面は市區改正の爲め取潰げられ、やがては鍛冶橋より七の部に至る電車線路の敷設せらるゝ事となり居れり。出世稻荷社(神社佛閣欄参照)あり。戸數四百二十七戸、人口男八百七十七人、女七百〇三人、合計千五百二十人なり。

▲五郎兵衛町 昔、名主五郎兵衛の居宅ありしに依りて此の名あり。明治二年四月狩野探幽の末孫探玄の屋敷を併す。俗に南裏を古着新路と稱せられ今尙一二軒の古着商店ありて、俵を止む。

狩野探幽屋敷跡(名所舊蹟欄参照)

戸數二百三十三戸、人口男四百二十一人、女三百二十七人、合計七百四十八人なり。

▲疊町 昔時、日本橋區なる八重洲河岸にありし人家を移せしものにして、當時幕府の御疊工を司る者住みしを以て此の名あり。俗に北紺屋町に接する

年に至り中橋廣小路町と稱するに至りぬ。埋立以前には中村勘三郎といへる俳優ありて芝居を興行し居たりと(名所舊蹟欄参照)戸數九十九戸、人口男百六十人、女百四十二人、合計三百〇二人なり。

▲中橋和泉町 安永三年中橋入堀即ち紅葉川を埋めたる殘部を新場の和泉屋三郎兵衛なるもの官に請ふて天保十四年に填めて市街を開きたる故に明治二年に至り其の屋敷を取りて中橋和泉町と稱す、又新着場三郎兵衛負地とも稱す。

中橋狩野及び中橋の待合茶屋(名所舊蹟欄参照)戸數二百七十五戸、人口男五百三十六人、女四百四十四人、合計九百五十人。

▲南傳馬町一丁目 昔は寶田村の一部なりしが慶長十一年修城の時、吳服橋内にありし此の町は今所のに移り來れり。昔時驛次の公役夫を出せし故に傳馬の二字を冠して町名となすに至れり、南の字を冠す

るは日本橋區の大傳馬町、小傳馬町及び四谷區、赤坂區の傳馬町と區別せんが爲めなり。
戸數百五十一戸、人口男二百八十九人、女二百二十八人合計五百七十七人

▲南傳馬町二丁目 一丁目に全じ、俗に東側中央の橋町をり店といふ。
千代田稻荷神社(神社佛閣欄参照)

戸數百二十四戸、人口男二四十一人、女百七十七人合計四百十八人なり。

▲南傳馬町三丁目 一丁目に全じ、昔、西裏の新路を京橋稻荷新路といへり、明治二年四月三丁目に合す。

京橋(名所舊蹟参照)
戸數百五十三戸、人口男三百七十七人、女二百五十五人合計五百七十二人なり。

▲大鋸町 昔、府下鋸工の國役を司る者の居宅ありしに依り此の名あり。木挽仲間にては大鋸町のこと

を「をほかり町」といへども之を縮めて「をが町」と唱す亦此邊に桐板屋多かりし爲め、中橋の入堀ありし時は桐河岸と稱したる事あり、南裏の新路を狩野新路といふ。
戸數二百四十二戸、人口男四百三十八人、女三百六十七人合計七百九十七人なり。

▲南鞘町 昔は全所に南塗師町、正木町といふ町ありしが、明治二年四月合併して南鞘町のみとなれり、此の正木町といへるは、昔本材木町より東中通りに連る一條の入堀なりしを元祿年間埋築して市街となせしものなり。亦南鞘町なる町名の由来は日本橋區の北鞘町と全じく、昔時刀劍の鞘を作る職人の住みし地なる故に日本橋の北鞘町に對して南鞘町の名を呼ぶに至りしものなり。

戸數四百四十戸、人口男七百七十一人女六百九十三人合計千四百六十四人なり。

▲松川町 昔は中通り以西を南大工町と全じく長崎

ぶ、常盤町一丁目と稱せし所は即ち茲なり、二丁目と稱せし所は元祿三年残れる入堀を埋築して日本橋川瀬石町の代地となし町名を常盤町と稱す。後に丁目の稱を廢して單に常盤町と稱す。俗に馬屋新路と稱す。
戸數八十三戸、人口男百三十五人、女百〇八人合計二百四十二人なり。

▲具足町 往昔、具足を作る工人の住居せしが故に此の名あり。
清正堂(神社佛閣欄参照)
戸數百八十二戸、人口男三百二十一人、女二百六十一人合計五百八十二人なり。

▲因幡町 同町は炭屋橋筋の右側にある正四角形の町なり。町名沿革は東京市役所等の如き公儀にても未だ詳かにせられざるため、種々なる古書を開き、亦は古老の意見を聞くも、詳かならず。
戸數二百六十七戸、人口男四百七十七人、女四百〇

町廣小路とし、以東は楓川の入堀なりしを、元祿三年に埋築して日本橋區なる南油町、川瀬石町の代地となし松川町と稱して一丁目、二丁目ありしも明治二年之を廢して單に松川町と稱す。
戸數百二十二戸、人口男二百三十二人、女二百十四人合計四百四十六人なり。

▲鈴木町 全町は寛永以前、名主和田源七なる者住居せしに依り其の本姓、鈴木源七の鈴木をとりて名づけしといふ。南に袋新路あり。
戸數二百四十七戸、人口男四百二十一人、女三百六十三人合計七百八十四人なり。

▲常盤町 昔は本材木町より南傳馬町三丁目の東邊迄一條の入堀ありて、水のまに、楓川筋の紅葉を流し浮べし所なりしが、寛永年間其半部を埋築して久寶寺といへる寺院を建立せらるゝに至り、曉の鐘、夕の雨など趣一入深かり所なり。其後元祿年間に至りて幕府の女官太田氏に之を給し太田屋敷と呼

五人合計八百八十二人なり。

▲柳町 同町は以前遊女町なりしなり、昔時道三河岸にありたるもの此の地に移り、後に吉原に轉じたるものなるが、町名の由来は靡くといふ其の柳にも似たる廓の習はしをとりて柳町と名づけたるものなりとぞ。此頃流行せしといふ小唄に、

道のほとりの二本柳風に吹かれてごちらへか。

▲炭町 明暦以前は一丁目二丁目に分ちて北河岸と稱せしが、寛文以來同所に竹材商多きを以て竹屋町又は竹町と呼びなせり今は俗に竹河岸と稱す。

▲木材木町三丁目 本材木町は舊時一丁目より八丁目迄ありしが、一丁目より八丁目迄を、一丁目より

は三の部と隣し、北は京橋川を隔て、一の部と相對せり。

▲南紺屋町 町名由来一の部、北紺屋町と全じ、俗に北の河岸を立賣といふ、一説に舊幕時代太刀を賣る商人多く住みたる故、太刀賣といひ後轉化して立賣といふと、然し今は刀脇差を賣りたる面影も止めず、只大根河岸と稱する青物問屋ある所とて正午十二時頃迄は其雜沓言はん方なし。戸數百九十八戸にして住民は男三百八十七人、女三百三十二人、合計七百十九人なり。

▲西紺屋町 南紺屋町の續にありて京橋區の西端にあり、外濠線の電車往復し西紺屋町電車停留場あり、町名の由来は北紺屋町に全じ。戸數百十戸にて、住民は男二百二十六人、女百七十七人、合計三百九十六人なり。

▲弓町 徳川時代弓矢を作る者の住みしを以て弓町と名づく。明治二年五月南部に柏木休伯なる者の住

三丁目迄となし、明治二年四月一丁目二丁目を日本橋區に屬せしめ、三丁目を京橋區に屬せしむ。河岸池を村木河岸と稱す。

寶田尋常小學校あり(小學校欄参照)
戸數二百六十二戸、人口男四百八十八人、女四百二十九人合計九百〇九人なり。

▲二之部

二の部とは左記十三ヶ町の總稱なり。

南紺屋町、西紺屋町、弓町、彌左衛門町、鎗屋町、新肴町、銀座一丁目、二丁目、三丁目、四丁目、南水谷町、金六町、三十間堀一丁目。

戸數は千六百七十七戸、人口は男三千二百六十一人、女二千七百三十三人合計五千九百九十四人なり。
東は三十間堀川を隔て、木挽町と相對し又は金六町水谷町より木挽町即ち四の部又は南八丁堀即ち五の部と接續し、西は外濠を隔て、麴町區と相對し、南

居せし休伯屋敷を作せて一町となす。東裏を觀世新路、又南横町、北横町等あり。弓町郵便局あり。戸數二百二十七戸にして人口は男四百四十七人、女三百六十一人、合計八百〇八人なり。

▲彌左衛門町 全町は昔八重洲河岸邊にありて老月村といひ町家ありて内町と稱せしが、寛永五年此處に移る、彌左衛門町といへるは當時彌左衛門といふ名主役住みしが爲めに於て、明治の初年には勘左工門屋敷といへるを併せて八重洲河岸の代地と稱したり、二の部の西端にして西南は外濠線の電車と築地行の電車に包まる。戸數七十四戸、人口は男百六十九人、女百十八人、合計二百八十七人なり。

▲鎗屋町 鎗屋町は慶長年間の頃より數多の鎗師の住居せし所なるも今は其の俤を止めず。戸數百三十三戸、住民は男二百五十八人、女二百〇九人、合計四百六十七人なり。
▲新肴町 昔、老月村と稱し、海に臨みて漁人多く

住居せし所なり。今の麴町區八重洲町邊にして、沖に船出の款乃も常に聞かれし所なるが、慶長年間漸次に商家多くなりて内町と稱せり、内町とは、新肴町、疊町、弓町、彌左工門町、新右工門町の五町を指すといふ。後に八重洲河岸と稱し魚市場となされし故に肴町の名あり。寛永五年現在の地に代地を給せられて移轉す。明治五年、本町より日吉町迄の間に東西裏の新路各々一條を開き煉瓦家屋を設けたりしが之より煉瓦地の名稱初まれり、斯の如くにして此の邊は今日の繁榮を來して、さる昔の夢物語の跡を想像するに由もなし。戸數六十二戸、住民男百三十六人、女二百九人、合計三百四十五人なり。

▲銀座一丁目 此の町の邊を初め八丁堀より西南の地は慶長八年麴町區日比谷門邊に至る一帶の入海を埋築せしものなるが、以前は新兩替町と稱せり、元銀座のありし所なるが故なり。慶長十七年徳川氏駿府の銀座を此の地に移し以後寛政十二年に及びぬ。

二八

其後享保年間に至り銀座は日本橋區なる彌敷町へ移轉したるにも拘はらず其儘呼びなし來りて今の町名となり終りたり。里俗京橋の左角を四方店と稱し、西裏の新路を丸太新路と稱す。舊時は一丁目と二丁目の間の東横町を花町と呼べり、明治二年五月四方店及び昔時の三十間堀一丁目を合せて銀座一丁目を作る。明治五年二月火災後煉瓦の家屋を作る、東裏河岸を銀座一丁目裏河岸と呼ぶ。戸數百三十三戸、人口男二百六十一人、女二百四十人、合計五百〇一人なり。

▲銀座二丁目 銀座一丁目の南にあり。明治二年五月新兩替町二丁目、舊三十間堀二丁目を合せて一町となし銀座二丁目と改む、而して舊三十間堀二丁目を銀座二丁目裏河岸と稱す。此の河岸以南の地を西豊玉河岸といふ。戸數百七十九戸、人口男三百六十六人、女二百六十三人、合計六百二十三人なり。

▲銀座三丁目 明治二年新兩替町三丁目、舊三十間

堀三丁目を併せて一町となし銀座三丁目と改稱す。西の新路を觀世新路といふ。昔、猿樂師觀世某の住居せしが故なり、河岸地を銀座三丁目裏河岸と稱す。戸數百六十二戸、人口男三百二十八人、女二百六十六人、合計五百八十八人なり。

▲銀座四丁目 本町は以前銀座にあらず、只銀座に接しむたりしを以て新兩替町四丁目となし明治二年五月銀座四丁目と改稱す。戸數百二十戸、人口男二百七十七人、女百九十四人、合計四百七十一人なり。

▲南水谷町 慶長年間徳川家康開府の頃は、金六町と共に京橋入川筋と稱したりしが後市街地となしたり。明暦の大火後火除地となり。享保年間には白魚商人の借地となりて市場となしたり。明治二年白魚屋敷及び金六町の一部を合せて一町となし京橋水谷町と名づく。明治四十三年南水谷町と改稱す。戸數五十三戸、人口男八十七人、女九十四人、合計百八十一人なり。

二九

▲金六町 徳川開府時代は南水谷町と全じく京橋入川筋と稱せし所なり。柴田金六なるもの此の地の開きて自己の名前を附し町名となしたりと。明暦の大火後は久しく空地なりしが、享保十三年南水谷町と共に白魚商人の借地となり白魚屋敷と稱せしも明治二年官收して本町に併す。

白魚屋敷(名所舊蹟欄参照)

戸數百戸、人口男二百人、女百七十七人、合計三百七十七人なり。

▲三十間堀一丁目 三十間堀町は以前一丁目より八丁目迄ありしが、一丁目より三丁目迄は銀座町に附屬せしめ、四丁目を以て三十間堀一丁目と改稱せられぬ。時に明治二年五月なり。此の堀を始め三三間に鑿りしが故に此の名あり。文政十一年淺瀬の折り、兩岸を埋立て、廣さ十九間となしたり。戸數六十六戸、人口男百二十五人、女百六人、合計二百三十一人なり。

▲三之部

三の部とは左記二十三ヶ町なり。

三十間堀二丁目、三十間堀三丁目、元數寄屋町一丁目、二丁目、三丁目、四丁目、尾張町一丁目、二丁目、尾張町新地、南鍋町一丁目、二丁目、山下町、宗十郎町、山城町、南佐柄木町、瀧山町、八官町、加賀町、日吉町、丸屋町、南金六町、出雲町、竹川町。

戸數は二千五百十九戸にして、人口は男三千七百六十六人、女四千四百九十一人合計八千二百五十七人なり、東は三十間堀川を隔て、四の部即ち木挽町と相對し、西は外濠を隔て、麴町區と相對し、南は沙留川を隔て芝區と境し、北は數寄屋橋より築地方面に往復する電車線路を隔て、二の部と相隣せり。三の部は亦一の部、二の部と全しく慶長八年日比谷入海を埋築せられたるものなり。

▲三十間堀二丁目 二の部三十間堀一丁目の沿革に全じ、舊時の三十間堀五丁目の所なり又尾張町一丁目裏河岸ともいふ。

戸數六十六戸、人口男百五十八人、女百十八人、合計二百七十六人なり。

▲三十間堀三丁目 舊時の三十間堀六、七丁目を合せ稱する所にして沿革は一、二丁目に全じ、舊時の六丁目を尾張町二丁目裏河岸といひ、七丁目を竹川町裏河岸と稱す。

戸數百三十一戸、人口男百八十八人、女二百〇二人、合計三百九十人なり。

▲元數寄屋町一丁目 慶長の頃、織田信長の弟、織田有樂齋といへる茶の湯の名人にて利休の弟子なりし人の邸宅ありて庭園の眺め殊の外美しく中にも數寄屋は一入時に激賞されたり故此の名ありともいひ亦一説には舊幕府時代數寄屋坊主の宅ありし故なりとも稱す。元祿十一年に火除地となりて市

店は吳服橋外の代地に移りしが、寶永年間再び市店を開くに及び元の字を冠して吳服橋外即ち日本橋區の數寄屋町と區別するに至りしなり、昔、山下町との間の河岸を日陰町と稱せしも今は口にするものなし。

戸數六十四戸、人口男百〇四人、女八十五人、合計百九十四人なり。

▲元數寄屋町二丁目 沿革一丁目と全じ。

戸數四十一戸、人口男百〇九人、女八七六人、合計百九十五人なり。

▲元數寄屋町三丁目 沿革一丁目と全じ、里俗古木店又は古着店と稱す。戸數三十二戸、人口男八十一人、女六十七人、合計百四十八人なり。

▲元數寄屋町四丁目 沿革一丁目に全じ。戸數三十一戸、人口男五十五人、女四十七人、合計百〇二人なり。

▲尾張町一丁目 徳川家康入國の時、尾張の人某を

此處に住居せしめし故に名づくと稱するも、徳川實記によれば、慶長八年市街修治の折り、役夫の國名に取りて名づけし如くなり、元和年間及び承應年間の地圖には共に一丁目二丁目と記しあり更に西横町を入間町と記しあり、元祿十一年元數寄屋町より三十間堀五丁目即ち今の一丁目に至る廣小路を設けられし時用地となりて北方三分の二を官收せられたる事あり今の尾張町新地即ち是なり其の新地の外は元地と稱せしも明治二年五月尾張町一丁目、二丁目、尾張町新地と稱するに至りぬ。

戸數四十戸、人口男九十六人、女六十八人、合計百六十四人なり。

▲尾張町二丁目 沿革一丁目に全じ。戸數九十二戸、人口男二百二十二人、女百六十二人、合計三百八十四人なり。

▲尾張町新地 沿革一丁目に詳なり、舊時は毎歲二三月の頃、雛人形の市ありたり。戸數九十二戸、

人口男百九十四人、女百六十一人、合計三百五十五人なり。

▲南鍋町一丁目 昔、長谷川豊後といへる鑄物師の受領地なりし故に此の名あり。戸數百〇八戸、人口男百九十八人、女百七十五人、合計三百七十三人なり。

▲南鍋町二丁目 町名の由来は一丁目に全じ。明治二年十二月東に守山町と稱する町ありたりしを併せて二丁目と稱す。戸數八十八戸、人口男百三十四人、女百五十四人、合計二百八十八人なり。

▲山下町 山下門外にあるを以て名づく。戸數百二十七戸、人口男二百〇三人、女二百二十八人、合計四百三十一人なり。

▲宗十郎町 名主内山惣十郎の住宅ありしに依り此の名あり、昔は屋根屋の住みし處にして誠に淋しき町なりしといふ。

は竹山町とあり、明暦年間の地圖には竹屋町とあり。又一説には名主瀧山藤吉の居宅ありし故なりともいふ。

戸數六十九戸、人口男百十三人、女百二十三人、合計二百三十六人なり。

▲八官町 元和年間、ハチクワンといへる阿蘭陀人に宅地を給せられしに依り此の名あり。亦ハチクワンは支那人なりともいへど阿蘭陀人の方確なるが如し。明治二年五月近地にありし佐兵工町、嘉兵工町を併せて一町となす。

戸數百七十七戸、人口男二百十六人、女二百二十四人、合計五百四十人なり。

▲加賀町 名主加賀平右衛門の開拓に係るが故に此の名あり。

戸數百八十五戸、人口男三百九十一人、女三百三十八人、合計百二十九人なり。

▲日吉町 日吉町は以前麴町區半藏門外に山王社ありし折り其の門前にありし町にして當時は山王町と稱したり、萬治年間山王社を永田馬場に移すに當り山王町は現在の地に代地を給して移轉せしめられたり。明治二年五月山王社を日吉社即ち日枝神社と改稱せられしに依り、東側にありたる南大阪町を併せて一町となして日吉町と改められたり。町内に甘酒新道、板新道等の俗稱あり。

戸數二百二十六戸、人口男二百六十四人、女五百十六人、合計七百八十八人なり。

▲丸屋町 町名の由来は不明なれども寛永頃の地圖には既に記載しあるを以てみれば餘程古くよりの稱なるべし。明治二年五月東側に寄合町と稱する町ありしも合併して一町となす。西端に土橋あり、今は土の橋にはあらざれども昔の儀呼びなし來りて土橋と稱し此の邊の事を俗に土橋といはる。

戸數二百十九戸、人口男九十三人、女百二十六人、合計二百十九人なり。

戸數百四十二戸、人口男百九十一人、女二百五十四人、合計四百四十五人なり。

▲山城町 往時、幕府用達釜師谷山城なるもの住居せし故に此の名ありといふが、亦一説には慶長八年埋立の際役夫の國名に取りしものなりとも稱す。以前隣地に筑波町といへる町ありしが、明治二年五月合併して山城町と稱するに至りぬ。外濠に沿ひたる河岸を山城河岸と稱す。

戸數百〇四戸、人口男百七十一人、女百七十七人、合計三百四十八人なり。

▲南佐柄木町 幕府の御研師佐柄木彌太郎の拜領地なりし故に名づく、神田區に身内の者分離し佐柄木町と稱する故に南の字を加へて之を別つと。

戸數九十八戸、人口男百五十人、女百三十八人、合計二百八十八人なり。

▲瀧山町 里俗に昔竹籤續きて竹山町に及びし故に此の名ありといふ。元和年間及び寛永年間の地圖に

▲南金六町 以前は出雲町の地なりしが、寶永年間芝口門造營の時用地となりて外に移り享保年間、芝口門を廢せし後、元と京橋より移りし八丁堀の金六町と北紺屋町とを移して芝口金六町又は芝口北紺屋町と稱せり。明治二年十二月に至り金春屋敷一名所舊蹟欄參照を併せて南金六町と改稱したり。町内に金春新道、信樂新道等の俗稱あり。

戸數百五十九戸、人口男二百人、女四百五十九人、合計六百五十九人なり。

▲出雲町 昔は新橋北詰迄南金六町を通して出雲町なりしが寶永七年芝口門造營の時町の半部（今の南金六町）は用地となり其後芝口門廢せらるゝに至りて南金六町出來したり。昔は塗物道具屋多く、また今の南金六町にかけて鹽問屋多かりしといふ。明治二年十二月三十間堀八丁目及び内山町を併せて出雲町となす。舊二十間堀八丁目を出雲町裏河岸と稱す。戸數九十五戸、人口男百三十一人、女二百二十二人、

合計三百四十三人なり。

▲竹川町 東京府志料に曰く此地昔時竹林ありて竹を賣るものあり故に明暦の頃竹屋町といふ。而も寛永中の二圖共に竹川町に作り承明等之圖に竹屋町とあるは即ち竹山町にして今の瀧山町なり。兎に角竹籾ありて竹を賣る店ありしが故に瀧山町と共に竹屋町など稱し後に竹川町と轉訛したるもの、如し。

舊時義田、糸屋等の朱座ありし地なり、朱座は始め尾張町にありたれども後此處に移りしといふ。

戸數百三十三戸、人口男二百〇四人、女二百七十八人、合計四百八十二人なり。

▲四之部

四の部とは左記十一ヶ町の總稱なり。

木挽町一丁目、二丁目、三丁目、四丁目、五丁目、六丁目、七丁目、八丁目、九丁目、十丁目、采女町。

戸數は三千六百三十戸、人口は男六千七百四十五人、女五千七百八十八人、合計一萬二千五百三十三人なり、東は築掛川を隔て、六の部即ち築地と相對し、西は三十間堀川を隔て、二の部の部と相對し、南は汐留川を隔て、芝區と接し、北は五の部及び二の部に相連なれり。

▲木挽町一丁目 以前は東京灣の波に洗はれるたりしを萬治年間埋立てられたる所にして江戸城修築の際、木挽職人の多く住居せし所なるが故に名づけて木挽町とも木引町とも書きたりしを後木挽と書くに至りたり。明暦年間の火災前は多し寺地ありたりしも其後他へ移し、大名の藏屋敷、下屋敷など作られたり。明治七年十月松町及び華族伊達氏の別邸其附近の土地を併せて木挽町となる。西河岸通り即ち三十間堀沿岸を東豊玉河岸といふ。

戸數一千二百三十四戸、人口男二千三百二十五人、女二千九百六十四人、合計四千二百八十九人なり。

▲木挽町二丁目 一丁目に全じ、明治七年華族龜井氏の邸を併す。

戸數八百八十七戸、人口男一千五百八十八人、女一千三百九十三人、合計二千九百八十一人なり。

▲木挽町三丁目 以前、熊本藩細川氏の別邸ありしが維新後西尾藩松平氏之に居住し、明治五年官收して海軍操練場となし次で土木寮用地とし明治七年一月内務省に屬し又其後工部省に屬したりしが明治七年十月之を併せて三丁目を作る。

戸數五百三十三戸、人口男九百九十三人、女八百六十五人、合計一千八百五十八人なり。

▲木挽町四丁目 沿革一丁目に全じ。

戸數六十二戸、人口男百三十二人、女百十七人、合計二百四十九人なり。

▲木挽町五丁目 沿革一丁目に全じ、萬治三年劇場森田座を設置せしも天保十四年淺草猿若町に移りたり。戸數五十六戸、人口男百四十六人、女百三十一人

人、合計二百七十七人なり。

▲木挽町六丁目 一丁目に全じ、五丁目の南にあり。戸數百四十五戸、人口男二百八十二人、女百八十二人、合計四百六十四人なり。

▲木挽町七丁目 六丁目の南、汐留川と三十間堀川と相合する所にあり、其他一丁目と全じ。

戸數十二戸、人口男十四人、女十七人、合計三十一人。

▲木挽町八丁目 明治五年 舊中津藩奥平氏、山上藩稻垣氏、及び新發田藩溝口氏、川越藩松井氏等の邸宅及び附近の士族屋敷を合せて八丁目となしたり。今の遞信省のある所 即ち是なり。

戸數十六戸、人口男三十六人、女十七人、合計五十三人なり。

▲木挽町九丁目 八丁目の北にあり、文化九年以來新發田藩溝口氏の別邸及び士族屋敷なりしが、明治五年八丁目の内に入り明治七年別れて獨立し八丁目と接するを以て九丁目と稱するに至れり。

合計一千二百二十五人なり。

▲五之部

五の部とは左記九十ヶ町の總稱なり。

新富町一丁目、二丁目、三丁目、四丁目、五丁目、六丁目、七丁目、南八丁堀一丁目、二丁目、三丁目、入船町一丁目、二丁目、三丁目、四丁目、五丁目、新津町一丁目、二丁目、三丁目、四丁目、五丁目、明石町、船松町、本港町、月島通一丁目、二丁目、三丁目、四丁目、五丁目、六丁目、七丁目、八丁目、九丁目、十丁目、月島東中通一丁目、二丁目、三丁目、四丁目、五丁目、六丁目、七丁目、八丁目、九丁目、十丁目、月島東河岸通一丁目、二丁目、三丁目、四丁目、五丁目、六丁目、七丁目、八丁目、九丁目、十丁目、月島西中通一丁目、九丁目、十丁目、十一丁目、月島西中通一丁

戸數二百五十五戸、人口男四百四十一人、女四百十四人、合計八百五十五人なり。

▲木挽町十丁目 以前は舊川越藩松井氏別邸及び士族屋敷なりしが、明治五年八丁目の内に編入し明治七年獨立して一町を成し九丁目と接するを以て十丁目と稱するに至りぬ。今の農商務省のある所なり。

戸數八十一戸、人口男百七十八人、女百五十八人、合計三百二十八人なり。

▲采女町 往時松平采女正の邸宅ありしに依り此の名あり、享保九年の火災後空地となり俗に采女ヶ原と稱せり、後調馬場を設けしが芝西應寺の代地、赤坂氷川屋敷、木挽町新屋敷等となり呼んで廣小踏とも稱せり、當時は屋敷の堀に浴ふて小屋掛、霞張軒を並べ夜更けとなれば帯を抱へし辻君の出沒せし所なりと。明治二年七月采女ヶ原の稱に取りて采女町と名づく、築地精養軒のある所なり。

目、二丁目、三丁目、四丁目、五丁目、六丁目、七丁目、八丁目、九丁目、十丁目、十一丁目、月島西河岸通一丁目、二丁目、三丁目、四丁目、五丁目、六丁目、七丁目、八丁目、九丁目、十丁目、十一丁目、十二丁目、佃島、新佃島、東町一丁目、二丁目、三丁目、新佃島西町一丁目、二丁目、三丁目。

戸數一萬一千七百七十六戸、人口男二萬二千五百九十六人、女一萬九千二百十九人、合計四萬一千八百十五人あり。

東は東京灣に臨み、西は四の部及び二の部に隣し、南は築地川を隔て、六の部に境し、北は櫻川を隔てて七の部と境せり。

▲新富町一丁目 以前は膳所藩本多氏の邸宅及び産根藩井伊氏の別邸其他士族屋敷ありしも維新後之を公收して花街の地となし新島原と稱したり、新島原とは當時の町名八重咲町、千歳町、青柳町、初音町、松ヶ枝町、吳竹町、梅ヶ枝町、櫻木町、花園町の總

稱なりき。明治四年遊女屋悉く新吉原に合併し、附近なる大富町を合せ新島原八重咲町の地を以て新富町一丁目と改稱せらるゝに至りぬ。當時の町名大富町なるものは安永七年南八丁堀の名主市藏が市肆を開きて町名を加へし處なりと今俗に蜷河岸と稱す。明治二十五年に至り木挽町の一部分を本町に合併したり。

戸數二百十八戸にして人口男三百七十七人、女三百五十三人、合計七百三十人なり。

▲新富町二丁目 一丁目と全じ、舊新島原梅ヶ枝町と稱せし地なり。

戸數百十九戸にして人口男百七十二人、女二百六十八人、合計三百八十八人なり。

▲新富町三丁目 一丁目と全じ。舊新島原吳竹町、青柳町一丁目二丁目と稱せし地なり。

戸數百五十八戸にして人口男三百三十五人、女三百一人、合計六百三十六人なり。

▲新富町四丁目 一丁目と全一なり。舊新島原初音町一二丁目と稱せし地。

戸數二百九十八戸、人口男四百七十三人、女四百一十一人、合計八百九十四人なり。

▲新富町五丁目 沿革は一丁目と全一にして、舊新島原花園町と稱せし地なり。

戸數百八十二戸、人口男三百二十一人、女三百二十一人、合計六百三十三人なり。

▲新富町六丁目 一丁目と全じ。舊新島原櫻木町、千歳町と稱せし地なり。

戸數九十戸、人口男百三十八人、女百三十一人、合計二百六十九人なり。

▲新富町七丁目 一丁目に全じ。舊新島原松枝町と稱せし地なり。

戸數百六十五戸、人口男二百五十一人、女二百六十九人、合計五百二十一人なり。

▲南八丁堀一丁目 櫻川を隔て、八丁堀に沿ひ而して本八丁堀の南に當るを以て南八丁堀といふ。以前は一丁目より五丁目迄ありしも寛永の頃四丁目を用地となして四丁目の稱を廢し、明治七年十二月亦五丁目を廢して三丁目に合併す。寛永年代は多く寺地なりしと。戸數二百四十六戸、人口男四百四十人、女四百二十人、合計八百六十六人なり。

▲南八丁堀二丁目 沿革一丁目と全一なり。

戸數百八十三戸、人口男三百四十二人、女二百九十七人、合計六百三十九人なり。

▲南八丁堀三丁目 一丁目に同じ。

戸數百五十三戸、人口男二百二十八人、女二百四十一人、合計五百六十九人なり。

▲入船町一丁目 以前は彦根藩井伊氏、篠山藩青山氏、川越藩松井氏、小久保藩田沼氏等の別邸、及岡藩中川氏の邸宅等ありしが、明治元年十二月外國人居留地を此の邊に設けたりし時官收して入船町と稱す。初め一丁目より八丁目迄ありたりしも七丁目八

丁目は明治三十二年廢して明石町に合併したり。戸數百七十一戸、人口男二百八十四人、女二百五十五人、合計五百三十九人なり。

▲入船町二丁目 一丁目に全じ。西を流るゝ入船川岸を新富河岸と稱す。

戸數百五十三戸、人口男二百七十七人、女二百二十二

人、合計四百九十二人なり。

▲入船町三丁目 沿革一丁目と全一なり。

戸數百六十四戸、人口男三百四十六人、女二百六十九人、合計六百五十五人なり。

▲入船町四丁目 沿革一丁目と全一なり。

戸數百八十戸、人口男三百五十二人、女二百九十九人、合計六百五十一人。

▲入船町五丁目 沿革一丁目と全一なり。

戸數二百二十九戸、人口男三百七十五人、女三百五十六人、合計七百三十一人なり。

▲入船町六丁目 明治元年十二月築地川の一部分を

埋築せし地なるが沿革等は一丁目と全一なり。
戸數三十七戸、人口男七十七人、女四十八人、合計百二十五人なり。

▲新榮町一丁目 徳島藩蜂須賀氏、中津藩奥平氏の別邸及び尼ヶ崎藩櫻井氏の邸宅等ありしも明治元年十二月宮收して市街となし新榮町なる町名を附したり。初め七丁目迄ありしも明治三十二年九月廢して六丁目七丁目を明石町に合併す。

戸數三百三十四戸、人口男六百〇六人、女四百六十九人、合計一千七十五人なり。

▲新榮町二丁目 一丁目と全一なり。
戸數二百〇三戸、人口男三百九十六人、女三百二十七人、合計七百二十三三人なり。

▲新榮町三丁目 一丁目と全一なり。
戸數二百四十二戸、人口男四百二十六人、女三百〇六人、合計七百三十二人なり。

▲新榮町四丁目 一丁目に全じ。

▲新港町四丁目 一丁目に全じ。
戸數七十八戸、人口男四十八人、女百三十二人、合計二百八十人なり。

▲新港町五丁目 一丁目に全じ。
戸數六十三戸、人口男百二十六人、女百〇一人、合計二百二十七人なり。

▲明石町 以前は小なる町に過ぎざりしも、明治三十二年九月入船町七丁目八丁目、新榮町六丁目七丁目、新港町六丁目七丁目を合併して大なる町となりたり。此の町名の由來は播州明石の浦に似たるを以て名づけたりともいひ昔播州明石の漁人來住せしを以て名づけたりともいふ。明治元年には附近の十軒阿船松町二丁目を合併し官收して外國人居留地となしたり。

戸數百六十二戸、人口男三百五十四人、女三百三十八人、合計六百九十二人なり。
▲船松町 俗に鐵砲洲と稱する所の内にして以前飯

戸數三百〇七戸、人口男五百七十七人、女四百七十八人、合計一千〇五十五人なり。

▲新榮町五丁目 一丁目に全じ。
戸數百九十一戸、人口男二百三十二人、女二百六十四人、合計五百九十六人なり。

▲新港町一丁目 俗に鐵砲洲と稱する所にして以前は蜂須賀、奥平二華族の別邸等ありしも明治元年官收して町名を附し一丁目より七丁目迄に別ちたり、明治三十二年九月六丁目七丁目の稱を廢して明石町に合併す。戸數三百五十七戸、人口男四百四十六人、女五百六十八人、合計一千〇四十四人なり。

▲新港町二丁目 沿革一丁目と全一なり。
戸數百六十三戸、人口男二百七十六人、女二百三十七人、合計五百十三人なり。

▲新港町三丁目 沿革一丁目と全一なり。
戸數二百〇六戸、人口男三百六十八人、女二百八十九人、合計六百四十九人なり。

野藩保科氏 飯山藩本多氏の邸宅ありしが、寶永年間幕府に上地して市店を開きて船松町一丁目と稱したり。慶應三年に至り二丁目を併せて丁目の稱を廢す。

戸數五百九十一戸、人口男一千百〇一人、女九百五十四人、合計二千〇五十五人なり。

▲本港町 昔が池なりしを埋めて市地となしたる所にして船船の出入頻繁なるを以て此の名あり。鐵砲洲なる俗稱あり、寛永年間大砲演習所なりしが故なり。戸數七百三十八戸、人口男一千三百二十二、女一千七百七十九人、合計二千五百〇一人なり。

▲月島地一丁目 明治十八年東京府技師倉田吉嗣氏の設計に依り日本土木會社之を請負ひて埋築したる土地にして中央に東より西に貫ぬく月島川あり、河北は明治二十五年十二月市有地として町名を作り、河南即ち二號地は明治二十七年十二月市有地となして町名を附したり、面積十四萬九千八百坪八合五勺

(新埋築の三號地を除く)あり。
戸數五十九戸、人口男百十七人、女八十四人、合計二百〇一人なり。

▲月島通二丁目 沿革一丁目に全じ。
戸數百七十六戸、人口男三百九十八人、女三百十四人、合計七百十二人なり。

▲月島通三丁目 一丁目に全じ。
戸數百九十一戸、人口男四百三十人、女三百六十六人、合計七百四十六人なり。

▲月島通四丁目 一丁目に全じ。
戸數百六十八戸、人口男三百六十六人、女二百八十人、合計六百七十六人なり。

▲月島通五丁目 一丁目に全じ。
戸數百六十八戸、人口男三百八十三人、女二百八十八人、合計六百七十一人なり。

▲月島通六丁目 一丁目に全じ。南に月島川あり。
戸數十五戸、人口男四十三人、女三十一人、合計七十四人なり。

▲月島東中通二丁目 通一丁目に全じ。
戸數百二十四戸、人口男二百四十五人、女二百人、合計四百四十五人なり。

▲月島東中通三丁目 通一丁目に全じ。
戸數百六十三戸、人口男三百三十二人、女二百〇二人、合計六百三十四人なり。

▲月島東中通四丁目 通一丁目に全じ。
戸數百七十二戸、人口男三百六十二人、女二百七十九人、合計六百四十一人なり。

▲月島東中通五丁目 通一丁目に全じ。
戸數百〇六戸、人口男二百三十五人、女百七十六人、合計四百四十一人なり。

▲月島東中通六丁目 通一丁目に全じ。
戸數二十二戸、人口男四十一人、女二十九人、合計七十人なり。

▲月島東中通七丁目 月島川を北に控ゆ。

十四人なり。

▲月島通七丁目 一丁目に全じ、北に月島川あり。
戸數十戸、人口男十七人、女十五人、合計三十二人。

▲月島通八丁目 一丁目に全じ。
戸數五十三戸、人口男百二十四人、女九十五人、合計二百十九人なり。

▲月島通九丁目 一丁目に全じ。
戸數百三十五戸、人口男二百七十八人、女二百三十七人、合計五百〇七人なり。

▲月島通十丁目 一丁目と全一なり。
戸數百十九戸、人口男二百七十四人、女二百二十四人、合計四百九十八人なり。

▲月島通十一丁目 一丁目に全じ。
戸數四十八戸、人口男百〇六人、女八十六人、合計百九十二人なり。

▲月島東中通一丁目 通一丁目に全じ。
戸數十八戸、人口男四十六人、女四十一人、合計八十七人なり。

▲月島東中通二丁目 七丁目の南にあり。
戸數十六戸、人口男五十二人、女三十二人、合計八十四人なり。

▲月島東中通九丁目 八丁目の南にあり。
戸數五十一戸、人口男百〇一人、女九十四人、合計百九十五人なり。

▲月島東中通十丁目 九丁目の南にあり。
戸數五十三戸、人口男百十七人、女百〇二人、合計二百十九人なり。

▲月島東中通十一丁目 十丁目の南にあり。南には新島埋築せられたり。
戸數三十七戸、人口男五十九人、女六十六人、合計百二十五人なり。

▲月島東河岸通一丁目 東は東京灣に臨み、北に佃川あり。
戸數十二戸、人口男二十四人、女十四人、合計三十八人なり。

八人なり。

▲月島東河岸通二丁目 一丁目の南にあり。戸數四戸、人口男十二人、女十人、合計二十二なり。

▲月島東河岸通三丁目 二丁目の南にあり。戸數なし、人口無し。

▲月島東河岸通四丁目 三丁目の南にあり。戸數なし、人口無し。

▲月島東河岸通五丁目 四丁目の南にあり。戸數二戸、人口男四人、女一人、合計五人なり。

▲月島東河岸通六丁目 月島川の北に位す。戸數二戸、人口男三人、女一人、合計七人なり。

▲月島東河岸通七丁目 月島川の南にあり。戸數三戸、人口男六人、女三人、合計九人なり。

▲月島東河岸通八丁目 七丁目の南にあり。戸數一戸、人口男一人、女無し、合計一人なり。

▲月島東河岸通九丁目 八丁目の南にあり。戸數十一戸、人口男二十一人、女二十二、合計四十七人、合計一千二百二十人なり。

▲月島西中通五丁目 四丁目の南にあり。戸數百十七戸、人口男二百五十四人、女百九十一人、合計四百四十五人なり。

▲月島西中通六丁目 五丁目の南にあり。戸數五戸、人口男七人、女六人、合計十三人あり。

▲月島西中通七丁目 六丁目の南にありて中間に月島川あり。

▲月島西中通八丁目 七丁目の南にあり。戸數三戸、人口男五人、女七人、合計十二人なり。

▲月島西中通九丁目 八丁目の南にあり。戸數五戸、人口男十人、女六人、合計十六人なり。

▲月島西中通十丁目 九丁目の南にあり。戸數二十四戸、人口男四十九人、女四十人、合計八十九人なり。

▲月島西中通十一丁目 十丁目の南にあり。戸數三戸、人口男十八人、女五人、合計十五人なり。

▲月島東河岸通十一丁目 十丁目の南にあり。戸數一戸、人口男五人、女三人、合計八人なり。

▲月島西中通一丁目 月島通一丁目の西にあり。北に佃川を控ゆ。戸數百四十戸、人口男二百六十八人、女二百二十二、合計四百九十八人なり。

▲月島西中通二丁目 一丁目の南にあり。戸數二百〇三戸、人口男五百九十八人、女五百三十三人、合計一千二百三十一人なり。

▲月島西中通三丁目 二丁目の南にあり。戸數三百戸、人口男六百二十八人、女二百九十六人、合計九百二十四人なり。

十三人なり。

▲月島東河岸通十丁目 九丁目の南にあり。戸數三戸、人口男十八人、女五人、合計十五人なり。

▲月島東河岸通十一丁目 十丁目の南にあり。戸數一戸、人口男五人、女三人、合計八人なり。

▲月島西中通一丁目 月島通一丁目の西にあり。北に佃川を控ゆ。戸數百四十戸、人口男二百六十八人、女二百二十二、合計四百九十八人なり。

▲月島西中通二丁目 一丁目の南にあり。戸數二百〇三戸、人口男五百九十八人、女五百三十三人、合計一千二百三十一人なり。

▲月島西中通三丁目 二丁目の南にあり。戸數三百戸、人口男六百二十八人、女二百九十六人、合計九百二十四人なり。

▲月島西中通四丁目 三丁目の南にあり。戸數三百二十八戸、人口男六百四十三人、女五百七十三人、合計一千二百一十六人なり。

▲月島西中通十一丁目 十丁目の南にありて其の南には埋築せられたる新島あり。

▲月島西中通十二丁目 十丁目の南にありて其の南には埋築せられたる新島あり。

▲月島西中通十三丁目 西中通りの西にして一丁目より十一丁目迄大川の本流に沿ふ。

▲月島西中通十四丁目 人口男三百人、女二百九十九人、合計五百九十九人なり。

▲月島西河岸通二丁目 一丁目の南にあり。戸數百三十三戸、人口男二百八十八人、女二百四十五人、合計五百三十三人なり。

▲月島西河岸通三丁目 二丁目の南にあり。戸數百六十一戸、人口男三百十九人、女二百八十七人、合計六百〇六人なり。

▲月島西河岸通四丁目 三丁目の南にありて築地へ渡る渡船場あり。

▲月島西河岸通五丁目 三丁目の南にありて築地へ渡る渡船場あり。

▲月島西河岸通六丁目 三丁目の南にありて築地へ渡る渡船場あり。

▲月島西河岸通七丁目 三丁目の南にありて築地へ渡る渡船場あり。

▲月島西河岸通八丁目 三丁目の南にありて築地へ渡る渡船場あり。

▲月島西河岸通九丁目 三丁目の南にありて築地へ渡る渡船場あり。

▲月島西河岸通十丁目 三丁目の南にありて築地へ渡る渡船場あり。

二百十八人なり。

▲月島西河岸通五丁目 四丁目の南にあり。戸數七十六戸、人口男百五十四人、女百三十七人、合計二百九十一人なり。

▲月島西河岸通六丁目 五丁目の南にあり。戸數三戸、人口男二人、女三人、合計六人なり。

▲月島西河岸通七丁目 六丁目の南にあり。戸數無し、人口男無し、女無し。

▲月島西河岸通八丁目 七丁目の南にあり。戸數一戸、人口男一人、女一人、合計二人なり。

▲月島西河岸通九丁目 八丁目の南にあり。戸數二戸、人口男四人、女二人、合計六人なり。

▲月島西河岸通十丁目 九丁目の南にあり。戸數無し、人口無し。

▲月島西河岸通十一丁目 十丁目の南にありて其南には埋築せられたる新島あり。

戸數三戸、人口男一人、女四人、合計十人なり。

▲佃島町 寛永年間迄は向島又は三國島と稱せしが、徳川將軍此の島を攝津の國佃村より移住せし漁人に與へたるを以て佃島と呼び換らるゝに至れり、其北に石川島なるものあり、昔は森島又は鏡島と稱せしが、徳川氏入國後一の小なる洲嶼に過ぎざりしを埋築して無手頭石川重次に給したるを以て石川島と稱せらるゝに至りたり、明治五年之を佃島に合併して佃島町と稱す。此の石川島は寛永二年火付盜賊改長谷川平藏なるもの官に請ふて増築し、府内無頼乞丐の徒を集め始めて徒役の法を設けたり、之を人足寄場方といひ、維新後は懲役場と稱し東京府の所屬なりしが後刑部省に附屬し又更に東京府に復し明治七年以後警視廳に屬したり、之を俗に石川島監獄と稱せしも後市ヶ谷に移轉す。佃島町を俗に獵師町と稱す佃島の名産地にして漁人多く住するを以てなり。

戸數四百九十二戸、人口男九百八十五人、女八百四

十五人、合計一千八百三十人なり。

▲新佃東町一丁目 東京市に於て埋築すべく明治二十三年に着手し明治二十九年工事落成したる土地にして佃島町の東に相隣りたる町なり。新佃町全部の面積二萬七千四百九十五坪六合九勺あり。

戸數四十八戸、人口男百〇七人、女九十一人、合計百九十八人なり。

▲新佃東町二丁目 一丁目に全じ。

戸數九十三戸、人口男二百十八人、女百六十七人、合計三百七十七人なり。

▲新佃西町一丁目 東町一丁目に全じ。

戸數三百九十八戸、人口男八百二十七人、女七百十九人、合計一千五百四十六人なり。

▲新佃西町二丁目 東町一丁目に全じ。

戸數四百九十一戸、人口男九百八十六人、女八百〇

七人、合計一千七百九十三人なり。

▲新佃西町三丁目 東町一丁目に全じ。

戸數八十四戸、人口男百八十八人、女百四十三人、合計三百三十一人なり。

▲六之部

六の部とは左記十一ヶ町の總稱なり。

築地一丁目、二丁目、三丁目、四丁目、南小田原町一丁目、二丁目、三丁目、四丁目、南本郷町、

上柳原町、南飯田町。

東は大川口を隔て、月島と相對し西は築地川を隔て

て四の部と對し、南は汐留川を間にして芝區に境し、

北は築地川を隔て、五の部と境す。

戸數は四千〇二十一戸にして、人口男七千三百三十

五人、女六千三百九十二人、合計一萬二千七百二十

七人なり。

▲築地一丁目 此の地は南小田原町と共に貞治元年に填築せられたるものにして以後此の六の部の事を築地と呼びなれりしものなり。一丁目には松平越

前守の邸宅、高知藩山内氏の別邸等ありたりしが維新後官收し明治五年築地一三三四丁目の町名を附したり。

戸數七百九十八戸、人口男一千三百五十二人、女一千二百五十五人、合計二千六百〇七人なり。

▲築地二丁目 一丁目と全じ、寶永元年以來岡山藩池田氏の邸宅ありしも明治五年官收して本町に併す。

戸數六百五十四戸、人口男一千二百二十人、女一千十八人、合計二千二百三十八人なり。

▲築地三丁目 豊橋藩大河内氏、高槻藩水井氏の別邸等ありたりしも明治五年七月之れを三丁目に合併す。西本願寺築地別院あり末派の寺院多し。

戸數二百九十五戸、人口男五百〇六人、女五百二十九人、合計一千〇三十五人なり。

▲築地四丁目 長島藩増山氏邸、名古屋藩徳川氏、廣島藩淺野氏、桑名藩松平氏、淀藩稻葉氏及一橋家

の別邸等ありたりしが、淺野氏邸先づ上地して海軍所となり維新後は此處に海軍局を置かれ漸次上地して四丁目全部海軍省用地となるに至れり。明治五年築地四丁目の稱を附せらる。南には濱離宮あり。

戸數十二戸人口男六人、女七人、合計十三人なり。

▲南小田原町一丁目 昔は沙洲にして少數の漁人住せしが、寛文年間官に請ふて此の地を開きたり、小田原町の魚商多く住みたるを以て南の字を冠し南小田原町と稱するに至りぬ。俗に町北を肴店、町南を稻荷前と稱す。

戸數四百十五戸、人口男七百五十二人、女六百五十五人、合計一千四百〇七人なり。

▲南小田原町二丁目 一丁目の北にあり河岸地を小田原河岸といふ。

戸數八百五十七戸、人口男一千六百六十七人、女一千三百六十四人、合計三千〇三十一人なり。

▲南小田原町三丁目 二丁目の北にあり、明治元年

人、合計五百七十七人なり。

▲南飯田町 此の町も亦萬治元年に埋築せられたる地にして、元禄十年の火災後元飯田町の士族地を市店となし、代地を茲に給せられたりしが當時は江戸町とも稱せり。河岸を南飯田河岸といふ。

戸數三百九十八戸、人口男七百五十二人、女六百五十四人、合計一千四百〇六人なり。

▲七之部

七の部とは左記十八ヶ町の總稱なり。

高代町、本八丁堀町一丁目、二丁目、三丁目、四

丁目、五丁目、松屋町一丁目、二丁目、三丁目、

岡崎町一丁目、二丁目、元島町、長澤町、八丁堀

伴町、水谷町、永島町、幸町、日比谷町。

戸數は五千七百九十九戸にして、人口男一萬〇四百

二十七人、女八千六百六十一人、合計一萬九千〇八十八人なり。

士族屋敷を開き町となし南小田原町三丁目と稱す。

戸數二百三十九戸、人口男四百九十四人、女三百六十四人、合計八百五十八人なり。

▲南小田原町四丁目 明治五年士族屋敷を開きて町となせし所にして三丁目の北にありて相接するを以て四丁目と稱するに至りぬ。

戸數八十五戸、人口男百六十一人、女百五十六人、合計三百一十七人なり。

▲南本郷町 本町は又築地小田原町と全じく埋築せられたる所なるが後本郷湯島四丁目の代地となりしに依り本郷に對して南の字を冠し南本郷町と稱するに至りぬ。俗に矢の倉の稱あり。

戸數七十二戸、人口男百二十人、女百十八人、合計二百三十八人なり。

▲上柳原町 沿革は不詳なれども明和年間より呼びなし來りし事明かなり。

戸數百九十六戸、人口男三百〇五人、女二百七十二

東は龜島川を隔て、八の部と相對し、西は楓川を隔てて一の部と境し、南は櫻川を隔て、五の部と境し、北は日本橋區に連なれり。

▲高代町 以前は河岸地なりしが、安政二年芝高輪南町の代地なりしを以て明治二年附近にありし舊講武所屋敷を併せ高輪の高と代地の代を取り高代町と名づけたるものなり。

戸數百四十六戸、人口男二百八十五人、女二百三十四人、合計五百十九人なり。

▲本八丁堀一丁目 一丁目より五丁目迄あり、本八丁堀とは八丁堀に浴ふを以て此の名あり、本の字を冠せるは南八丁堀と區別せんが爲なり、俗に本町を北八丁堀とも稱す、八丁堀なる稱は本町以北は多く町名に冠したり、今に於ても七の部の事を俗に八丁堀といふ事あり。享保年間一丁目北方の地は火除地となりしも、後市地となり本八丁堀一丁目續上納地と稱せしが、明治二年一丁目に合併したり。南に八

丁堀即ち櫻川あり櫻川に浴へる河岸地を櫻河岸と稱す。

戸數二百二十六戸、人口男四百十七人、女三百十九人、合計七百三十六人なり。

▲本八丁堀二丁目 一丁目の東にあり。戸數百三十一戸、人口男二百六十一人、女二百〇九人、合計四百七十人なり。

▲本八丁堀三丁目 二丁目の東にあり。戸數百二十六戸、人口男二百八十六人、女二百二十九人、合計五百十五人なり。

▲本八丁堀四丁目 三丁目の東にあり。戸數百三十八戸、人口男二百四十七人、女百九十一人、合計四百三十八人なり。

▲本八丁堀五丁目 四丁目の東にあり。戸數百二十九戸、人口男二百五十六人、女百八十六人、合計四百四十二人なり。

▲松屋山一丁目 寛永年間より松平越中守の邸宅

ありしが、維新の際徳島藩蜂須賀氏の邸宅となり明治三年官收して東京府病院の附屬地となし明治五年附近にありし松屋町の名を取りて町名となしたり、一丁目より二丁目に至る西の河岸地を楓河岸と稱す戸數三百〇九戸、人口男五百六十四人、女四百四十九人、合計一千〇十三人なり。

▲松屋町二丁目 一丁目に全じ。戸數三百〇六戸、人口男五百三十七人、女四十五人、合計九百八十二人なり。

▲松屋町三丁目 三丁目は以前は士族屋敷なりしが延寶以後漸次に市地となりしが、明治五年神田塗師町代地、松屋町一納地、宗印屋敷等を併せて一町となし松屋町二丁目に接するを以て松屋町三丁目と名づく、俗に三丁目と二丁目との間を磯邊横町又は太神宮前といひ、南北の通路を辨天小路と稱す。戸數二百八十九戸、人口男五百二十九人、女四百三十七人、合計九百六十六人なり。

▲岡崎町一丁目 寛永年代迄は寺地なりしが之を外に移して士族屋敷地となし後公收して町奉行組與力同心の受領地となしたり。享保年間其中に市店を開きて名主岡崎十左衛門の姓を取り岡崎町と名づけたり、明治二年に至り其の北部を割き組屋敷跡を合併して岡崎町一丁目と稱す。町南の東西横町を片與力町又は近江屋新路と俗稱し、北を馬場又は大通りと稱す。

戸數七百七十五戸、人口男一千三百四十五人、女一千七百七十三人、合計二千五百十八人なり。

▲岡崎町二丁目 沿革一丁目と全じ。明治二年に至り岡崎町の南部及び町奉行組屋敷跡八丁堀龜屋々敷(龜屋々敷とは幕府の仕立師龜屋市郎右工門の受領地なりしなり)を併せて一町となし岡崎町二丁目と稱す。

町南の東西横町を屋根屋新路と稱す。戸數六百五十一戸、人口男一千二百〇六人、女一千

〇〇三人、合計二千二百九人なり。

▲元島町 寛永年間迄は寺地なりしも之を他へ移して其跡を吉良左京大夫日向朝負の邸宅となし、後上地したりしが享保六年正月南八丁堀の代地となし明治三年今の名に改稱す。

戸數五百二十戸、人口男八百十六人、女五百九十八人、合計一千四百十四人なり。

▲長澤町 元島町と全しく寺地なりしも明暦の大火後士族屋敷となり元禄七年之を公收して幕府醫員等の受領地となりて名主長澤嘉右工門之を支配したるが故に長澤町の名あり。俗に町内を焚出し横町と稱す、昔炊出受負人中野治右衛門住居せしが故なりと。

戸數四百五十五戸、人口男七百二十一人、女六百四十四人、合計一千三百六十五人なり。

▲八丁堀仲町 寛永年間迄は寺地なりしが之を外に移して士族屋敷地となし元禄年間公收して町奉行組與力屋敷となしたり其後北紺屋町、金六町、水谷町

六人、合計八百六十六人なり。

▲永島町 以前は士族屋敷地なりしが享保年間市店を開きて今日に及べり。河岸地を日比谷河岸と稱す。

戸數二百八十九戸、人口男五百十三人、女四百五十八人、合計九百六十三人なり。

▲幸町 以前寺地なりしが明暦の火災後士族屋敷地となり元禄四年に幸橋外の幸町を此處に移轉せしめたるに依り幸町の名あり。

戸數百九十一戸、人口男三百四十七人、女三百〇六人、合計六百五十三人なり。

▲日比谷町 古き地圖には幸町、永島町、又は幸町代地など記しあるものあれども、元禄三年士族屋敷地を公收して日比谷町の代地となしたるに依り此の名ありといふ。町内に日比谷神社あり。河岸地を日比谷河岸と稱す。

戸數二百〇八戸、人口男四百十八人、女三百八十五人、合計八百〇三人なり。

等の代地となりしが間もなく他に移り幕府の醫員等の受領地となし、北紺屋町立跡、金六町立跡等と稱せり。明治五年に至りて附近の金六町、水谷町一丁目、落杭屋敷(内海標柱請負人の受領地)卓峯屋敷(幕府の筆師)を併せて一町となし八丁堀の中心に當るを以て八丁堀仲町と名づけたり。俗に町東を三角(昔は三角屋敷と稱したり)といひ、落杭屋敷跡を古着店といふ。

戸數六百七十一人、人口男一千百九十九人、女一千〇十七人、合計二千二百六十六人なり。

▲水谷町 此町も亦寺地なりしが後士族屋敷地となし元禄年間には町奉行組屋敷と變りしが享保四年には金六町、水谷町、竹島町、與作屋敷等の代地となり。其後舊地に復歸するや金六町立跡、與作屋敷立跡等と稱したり。明治五年之を併せて水谷町を作る。河岸地を龜島河岸と稱す。

戸數二百四十九戸、人口男四百八十人、女三百八十

▲八之部

八の部とは左記十八ヶ町の總稱にして、東は大川を隔て、深川區又は佃島と相對し、西及び南は龜島川を隔て、日本橋區又は七の部の部と相對し北は日本橋川を隔て、日本橋區と相境す、戸數は三千九百十六戸にして人口男七千五百三十人、女六千四百四十八人を有す。

東港町一丁目、二丁目、新船松町、越前堀一丁目、二丁目、川口町、長崎町一丁目、二丁目、銀町一丁目、二丁目、大川端町、鹽町、濱町、靈巖島町、四日市町、南新堀一丁目、二丁目、富島町。東港町一丁目 寛永年間の創立にして初めは助右工門と稱せしが其の湊口にあり且つ附近即ち五の部の本港町と區別すべく東の字を冠して東港町と稱す。河岸地を將監河岸と稱す。

二十人、合計一千九百六十二人なり。
▲東港町二丁目 勘左工門屋敷を併せて一町となし東港町二丁目と名づく。

戸數二百七十一戸、人口男五百三十九人、女四百七十六人、合計一千〇五十五人なり。

▲新船松町 以前には船手組の邸宅ありたり、維新後川船局を置き其他の地は船松町二丁目の代地となりしを以て新船松町の名あり、其後川船局は石川島監獄署、渡船場、東京府船政所となり今は廢止せられて石川島造船所へ渡る船場となる、猶全町に水上警察署も一時設置せられたる事あるも其後明石町へ移轉す。

戸數百一十一戸、人口男二百六十六人、女百八十八人、合計四百五十四人なり。

▲越前堀一丁目 寛永以降松平越前守の別邸ありしも維新の際之を官收し明治五年周圍の渠を越前堀と稱するに依りて越前堀一丁目二丁目となして市店

を開く。戸數九百八十二戸、人口男一千八百五十六人、女一千五百九十九人、合計三千四百五十五人なり。

▲越前堀二丁目 一丁目の東にあり。戸數百六十三戸、人口男三百十八人、女二百五十二人、合計五百七十八人なり。

▲川口町 川口町は以前築地にありしが、元祿年間矢の藏を移せし時代地を此處に給せられたり。明治五年富島町二丁目を併せて本町を成す。大川口に位せるを以て川口町の名ありと。河岸地を解屋河岸と稱す。

戸數三百四十三戸、人口男六百三十九人、女四百九十人、合計一千二百二十九人なり。

▲長崎町一丁目 以前は一の部なる鍛冶町桶町の間ありたりしが、明曆の大火災後其地を廣小路にせられしに依り代地を此處に與へられて移轉せり。戸數百八十二戸、人口男三百三十五人、女二百四十

四人、合計五百七十九人なり。
▲長崎町二丁目 一丁目の西にあり。戸數百六十八戸、人口男二百七十五人、女二百五十四人、合計五百二十九人なり。

▲銀町一丁目 以前は本銀町の一部分なりしが明曆の大火災後鹽町と共に此處に移轉せしものあり、當時は一丁目より四丁目迄ありたりしも明治二年一丁目三丁目四丁目及び圓覺寺屋敷を併せて一丁目となす、本町は二丁目と共に新川の南にあるを以て世俗南新川と稱し、河岸地を南新河岸といふ。戸數百十五戸、人口男三百二十四人、女百九十三人、合計四百七十七人なり。

▲銀町二丁目 一丁目と全じ、一丁目の東にあり。戸數二十五戸、人口男八十六人、女三十七人、合計百二十三人なり。

▲大川端町 以前は北新堀町の東にありしが正保年間其地が船手組屋敷となりしに依り此處に移り大川

の沿岸なるを以て大川端町と稱し來れり。戸數八十六戸、人口男百四十六人、女百三十三人、合計二百七十九人なり。

▲鹽町 以前は大傳馬鹽町の一部なりしが明曆の大火災後其地に土堤を築を以て此處に移轉し來れり。戸數百八十戸、人口男三百四十一人、女三百人、合計六百四十一人なり。

▲濱町 以前は今の元濱町にありしが明曆の大火災後其地に溝渠を設たるを以て此地に移轉し來れり。戸數百十三戸、人口男百九十三人、女百七十七人、合計三百七十七人なり。

▲靈巖島町 寛永年間創立されし市店にして當時は靈巖寺門前なりしといふ、一の橋の東を五軒店といひ、瀬河岸、檜葉河岸の俗稱あり。此の地は僧靈巖の創めたる所なり。(名所舊蹟欄参照) 戸數百六十戸、人口男二百八十三人、女百九十九人、合計四百七十三人なり。

▲四日市町 以前は靈巖寺の墓地なりしが、明暦の大火災後日本橋區四日市町の土堤を築くに當り此處に移轉し來りしものなりと、新川の北に當るを以て北新川といひ、河岸地を北新河岸と稱し酒問屋多し。戸數百〇一戸、人口男百八十二人、女百六十四人、合計三百四十六人なり。

▲南新堀一丁目 新堀即ち日本橋川の下流の南に位置するを以て此の名あり、明治二年五月俗稱靈巖橋繩手と稱する請負地を合併したり。河岸を南新堀河岸といふ。戸數九十五戸、人口男百九十二人、女百七十五人、合計三百六十七人なり。

▲南新堀二丁目 一丁目に全じ。戸數二百二十四戸、人口男四百六十三人、女三百六十四人、合計八百二十七人なり。

▲富島町 以前は一丁目、二丁目の稱ありたりしが、一丁目は弘化二年靈巖島町河岸地を埋築したる所にして今は靈巖島に合併せられて丁目の稱を廢せ

五六
られたり、富島町は明和二年川を埋めて市店を設けし所にして、靈巖橋埋立地又は蕩蕩島の稱あり、明治二年五月一町となさる。戸數九十六戸、人口男百五十人、女百九十二人、合計三百四十二人なり。

交 通

郵 便

本區内の通信は大正元年十月現在に於て、二十の郵便局、八の電信取扱局、二の電話交換局、二の電話通話取扱局、十一の自動電話に由りて取扱はれるが、今郵便局所名等を示せば左の如し。

▲京橋郵便局 △局長 武岡充雄 △等級 二等局 △所在地 木挽町三丁目 △開始年月 明治廿七年二月。

▲構内郵便局 △等級 二等局 △局長 越智通清 △

所在地 遞信省構内 △開始年月 明治廿七年十二月。

▲鍛冶橋郵便局 △等級 三等局 △局長 鳥居鐵太郎 △所在地 五郎兵衛町 △開始年月 明治廿八年四月。

▲銀座郵便局 △等級 三等局 △局長 志村鑑太郎 △所在地 銀座四丁目 △開始年月 明治廿八年四月。

▲京橋通郵便局 △等級 三等局 △局長 山岡景員 △所在地 南傳馬町三丁目 △開始年月 明治廿八年四月。

▲南傳馬町郵便局 △等級 三等局 △局長 森市兵衛 △所在地 南傳馬町三丁目 △開始年月 明治廿八年四月。

▲中橋和泉町郵便局 △等級 三等局 △局長 岡林幾三郎 △所在地 中橋和泉町 △開始年月 明治四十年十一月。

▲弓町郵便局 △等級 三等局 △局長 丸山寛一郎 △所在地 弓町 △開始年月 明治廿八年四月。

▲尾張町郵便局 △等級 三等局 △局長 久保田善一郎 △所在地 尾張町二丁目 △開始年月 明治四十年三月。

▲加賀町郵便局 △等級 三等局 △局長 重田廣吉 △所在地 加賀町 △開始年月 明治廿八年四月。

▲水谷町郵便局 △等級 三等局 △局長 松田治右衛門 △所在地 水谷町 △開始年月 明治廿八年四月。

▲采女町郵便局 △等級 三等局 △局長 木下立安 △所在地 采女町 △開始年月 明治廿八年四月。

▲新富町郵便局 △等級 三等局 △局長 辻静也 △所在地 新富町一丁目 △開始年月 明治廿八年四月。

▲入船町郵便局 △等級 三等局 △局長 小林萬吉 △所在地 入船町 △開始年月 明治廿八年四月。

▲船松町郵便局 △等級 三等局 △局長 虎岩清四郎 △所在地 船松町 △開始年月 明治四十四年七月。

▲築地郵便局 △等級 三等局 △局長 西川忠亮 △所在地 築地二丁目 △開始年月 明治廿八年四月。

▲南小田原町郵便局 △等級 三等局 △局長 内田恭雄 △所在地 南小田原町 △開始年月 明治四十三年六月。

▲月島郵便局 △等級 三等局 △局長 木戸有恒 △

所在地 月島西仲通四丁目△開始 明治卅八年四月。
 △松屋町郵便局 △等級 三等局△局長 谷口清三
 郎△所在地 松屋町△開始 明治卅八年四月。
 ▲本八丁堀郵便局 △等級 三等局△局長 市川三
 作△所在地 本八丁堀△開始 明治卅八年四月。
 ▲富島町郵便局 △等級 三等局△局長 鷲塚宇兵
 △所在地 富島町△開始 明治卅八年四月。
 ▲越前堀郵便局 △等級 三等局△局長 松下重鋼
 △所在地 越前堀一丁目△開始 明治卅九年三月。

▲電信

本区内にある電信取扱所は單に電信局として獨立し電信のみ取扱ふものなし、郵便局にして電信を取扱ふ所は九ヶ所にして即ち左の如し。
 ▲京橋郵便局 △内外國和歐文を取扱ひ、受付又は配達をなす。
 ▲構内郵便局 △内外國和歐文を取扱ひ、受付をな

▲電話

せども配達は逓信省構内ののみ。
 ▲築井郵便局 △内外國和歐文を取扱ふも着信は留置の指定あるもの及び局を肩書したるもの、外取扱はず。
 ▲銀座郵便局 △内外國和文内國歐文を受付く、着信は留置の指定あるもの又は局を肩書したるもの、外取扱はず。
 ▲京橋通郵便局 △全上。
 ▲富島町郵便局 △全上。
 ▲本八丁堀郵便局 △全上。
 ▲中橋和泉町郵便局 △全上。
 ▲月島郵便局 △内外國和文其他全上。
 電話の通話を交換せしむる局所左の如し。
 ▲新橋電話局 △局長 小倉寛作△所在地 八官町一、二番地△電話加入數三千五百口△開始年月 明

治三十一年十月△交換手人數 二百卅九名。

▲京橋電話局 △局長 三浦吉之助△所在地 白魚

河岸△電話加入數 三千二百口△開始年月 明治四

十三年十二月△交換手數 百九十名。

通話のみを取扱ふ局所左の如し。

▲京橋郵便局 △市内又は遠距離通話。

▲構内郵便局 △市内又は遠距離通話。

区内に介在する自動電話は左の如し。

▲京橋南詰 △數寄屋橋外 △新橋北詰 △尾張

町二丁目電車通 △築地本願寺前電車停留場側

▲新富町六丁目三番地新富座北側 △京橋北詰

▲新築町 △歌舞伎座内(但シ臨時) △新船松町

▲岡崎町。

▲道路

道路には國道、縣道、里道の三種類あり。然れども里道にして却て縣道又は國道の或部分よりも重要な

位置を占むるものなきにあらず。例へば外濠に添へ

る道路の如き、銀座より歌舞伎座前を経て築地に至

る道路の如き、永代橋の電車通りの如きものなり。

東京市に於ては明治二十一年以後着手されたる市區

改正に依り之を一等より五等迄に分ちて一等道路、

二等道路と呼ぶに至れり。而して本區に於ける重なる

道路は中橋廣小路より京橋を經、銀座通りを經て

新橋に至る道路。一の部より二の部の部に通ずる

東仲通り及び西仲通り。數寄屋橋外より丸屋町に至

る道路。外濠に沿ひたる道路。數寄屋橋より銀座を

經て築地、新富町、岡崎町に至る道路。新佃町より

月島通り十一丁目に至る道路。富島町より大川端町

に至る道路なり。

今市の區別表を示せば左の如し。

▲一等道路 新橋より竹川町、銀座大通り、京橋、

南傳馬町を經て日本橋區に至る線。

▲二等道路 鍛冶橋外より一直線に南傳馬町三丁目

の電車を踏切りて本材木町三丁目楓川端に至る線。
外濠に沿ひたる道路。

富島町なる靈岸橋より永代橋に至る線。

▲三等道路 數寄屋橋より銀座、歌舞伎座前、築地、新富座前、櫻橋、岡崎町を経て日本橋區坂本公園前に至る線。

楓川端にて鍛冶橋外より來れる二等道路を承けて本八丁堀五丁目に至り高橋を渡りて東港町に出で靈岸島濱町地先に於て靈岸橋より來れる二等道路に合する線。

▲河川溝渠

本區の河川溝渠は東西南北に貫通せられて舟楫の便甚だ宜しく本區の繁昌に資し居る事頗る大なり。今左に之を列舉すべし。但し無名の小流細渠は省略す。

▲外濠 土橋より數寄屋橋、鍛冶橋を経て、日本橋區なる吳服橋方面に至るもの、幅員二十二間、深さ

干潮時に於て一尺乃至四尺。

▲京橋川 北紺屋町と南紺屋町との間に架する比丘尼橋より京橋を経て、櫻川落合中央に至るもの、延長三百二十二間、幅員九間、面積二千八百七十五坪、深さ干潮時に於て二尺乃至二尺五寸。

▲櫻川 日本橋區なる新塲橋を経て久安橋、松屋橋、彈正橋より櫻川口に至るもの、延長三百二十五間、幅員十七間、面積四千五百坪（但し京橋區の部分のみ）、深さ干潮時に於て一尺五寸乃至二尺。

▲三十間堀川 水谷橋より木挽町七丁目地先汐留川に至るもの、延長六百二十二間、幅員十六間、面積一萬四千六百坪、深さ干潮時に於て三尺乃至四尺。

▲汐留川 土橋より新橋を経て濱離宮の南を流れ東京灣に至るもの、延長七百六十二間、幅員十七間、面積一萬三千三百四十三坪、深さ干潮時に於て五寸乃至三尺七寸。

▲築地川 海面より明石橋、新榮橋、堺橋、輕子橋、川に至るもの、延長二百〇五間、幅員五間、面積一千八百八十九坪、深さ干潮時に於て一尺九寸乃至二尺。

▲鐵砲洲川 新港橋より鐵砲洲橋を経て大川口に至るもの、延長二百五十二間、幅員六間、面積二千二百二十坪、深さ干潮時に於て一尺以下。

▲龜島川 富島町地先靈岸橋より本港町地先海面に至るもの、延長五百七十五間、幅員三十三間、面積一萬九千二百〇五坪、深さ干潮時に於て三尺乃至四尺。

▲新川 富島町地先龜島川出口より一の橋、二の橋、三の橋を経て大川出口に至るもの、延長三百間、幅員七間、面積二千九百坪、深さ干潮時に於て一尺五寸乃至三尺。

▲月島川 月島一號地二號地の間、延長二百八十五間、幅員二十三間、面積六千六百〇一坪、深さ干潮時に於て四尺乃至五尺。

▲佃川 月島佃島間、延長三百〇一間、幅員二十八

築地橋、合引橋、龜井橋、祝橋、萬年橋、采女橋より木挽町九丁目地先を経て海軍大學と濱離宮との間を流れて海面に至るもの、延長一千五百六十二間、幅員二十二間、面積三萬五千四百六十八坪、深さ干潮時に於て一尺五寸乃至三尺。

▲又一方は南小田原町四丁目一番地先より備前橋を経て小田原橋に至るもの、延長二百三十三間、幅員十五間、面積三千六百三十九坪、深さ干潮時に於て一尺五寸乃至二尺五寸。

▲又一方は三之橋より安藝橋を経て海面に至るもの、延長三百四十一間、幅員十六間、面積五千四百六十七坪、深さ干潮時に於て二尺五寸乃至四尺。

▲櫻川 白魚橋の東落合の中央より櫻橋、中橋を経て稻荷橋に至るもの、延長三百九十一間、幅員十七間、面積六千六百五十八坪、深さ干潮時に於て二尺五寸乃至三尺五寸。

▲入船川 新舟見橋松川口より南新富橋を経て築地

間 面積八千五百〇七坪、深さ干潮時に於て三尺乃至四尺

▲佃川支川 佃橋より佃島中央を経て石川島地先大川口に至るもの、延長百八十五間、幅員九間、面積一千八百〇二坪、深さ干潮時に於て一尺五寸以上。

▲橋 梁

区内の橋梁は官設二、市設五十九、合計六十二橋あり其の内鐵橋七、石橋四、土橋二十、木橋一なり猶茲に注意すべきは、深川區より大川を京橋區大川端町に架せられたる永代橋、越中島より佃島に架せられたる相生橋は共に深川區の管轄に屬し、數寄屋橋及び鍛冶橋の二橋は麴町區の管轄に屬し、南新堀二丁目より北新堀町へ架する豊海橋は日本橋區の管轄に屬し、汐留川に架する新橋、土橋、蓬萊橋、難波橋の四橋は共に芝區の管轄に屬する事是なり。

▲京橋 京橋川に架する石橋にして銀座一丁目より

あり、江戸名所圖會には彈正橋は寛永の頃今の松屋町の角に島田彈正の邸あるを以て名づくどあり。眞福寺橋は三十間堀川の改鑿の折廢せられたり。

▲松屋橋 本材木町三丁目より松屋町に通ずべく堀川に架す、長さ九間、幅四間。

▲久多橋 堀川に架す、中橋和泉町より松屋町へ通ず長さ十四間、幅三間。

▲石橋 内山下町より山下町に通ずる外濠に架す、長さ三間二尺五寸、幅四間二尺。

▲水谷橋 三十間堀川に架し、銀座一丁目より水谷町に通ず、長さ十六間、幅四間。

▲紀伊國橋 三十間堀川に架し銀座二丁目より木挽町一丁目に通ず、長さ十八間、幅四間。

▲豐玉橋 銀座二丁目より木挽町二丁目との間の三十間堀川に架す、長さ十五間、幅四間。

▲朝日橋 銀座三丁目より木挽町三丁目に通ずる三十間堀川に架す、長さ廿四間、幅四間。

南傳馬町三丁目に通ず、三十四年架換の後鐵橋なりしも其後亦石橋となれり長さ幅共に十間なり、東京府志料に曰く、江戸橋に對して名づく、と。創設年月不詳。

▲比丘尼橋 京橋川に架する石橋にして俗に一之橋とも稱す、長さ六間二尺、幅七間あり。

▲紺屋橋 南北紺屋町間の京橋川に架する木橋なり長さ八間、幅三間。

▲炭谷橋 炭町より水谷町との間の京橋川に架す、長さ九間、幅三間あり。

▲白魚橋 京橋川に架し本材木町三丁目より金六町に通ず、木橋なり、長さ九間、幅四間。

▲彈正橋 本材木町三丁目と高代町との間なる堀川に架す、明治十一年架換へたる鐵橋にして長さ五十尺、幅九間あり、創設年月不詳。

墨水消夏録には遊女のゐたりし柳町の圖を引きて戸越橋、眞福寺橋、彈正橋を總稱して三枚橋といふと

▲三原橋 三十間堀一丁目より木挽町四丁目に通ずる三十間堀川に架す、長さ十六間半、幅六間。

▲木挽橋 三十間堀三丁目より木挽町五丁目に通ずる三十間堀川に架す、長さ十八間、幅四間。

▲出雲橋 出雲町より木挽町に通ずる三十間堀川に架す、長さ十六間、幅三間五尺。

▲汐先橋 木挽町八丁目より芝口汐留町に通ずる汐留川に架す、長さ十六間、幅四間。

▲采女橋 築地川に架し采女町より築地三丁目に通ず、長さ八間、幅四間。

▲萬年橋 築地川に架し采女町より築地三丁目に通ず、長さ十七間、幅四間。

▲祝橋 築地川に架し木挽町三丁目より築地二丁目に通ず、長さ十八間、幅四間。

▲龜井橋 築地川に架し木挽町二丁目より築地一丁目に通ず、長さ十八間、幅四間。

▲合引橋 築地川に架し築地一丁目より新富町三丁

目に通ず、長さ八間、幅四間。
 ▲築地橋 築地川に架し築地一丁目より新富町六丁目に通ず、長さ十八間、幅四間。
 ▲輕子橋 築地一丁目より入船町六丁目に通ずる築地川に架す、長さ八間、幅三間。
 ▲備前橋 築地二丁目より南小田原町四丁目に通ずる築地川に架す、長さ十四間、幅四間。
 ▲小田原橋 築地三丁目より南小田原町一丁目に通ずる築地川に架す、長さ十一間、幅三間。
 ▲三之橋 築地三丁目より海軍大學水交社に通ずる築地川に架す。
 ▲海軍橋 築地三丁目より海軍大學構内治療病院前に通ずる築地川に架す。
 ▲安藝橋 海軍大學より海軍造兵廠に通ずる築地川に架す。
 ▲堺橋 南小田原町四丁目より明石町に通ずる築地川に架す、長さ六間、幅四間。

▲新築橋 明石町より南小田原町四丁目に通ずる築地川に架す、長さ二二間二合、幅三間。
 ▲明石橋 南飯田町より明石町に通ずる築地川に架す、長さ七間、幅三間。
 ▲新港橋 明石町二十二番地先より二十三番地先に通ずる鐵砲洲川に架す、長さ七間、幅三間。
 ▲浦堀橋 一名新築橋ともいふ、明石町十七番地先より二十八番地先に通ずる鐵砲洲川に架す、長さ六間、幅三間。
 ▲見當橋 鐵砲洲川に架し新港町五丁目より船松町に通ず、長さ六間、幅三間。
 ▲小橋 鐵砲洲川に架し船松町より本港町に通ず、長さ五間、幅三間。
 ▲鐵砲洲橋 鐵砲洲川に架し船松町より本港町に通ず、長さ五間、幅二間。
 ▲南新富橋 新富町七丁目より入船町六丁目に通ずる入船川に架す、長さ六間、幅三間。

▲新富橋 新富町四丁目より入船町三丁目に通ずる入船川に架す、長さ六間、幅三間。
 ▲船見橋 新富町四丁目より入船町三丁目に通ずる入船川に架す、長さ六間、幅三間。
 ▲北船見橋 入船川に架し南八丁堀一丁目より二丁目に通ず。長さ六間、幅三間。
 ▲櫻橋 櫻川に架し石鐵橋なり、南八丁堀一丁目より本八丁堀一丁目に通ず、長さ十七間、幅四間あり。
 ▲仲之橋 櫻川に架し本八丁堀三丁目より南八丁堀二丁目に通ず。長さ二十間、幅四間。
 ▲稻荷橋 櫻川に架し本八丁堀五丁目より南八丁堀三丁目に通ず。長さ二十一間、幅三間半。
 ▲高橋 鐵橋にして龜島川に架し東港町一丁目より本八丁堀五丁目に通ず、明治十五年の架換にして長さ二十六間七合、幅三間あり。
 ▲龜島橋 龜島川に架し川口より日本橋區龜島町一丁目と京橋區入丁堀水谷町との間に通ず、長さ十五

間、幅四間。
 ▲新龜島橋 龜島川に架し川口町より日本橋區龜島町二丁目に通ず。長さ十五間、幅三間。
 ▲靈巖橋 龜島川に架し富島町より日本橋區南茅場町に通ず。長さ二十四間、幅六間。
 ▲港橋 日本橋川に架し南新堀一丁目より日本橋區箱崎町に通ず。長さ十九間、幅六間。東京府志料に曰く。
 諸船入港の地なるを以て港橋と名づく、と。
 ▲一之橋 新川に架し靈岸島町より富島町に通ず。長さ七間、幅四間。
 ▲二之橋 新川に架し四日市町より銀町二丁目に通ず。長さ六間、幅四間。
 ▲三之橋 新川に架し銀町二丁目より大川端町に通ず。長さ六間、幅四間。
 ▲築橋 越前堀二丁目より新船松町に通ずる大下水に架す、長さ十六間、幅三間。

▲濱崎橋 月島西河岸通十一丁目より新理立地に架す。

▲渡 船

渡船は總計五ヶ所あり、即ち左の如し。

▲勝鬨の渡 市設にして無料なり、南小田原町一丁目より月島二號地に至る。晴天の折は遠く富士山を眺め近く品海の風景眼前にありて絶佳なり。夜間なし。

▲月島の渡 蒸氣渡しにして明石町より月島西河岸通四丁目に至る。徹夜渡し船あり、無料、市設。

▲佃の渡し 船松町より佃島に至る、又一方は船松町あり月島西河岸通り一丁目に至る。私設にして午後十時迄、金五厘を要す。

▲石川島の渡し 新船松町より佃町即ち舊石川島に渡す、石川島造船所の設立にして無料。

▲大川口の渡し 越前堀二丁目より深川に至る。私

▲回漕橋 越前堀二丁目より銀町二丁目に通ずる大下水に架す。長さ四間五尺、幅三間。

▲月島橋 月島通六丁目より七丁目に通ずる月島川に架す。長さ二十五間、幅三間。

▲佃橋 月島より佃島に通ずる佃川に架す。長さ二十四間、幅三間。

▲初見橋 月島一丁目より新佃島に通ずる佃川に架す。長さ二十四間、幅三間。

▲小橋 佃町二十八番地先なる佃川支川に架す。長さ四間、幅二間。

▲石橋 八丁堀仲町より水谷町に通ずる大下水に架す。長さ七尺、幅五間。

▲板橋 木挽町九丁目の大下水に架す。長さ二間、幅三間。

▲土橋 木挽町九丁目の大下水に架す。長さ四尺五寸、幅六間。

▲新島橋 月島通十一丁目より新理立地に架す。

設にして金壹錢を要す。

▲漁 船

区内に於ける漁船は、市外に往くものに新船松町より發着する東京灣漁船會社の漁船あり。市内の大川より吾妻橋間を往復するものに隅田川漁船會社あり。

隅田川漁船會社の漁船は永代橋より吾妻橋間の賃錢金三錢均一なり。

東京灣漁船會社の漁船は館山、浦賀、三崎、八幡、木更津、勝浦等へ航行す。

今本区内に籍を有する船舶數を示せば左の如し。

△西洋形船舶 蒸氣船七五、器械船二、帆船二二三。

△日本形船舶 二百石以上五百石未満一二二、百石以上二百石未満三六、五十石以上百石未満一一。

其の他の小船は其數萬余に達す。

▲築地兩國行には、數寄屋橋外、尾張町銀座四丁目、

▲電 車

本區を通ずる電車には左の四線あり。

▲品川上野淺草線には新橋、竹川町、銀座四丁目尾張町、銀座二丁目三丁目、京橋、南傳馬町、中橋廣小路の十一停留場あり。

▲築地兩國行には、數寄屋橋外、尾張町銀座四丁目、

▲早船は本区内に三ヶ所あり。

▲南八丁堀二丁目南櫻川岸より深川洲崎辨天町に至る航路にして南櫻河岸、黒江町、富岡門前町、洲崎辨天町等の寄船場あり。

▲新船松町より深川區西平井町に至る航路にして、新船松町、深川加賀町、西平井町等の寄船場あり。

▲佃島西町より永代河岸に至る航路にして、寄船場は佃島西町、永代河岸の二ヶ所。

▲早 船

▲早船は本区内に三ヶ所あり。

▲南八丁堀二丁目南櫻川岸より深川洲崎辨天町に至る航路にして南櫻河岸、黒江町、富岡門前町、洲崎辨天町等の寄船場あり。

▲新船松町より深川區西平井町に至る航路にして、新船松町、深川加賀町、西平井町等の寄船場あり。

▲佃島西町より永代河岸に至る航路にして、寄船場は佃島西町、永代河岸の二ヶ所。

▲築地兩國行には、數寄屋橋外、尾張町銀座四丁目、

▲築地兩國行には、數寄屋橋外、尾張町銀座四丁目、

木挽町歌舞伎座前、築地本願寺前、築地橋、新富町、櫻橋、松屋町、岡崎町の八停留場あり。
 ▲外濠線には山下町、數寄屋橋、西紺屋町、鍛冶橋、八重洲橋の五停留場あり。
 ▲深川行には、靈岸橋、永代橋の二停留場あり。

▲車 輛

車輛には馬車、人力車、自轉車、自働車、荷積馬車、荷車の六種あり、今本區に於ける車輛數を示せば左の如し。
 ▲馬車 自用四、貨馬車四。
 ▲人力車 自用一人乘二二三二、二人乘三、渡世用一人乘一四一三、二人乘五〇。
 ▲自轉車 自用一〇七三、貨自轉車三五。
 ▲自働車 自用六、貨自働車三〇。
 ▲荷馬車 六。
 ▲營業用及自用荷車 大車六二、中小車二六五四。

▲瓦斯之電燈

本區に於ける瓦斯は日吉町に東京瓦斯會社京橋出張所ありて京橋區一圓を受持ち居れり、所長は朝尾敬二郎。電燈は區内に日本電燈株式會社あれども大正元年十月迄は未だ營業せず、東京市電氣局、東京電燈株式會社の配電ありて其電燈數は左の如し。
 ▲瓦斯 瓦斯管延長里數 七里一丁二十二間、街燈、二百七十六燈、燈火用一萬五千五百五十二燈。
 ▲電燈 孤光燈三五、百燭光二、五十燭以下五燭迄四萬六千八百八十三燈合計四萬六千九百二十燈。

官廳公衙

▲京橋區役所 區勢の欄に於て詳しく説きたれば茲には略し置く。
 ▲郵便局及電話局 交通の欄、郵便、電信、

電話の部参照。

▲築地警察署 築地一丁目一番地京橋區役所側にあり、明治五年第一大區六、七、八、九巡查屯所を設けたるを本署の濫觴とし、後八、九小區屯所を合せて元數寄屋町二丁目に警察署を設けられしが、明治八年警視第一分廳第三署、警視第一方面第三署と改めて京橋際に移轉し、明治十四年第一方面京橋區京橋警察署といひ全時に署内に第一方面京橋區築地警察署を置きたりしも其後之を廢し十七年芝區新幸町に移轉し、十九年南傳馬町三丁目に轉じ卅二年現在の地に移りしが、明治四十三年築地警察署と改稱せらる。署長は武東晴一氏なり。
 ▲京橋警察署 京橋際にあり、以前は京橋分署なりしも四十三年本署となる。現在の署長は前田兼實氏なり。
 ▲三十間堀警察署 三十間堀三丁目にあり、以前は三十間堀分署なりしも四十三年本署となる。

署長は吉田文一氏なり。

▲明石警察署 以前は入船町三丁目にありて明石町巡查派出所と稱せられしも、四十三年本署となり入船町五丁目なる現在地に移轉す。署長は木島忠義氏なり。
 ▲靈岸島警察署 川口町にあり、以前は分署なりしも四十三年本署となる。署長は加藤作太郎氏。
 ▲月島警察署 佃島にあり、以前は分署なりしも四十三年本署となる。署長は廣瀬壽太郎氏なり。
 ▲東京水上警察署 明石町にあり、明治十年二月河海警察規則の制定に由り、河海警察假出張所を新船松町、芝區金杉新濱町、南品川、深川熊井町に設置したるを起因とす。其後水上警察假出張所と改め十二年之を廢して更に水上警察署を新船松町に置く、全年明石町の現在地に移轉し十四年本署を廢して水上巡查屯所を設けしも十六年又本署となし三十九年今の名に改め大井村に分署を置き市の沿岸河

海中船隻の航通せざる所の外之を管轄す。署長小林一男氏なり。

▲京橋税務署 明治四十二年始めて設置され築地三丁目にありしも、木挽町二丁目東豊玉河岸に新築し明治四十五年五月現在地に移轉す。署長西川利夫氏。

▲遞信省 木挽町八丁目にあり、明治十八年十二月創立にして省内を大臣官房、通信局、貯金局、管船局、經理局、電信燈臺用品製造所等を置き更に商船學校を所轄す。四十年火災に罹りしも亦新築せらる、現大臣は林董。今開省以來の大臣を擧ぐれば左の如し。

榎本武揚、後藤象二郎、黒田清隆、渡邊國武、白根專一、野村靖、末松謙澄、林有造、芳川顯正、星亨、原敬、曾禰荒助、大浦兼武、山縣伊三郎、後藤新平、林董。

▲農商務省 木挽町十丁目にあり、初め内務、

大藏二大臣の所管なりしを十四年之を割きて本省を設置されたり、農、商、工、水産、林野、鑛山及び地質に關する事務を司り、省内に大臣官房、商工局、農務局、山林局、鑛山局、水産局を置き各地に林区署、鑛山監督署を設け、特許局、糖業事務局、農事試験場、工業試験所、花産検査所、種馬牧場及種馬所、蠶業講習所、水産講習所、製鐵所等を管理す。現任大臣牧野伸顯。今開省以來の大臣名を列擧すれば左の如し。

谷干城、西郷從道、山縣有朋、土方久元、黒田清隆、榎本武揚、井上馨、岩村通俊、陸奥宗光、河野敏鎌、佐野常民、後藤象二郎、大隈重信、山田信道、伊東已代治、金子堅太郎、大石正巳、曾禰荒助、林有造、平田東助、清浦奎吾、松岡康毅、大浦兼武、牧野伸顯。

▲商品陳列館 農商務省商工局の附屬にして農商務省の構内にあり、内外國の商品見本及び參考品

を蒐輯陳列して衆庶の觀覽參考に供すると共に内外貿易に關する通信事務を掌る所なり。觀覽無料。

▲專賣局煙草製造所 專賣局東京第一煙草製造所の工場は京橋區に三ヶ所あり、即ち銀座分工場、紀伊國橋分工場、紺屋町分工場之なり、別に銀座分室といふものありて内外の煙草を陳列しあり、銀座分室及び銀座分工場は銀座三丁目、紀伊國橋分工場は木挽町二丁目西河岸、紺屋町分工場は南紺屋町にあり。

▲瑞典公使館 明石町にあり。

▲海軍造兵廠 南小田原町一丁目にあり、海軍の兵器を製造する所にして、海軍省の附屬なり。

▲東京遞信管理局海事部 築地三丁目にあり以前は東京海事局と稱せしものなり。海上の事務を管理する所にして部長は棟居喜九馬氏なり。

▲東京地方海員審判所 築地三丁目にあり、海上にて起りたる船舶の災難等に因る原因を審判し

海員に對して行政的の處分をなす所にして所長は梅村貞明氏なり。

▲第一消防署築地出張所 築地三丁目本願寺境内にあり明治四十五年五月設置されたり。

小學校

附幼稚園圖書館

京橋區内に於ける市立小學校は十六校にして、私立小學校は明治四十四年迄七校ありしも今は一校もなし幼稚園は市立一、私立二を數へ圖書館は市立簡易圖書館一あるのみ。今左に之を列擧すべし。

▲東京市立泰明尋常小學校 本校は明治五年の創設にして當時尋常小學を分ちて上下二等とし同十四年學校教則綱領の發布により三等に分ち初等中等高等とし同十八年に至り増築して之を女子部に充て泰明女子小學校とし男女全く學校を異にせり同十九年小學校令發布により高等尋常に分てり卅三

年小學校令の改正に男子部を泰明尋常高等小學校と稱し女子部を泰明女子尋常高等小學校と稱せしか卅五年之を合せて泰明尋常高等小學校とせり同四十年義務教育年限の延長と共に高等科を分離し東京市泰明尋常小學校となれり。明治四十五年元數寄屋町一丁目四、五番地及び山下町四、五番地にある舊校舎の改築を行ひ同年五月三階建の校舎落成せり。

校地六百七十七坪餘 建坪五百三十坪餘
教員數 男十四名 女八名 合計廿二名
兒童數 一千二百一十一人 學校紀念日 六月二十五日
校長 高橋鐵藏 首席訓導 鈴木彦四郎

●東京市立南橋町尋常小學校 教育の發達と人口の増加とは就學兒童の激増を來し甚しく校舎の不足を感じたるの結果京橋區會は南橋町十、十一、十二番地に六百五十三坪餘を下して明治卅八年十二月工費貳萬六千〇二十圓を以て工を起し翌年五月落成を告げてより爾後校運年を追て發展し同四十

年四月高等科併置せらる翌四十一年學制令改正義務教育年限延長の爲尋常科の生徒急に増加せし爲高等科を分離し再び尋常小學校に復せり明治四十二年六月本校内に東京市立京橋區實業補習學校を設置せられ本校々長同校長に兼任を命ぜらる創立當時の校長は淺沼禎一氏なりしが明治四十年六月十五日小原峰太郎代りて校長となり四十四年九月十二日並木左傳校長の職につき、四十五年五月大澤厚二校長となり。學級數十四。

校地六百五十三坪餘 建坪四百九十四坪
教員數 男十二名 女六名 合計十八名
兒童數 八百二十一名 學校紀念日 六月十一日
校長 大澤厚二 首席訓導 八幡得吉

●東京市立築地尋常小學校 本校は元朝海小學校と稱し明治三十四年の創立にして當時四百坪の校地を有するに過ぎざり同四十二年二月校舎全部類焼の災に遇ふや校地を擴張し校舎を新築し四十

三年十二月現今の校名に改稱せり。創立當時の校長は金子忠平氏なりしが明治三拾五年小原尚美氏之れに代り同三十六年笹野豊美氏任せらる、横山校長は當校再興の當初築地女子小學校より轉任し明治四十五年現校長就任す、明治四十五年五月就學兒童の増加を來し校舎の狹隘を感じし爲築地幼稚園の一部を借用して分敷場となし授業を開始せり。學級數廿四。

校地八百三十坪餘 建坪三百七十二坪餘
教員數 男十七名 女十名 合計廿七名
兒童數 千二百人 學校紀念日 一月廿五日
校長 並木左傳 首席訓導 及川正藏

●東京市立寶田尋常小學校 本校は本材木河岸卅七、卅八、四拾號地に有り。明治九年四十號地に百五十餘坪を下して一校舎を創設し第一中學區第五番小學寶田學校と稱す其後戶長高野直清同役場出納掛稻野七左衛門氏と謀り有志者を勧誘し金圓を購し官有河岸地に平家建を新築す而して當時の維持

費は區内有志者より各自毎月五拾錢宛の儲金と授業料を以て支辨せり明治九年十一月日本橋數寄屋町及明治十二年日本橋箱屋町出火の際類焼の災に遇ひ校舎及器具書類全部烏有に歸せり。斯く二度迄も類焼の難に遇ひし爲一時は廢校の議起りたれ共時の校務委員校長諸氏有志者と謀り再興に盡力せしかど其機運に至らざりき。明治十三年四月南傳馬町二丁目十五番地私立高野小學校場内の一部を借用し授業を開始せり時に府廳より補助金五十圓を下附せられたり當時本校の新築は頗る困難なりしが校務委員及校長有志者の盡力により明治十五年二月南大工町十一番地に假校舎を新築するに至れり同年六月工を終へ同月廿日より校内に庶民夜學校を設けて區内子弟の晝間餘暇なくして就學し能はざる者に便せり。明治十八年六月區内有志者の儲金と區費とを以て三たび舊敷地に煉瓦石造二階建校舎を新築し假校舎より生徒を移して授業を開始せり。明治廿一年六月區費を以

て木造二階建校舎を増築し同年十月校内に簡易無報酬學校を私設し普通時間外に之を教授す是れ区内有志者諸氏が貧民の子弟を教育せんが爲なり、明治廿三年本材木町三丁目に區費を以て木造二階建を新設し分敷場となし明治廿四年一月開場式を行ふ。明治廿七年六月地震の爲煉瓦石造校舎大破損を生ぜし爲尋常科第一、第二學年男女生徒高等科女生徒を疊町十七番地私立秋津小學校の一部を借用して假分敷場とし授業を開始せり。明治廿九年一月本區一の部有志者の寄附金を募り區費の補助を得て木造二階建校舎の改築をなし全生徒を收容して分敷場及假敷場を閉鎖せり現今の校地校舎の大部之れなり、明治卅九年四月本校内に新築せられたる東京市立京橋區第一實業補習學校開校式を行ふ。

校地三百四十四坪餘 建坪二百五十八坪餘
教員數 男十一名 女八名 合計十九名
兒童數 八百八十一人 學校紀念日 十二月九日
校長 井口助次郎 首席訓導 高木市左衛門

す。明治卅九年六月本校内に京橋區第一夜學校を附設せらるる同月授業を開始せり。

校地四百八十一坪九二 建坪百九十九坪五
教員數 男十一名 女五名 合計十六名
兒童數 七百二十五人 學校紀念日 九月二日
校長 石田幸造 首席訓導 楠原幸啓

▲東京市立鐵砲洲尋常小學校

本校は京橋區新港町三丁目にありて校地八百五十四坪を有す。明治十年七月十二日附近は漁夫、魚商、勞働者等多かりし爲、其子女を教育すべく有志者相謀りて一貧民學校を設立して築地小學校と命名したるに其起源を發す。明治十九年小學校令改正に據り市立尋常小學校となり。明治四十三年校名を鐵砲洲小學校と改稱せられたりしが四十四年一月に至り改築工事をなし同年五月八日竣工す、而して四十四年四月十九日當校内に京橋區第三夜學校を附設せらるる事となり同年六月一日授業を開始せり。

校地八百五十四坪餘 建坪五百八十六坪餘

▲東京市立明石尋常小學校

本校は明石町四十二の一番地、四十三番地にありて明治四十一年一月廿七日校地、九百四十二坪餘を下して起工し同年五月三十一日竣工して六月十三日文海、築地女子、築地、鳥海、京華の五小學校より生徒を收容して九學級に編制して授業を開始し同年十一月二十日開校式を舉行したりしが、明治四十二年四月一日更に文海、築地女子の生徒及び新入學の兒童を收容して十七學級に編制し四十三年四月一日十八學級、四十四年四月一日十九學級となりたり。

校地九百四十二坪餘 建坪六百四十二坪餘
教員數 男十四名 女八名 合計二十二名
兒童數 一千百三十七人 學校紀念日 十一月二十日
校長 本橋俊之助 首席訓導 宮本彦三郎

▲東京市立京華尋常小學校

本校は元島町二番地にありて土地四百八十一坪餘を下して起工し明治卅四年七月廿八日二階建校舎落成せり。同年九月二日兒童を收容して十二學級に編制し授業を開始

教員男 十六名 女六名 合計廿二名
兒童數 一千〇十五人 學校紀念日 六月二十六日
校長 弘中吉太郎 首席訓導 青木金太郎

▲東京市立京橋尋常小學校

本校は京橋區金六町十七番地、廿二番地の二號、木挽町一丁目十七番地の二號にありて其主要部を井間堀川埋立地とし此坪數七百八十六坪五勺、之れに市有河岸地百九十二坪八合八勺を加へ合計九百七十八坪九合三勺なり。本校は新設小學校にして明治四十二年六月一日起工、全十月十八日竣工、同十一月一日東京市朝海尋常小學校兒童を本校に指定替へ之れと同時に同校長以下訓導十四名を本校に轉任せしめ授業を開始し同年十一月二十五日校旗を制定して開校式を舉行せり。明治四十三年三月卅一日附屬なりし朝海幼稚園は設備の都合により築地女子小學校内に移り獨立す。明治四十四年一月廿八日東京市立簡易圖書館を本校内に設置せらる、同年四月木挽町小學校廢校と

なりしに付兒童を本校に收容して十八學級となる。

校地九百七十八坪餘 建坪三百八十五坪餘

教員數 男十四名 女八名 合計廿二名

兒童數 千五百五十名 學校紀念日 十一月廿五日

校長 笹野豊美 首席訓導 神子精

▲東京市立靈岸島尋常小學校

本校は越前堀二丁目五番地に有りて校地三百九十八坪餘を有す

明治九年靈岸島鹽町に附近の子弟を教育すべく有志者相謀りて假校舍を設立せしに其起源を發す、明治十二年三月川口町に移轉し十三年二月四日現在の地に移轉す、明治十六年増築を行ひしが尙校舍の不足を生ぜし爲二階建を増築せり、明治廿七年四月に至り全部の改築をなす、明治三十二年女子部全部類焼の災に遇ひ三十三年十一月再築工事をなし現今の校舍竣工せり。

校地三百九十八坪六合 建坪二百十八坪

教員數 男八名 女五名 合計十三名

兒童數 四百九十六人 學校紀念日 九月十六日

校長 落合綱藏 首席訓導 奥山順一郎

▲京橋第二夜學校を附設せらる。

校地千四百四十坪餘 建坪四百五十坪

教員數 男十四名 女六名 合計廿名

兒童數 八百七十七人 學校紀念日 十月一日

校長 遠山光二 首席訓導 渡邊亮

▲東京市立月島第二尋常小學校

明治廿七年

八年戰役以來諸工場の勃興と共に順に人口の増加を見從て就學兒童も著しく増加し來りし爲姑息の手段を以てしては到底之れを收容し得べからざるを豫測し明治四十一年十一月元私立東京航海學校を買收して月島第二小學校と命名したるに起源を發す、爾後校運日に進み月に進みて校舍の狹隘を感ずるに至り明治四十三年十二月廿四日新築起工し翌四十四年五月廿日二階建校舎竣工せり現今の校舍是れなり。

校地千七百十坪餘 建坪六百十坪餘

教員數 男廿一名 女九名 合計卅名

兒童數 千二百四十四人 學校紀念日 七月七日

校長 櫻井花影 首席訓導 小暮辰衛

七六

▲東京市立越前堀尋常小學校

本校は越前堀二丁目一番地一號、二番地二號地にありて明治四十一年十二月十五日土地九百五十三坪餘を以て新設せられたる學校にして翌四十二年一月八日より授業を開始す之れと同時に實業補習夜學校を校内に附設せられ授業を開始せり。

校地九百五十三坪四七 建坪三百二十五坪五

教員數 男十五名 女七名 合計廿二名

兒童數 九百七十九人 學校紀念日 三月卅日

校長 奥田茂太郎 首席訓導 一盛野正

▲東京市立月島尋常小學校

本校は月島通三丁目七、九、十一番地四丁目一番地に土地千四百坪餘を以て明治卅八年八月起工し同卅八年十二月竣工翌九年一月八日開校式を舉行したる學校なり而して十六學級を編制するに至れり爾後校運年を追ふて發展し就學兒童の増加せし爲校舍の狹隘なるより月島西仲通二丁目四五番地に假教場を新設し目下五學級を編制するに至れり。明治四十年六月校内に

度より義務教育年限延長に關する法令公布せられたる結果明治四十一年度より高等小學校を男女各一校とし男兒を文海校に女兒を築地女子尋常校に假用し前者は鶴岡重治氏校長を兼ね後者は横山健三郎氏之れを兼ね引續明治四十三年十二月十六日十五萬圓を以て校地校舎の買收を結了し明治四十四年六月十五日起工し全年十月二十三日新築落成し明治四十四年十一月五日女子高等小學校を之に合併し男女生徒を收容して十五學級に編制せり。明治四十二年六月校内に女子實業補習學校を附設せられ専ら本校卒業生尋常科卒業生を入學せしめて裁縫算術國語隨意科として生花煎茶等を教授し居れり。

▲東京市立京橋高等小學校

明治四十一年

校地千四百五十七坪餘 建坪七百五十一坪餘

教員數 男十二名 女五名 合計十七名

兒童數 七百三十二人 學校紀念日 十一月七日

校長 小原峰太郎 首席訓導 池田政太郎

七七

▲文海小學校 明治四十四年生徒全部他小學校に收容せられて、現在生徒なし。

▲佃島小學校 名のみ存して生徒なし。

▲築地女子小學校 名のみ存して生徒なし。

▲鳥海幼稚園 築地三丁目にあり。市立にして園長は千葉ひで子。

▲築地幼稚園 明不町にある私立なり。園長はエラロールマン氏。

▲精果幼稚園 入船町一丁目にあり私立なり。園長は小島壽雄氏。

▲京橋第一簡易圖書館 京橋尋常小學校内にありて東京市立なり。閲覧無料。開館時間は午後三世より、日曜祭日は午前八時より。主幹笹野豊美氏。

▲京橋第二簡易圖書館 月島小學校内にあり其他前項に全じ。主幹遠山光二氏。

各種學校

▲海軍大學 築地四丁目にあり、海軍將校及び機關官に高等の學術を教授する所にして、將校科甲種、同乙種、機關科甲種、同乙種及び選科の五科に分れ、將校科の内甲種學生には高等の兵學及び其他の學術、乙種學生には砲術、水雷術及び航海術に關する高等の學術機關科の内甲種學生には機關計畫に關する高等の學術、乙種學生には高等の機關學及び其他の學術を授け選科學生には各自の選擇する學術を修めしむ。修業年限は將校科甲種二年、同乙種、選科及機關科甲種は各一ケ年、機關科乙種は一ケ年四ケ月とす。將校科の學生は海軍大尉、機關科の學生は海軍大機關士及び中機關士にして各科とも海軍

大臣の選拔認定を経て學生となる事を得。但し選科學のみは海軍佐官、機關官又は實役三ケ年以上を経たる海軍大尉及び大機關士は海軍大臣の認可を経て入學する事を得。學生の總數は將校九十名、機關官二十五名以内なり。明治二十一年七月の創立にして明治三十六年十二月現行の校制に改む。現校長は海軍中將坂本俊篤氏なり。

▲海軍經理學校 築地四丁目にあり、少主計候補生をして海軍主計官に必要な職務を練習せしめ兼ねて筆記、厨宰及び一二等主厨並に筆記となすべき卒をして實務を練習せしむる所なり。又必要に依り主計官及び上等筆記をして其職務を練習せしむ。學生は準士官以上候補生、練習生は下士卒にして共に海軍大臣の認可を要す。明治七年十月會計局監督の下に會計學舎を置きたるを本校の濫觴とし、明治八年八月主計學舎と改稱し明治十年十一月一時之を廢せしが、明治十五年更に主計學舎を置き明治十

九年海軍主計學校と稱し其後經理學校と改稱するに至れり。

▲海軍々醫學學校 築地四丁目にあり、本校は海軍々醫官に高等の學術を教授し兼て新に採用したる海軍々醫及び軍醫候補生又は藥劑士候補生をして海軍々醫官、海軍藥劑官たるに必要な學術及び職務を練習せしむる所にして、明治六年八月海軍々醫學舎を設置したるに始まり明治三十六年十二月現行の校制となれり。

▲立教大學 明石町にあり。私立にして文學及び商業上須要なる高等の教育を施すを以て目的とせる學校なり。分て文科、商科の二分科とし本科、豫科、選科の三種とす。本科三ケ年、豫科壹ケ年半にして修業中は徴兵猶豫の特典を受く。校長元田作之進氏。

▲立教中學校 明石町にあり、文部省認定の私立中學にして徴兵猶豫の特典あり。校長元田作之進

氏。

▲東京府立工藝學校

築地三丁目十五番地にあり。本校は工藝學校規程に基き、金工業、木工業に従事せんとする男子に必要な智識技能を授くる學校にして、生徒の定員は二百名なり。年齢十四歳以上の男子にして高等小學卒業の者又は之を同等以上の學力ある者には入學を許す。修業年限は四ヶ年にして授業料は壹圓なり。他に附屬補習夜學校の設あり。

▲工手學校

南小田原町四丁目にありて各種の工業に従事する者の爲に必要な智識技能を授くるを以て目的とす。晝間部、夜間部の二種ありて晝間部は定員千名、夜間部は生徒定員二千五百名なり。明治二十一年二月の創立にして校長は工學博士石橋絢彦氏なり。

▲築地英語學校

入船町四丁目にありて正則實用的英語を教授し併せて基督教主義に依り學生の徳

性を涵養するを以て目的となし、本科三年、豫科一年、會話專修科二年、隨意科無期限なり。

▲明治工學校

築地一丁目にありて土木、建築、機械電氣等の専門技術者たるべき者を養成する學校なり。校長工學博士日下部辨二郎氏。

▲野口裁縫實修女學校

南八丁堀二丁目二十五番地にありて女子の實業に適する裁縫を教授するを目的とし入學は何時にても隨意なり。古流生花、茶の湯等の別科あり更に寄宿舎の設ありて遠地の女子に便宜を與へる等頗る實用的に成績を擧げつゝあり。

▲豊國學校

私立にして簿記學を教授する所なり、所在地木挽町四丁目。

▲福音會英語學校

數寄屋橋外西紺屋町にありて基督教主義に依り正則英語を教授す、私立。

▲立教高等女學校

明石町にありて良妻賢母たるべき女子を教養する學校なり。私立。校長小林

彦五郎氏。

▲盲人技術學校

築地本願寺内にありて私立なり、本校は盲人に鍼灸按摩音樂等に關する必須の學術技藝を教授し獨立自營の人たらしむるを以て目的とす。校長鶴高隆憲氏、校長文學博士前田慧雲氏。

▲中央商業學校

大川端町にある中學程度の學校にして私立なり。

▲啓蒙學校

尋常小學程度の學校にして外國人經營の私立學校なり。

▲女子實業補習學校

京橋高等小學校の記事参照。

▲實業補習夜學校

本區に三校あり小學校欄参照。

▲三一神學校

明石町にある基督教主義の學校なり。私立。

▲志成學校

明石町にある基督教主義の學校にして、生徒は多く支那人なり。

▲京橋區夜學校

市立にして二校あり小學校欄参照。

▲東京電話交換手養成所

官立にして京橋電話局内にあり、電話交換手となすべきものを養成する所にして入學當時より手當として一日拾五錢宛を支給す。所長三浦吉之助氏。

衛生設備

▲氣候風土

和適の二字は東京市の氣象を評するに最も適當の文字なれば、隨て京橋區の氣候とても他の區と相異せるところあらず、されば京橋區の氣候亦和適の二文字を以て評すべし。然して本區は一般に先づ高低なき土地なれば、本所、深川、淺草等の如く少しく強き風雨あれば直に浸水の厄に遭ふが如き事なく、商工業の繁榮に従ひ衛生上の設備亦完成し居るを以て衛生上より見ても先づ

完備せる市街なりと稱するを得べし。

▲公設機關 東京市の設備即ち區役所衛生掛の外に京橋區衛生會ありて諸般の衛生機關となりつゝあり。京橋區衛生掛は區勢欄、京橋區衛生會は團體の部参照。

▲病院 本區内に左の病院ありて諸患者を療養しつゝあり。

▲施療病院 東京市の設立にして築地四丁目海軍大學側にあり、貧困者にして區役所の證明ある者は無料にて療養する事を得。醫師は海軍々醫なり。

▲岡田内科病院 南大工町にあり、院長は醫學博士岡田榮吉にして主として内科のみを治療す。

▲木村病院 三十間堀一丁目にあり、内外科にして院長はドクトル木村順吉。

▲大野病院 木挽町五丁目にありて、花柳病科を専門とす、院長醫學士大野豊太。

及び學校卒業者の三種あり。開業試験及第者は文部省の檢定試験に合格たるものにして、從來開業とは醫師免許規則發布以前に醫師として開業しつゝありしもの亦學校卒業醫とは文部省直轄、又は公立及び文部省認可の專門學校並に大學醫學部を卒業したる醫學士を稱す。而して本區内には百四十八人の醫師ありて患者の治療に従事しつゝあり。今其姓名を左に掲載す。

柳町二	秋元 龍珠	試験及第
本材木町三の十一	高岡 傳次	全 上
全 三の二一	横田 直吉	全 上
全 三の廿四	戸塚 文雄	ドクトル
全 三の廿七	内田 彦雄	大學卒業
鈴木町五	原田吉次郎	全 上
因幡町一	土屋 貞三	試験及第
南箱町十九	小田部家貞	專門學校
大鋸町三	小堀 保	從來開業
中橋和泉町二	松本 章太	大學卒業

▲加藤病院 木挽町七丁目にあり、外科を専門とす、院長ドクトル加藤時次郎。

▲山田病院 築地二丁目にありて内科専門殊に神經病に特長あり、院長醫學博士山田鐵藏。

▲林病院 築地三丁目にあり、外科を専門とす、院長林暉。

▲田村病院 明石町にあり、内外科にして院長醫學士田村光顯。

▲靈岸島病院 越前堀一丁目にあり、内外科にして院長ドクトル和田劍之助。

▲海岸病院 新佃東町にあり内外科にして院長醫學士安藤勝四郎。

▲實費診療所 中流人士の爲めに設立せられたるものにして木挽町七丁目加藤病院内にあり。

▲池田病院 木挽町三丁目にあり主として花柳病を取扱ふ、院長池田悦次郎。

▲醫師 醫師には開業試験及第者と、從來開業醫師

中橋和泉町三	望月 達男	試験及第
松川町二	木村助三郎	全 上
松川町三	下田芳次郎	全 上
南傳馬町三の廿五	金田 西一	全 上
南鍛冶町十九	北村 正雄	專門學校
全 十九	酒井 靜一	試験及第
北橋町一	桐淵 道齊	從來開業
桶町八	村木 達郎	試験及第
全 二十三	鈴木 良吉	全 上
壘町五	安藤勝四郎	大學卒業
炭町十	山村 啓吉	大學卒業
銀座一の十二	田中達三郎	試験及第
銀座二の十	横山喜三郎	全 上
全 三の廿一	吉田 けん	全 上
全 四の十八	高田 群司	全 上
南紺屋町二十四	富岡實次郎	大學卒業
弓町十二	鈴木 麟祥	試験及第
鎗屋町十一	鳥山南壽次郎	大學卒業
西紺屋町四	黒河内金八	試験及第
新肴町六	棚谷 龍藏	全 上

南鍋町一の三	葛目猪太郎	試驗及第	木挽町二の十四	佐野 吉作	ドクトル
全 一の六	千秋雄雌郎	專門學校	全 二の十四	田村 貞策	醫學士
全 二の五	小林 榮吉	全 上	木挽町三の十六	沼野孝太郎	大學卒業
元數寄屋町一の	岩村直三郎	試驗及第	全 三の廿一	池田悦次郎	ドクトル
南佐柄木町三	岡田延吉郎	全 上	全 六の十	加藤時次郎	全 上
全 五	川上元治郎	大學卒業	全 十の二	鈴木 文之	試驗及第
山下町二十三	上池 正貞	試驗及第	全 十の四	鶴飼 碧汀	全 上
加賀町四	木村 壯三	全 上	大鋸町七	能勢 博章	專門學校
全 六	池田米次郎	全 上	木挽町十の六	三田 弘	試驗及第
日吉町一	梅田篤之助	全 上	采女町十三	秦 親循	全 上
南金六町十五	森永 友健	大學卒業	八丁堀岡崎町一の四十八	菊地 四郎	專門學校
三十間堀二の一	黒岩 徳明	全 上	采女町二十一	福田 謙之	醫學士
全 二の九	町田鏌之助	試驗及第	全 二十五	鈴木 主計	ドクトル
全 三の六	下村幾之助	全 上	全 二十六	浦島 堅吉	試驗及第
木挽町一の十一	西 實之助	全 上	築地一の五	森 繁吉	大學卒業
木挽町一の十一	市川 太一	全 上	全 三の十一	山田 鐵藏	醫學博士
全 二の十三	五藤 克巳	全 上	全 三の十五	林 曄	醫學士
全 二の十三	菅原 吉郎	全 上	月島西河岸通二の一	中山 直道	試驗及第
全 二の十三	酒井 好	全 上	月島通り二の二	栗田 勇	專門學校
全 二の十三	淺野 忠良	全 上	月島通り十一の五	笠原 基	試驗及第

入船町五の三	松前 榮	從來開業	岡崎町二の卅七	高川道太郎	從來開業
新富町一の六	黒澤 芬	專門學校	松屋町二の一	瀧波 壽	試驗及第
全 五の三	石井萬次郎	試驗及第	全 二の六	和智 静雄	全 上
全 六の六	河村 武男	全 上	全 二の六	高木 清徳	全 上
南八丁堀二の四	上田 正胤	從來開業	越前堀一の四	和田劍之助	ドクトル
全 三の六	佐伯 勇	試驗及第	東港町一の八	三浦 良平	大學卒業
全 一の一	賀來寛一郎	全 上	四日市町九	山室 義道	試驗及第
全 一の十五	渡邊 學之	全 上	南新堀一の十一	赤尾 ツル	全 上
全 一の十六	松下 鐵藏	全 上	全 二の一	稻田元三郎	全 上
新築町二の一	小栗 三吉	全 上	東港町二丁目	飯塚誠一郎	全 上
全 四の二	芦部恭之助	全 上	明石町三一	田村 光顯	醫學士
築地一の七	鈴村太一郎	專門學校	越前堀一の	稻尾 長安	試驗及第
入船町四の五	長谷川富次郎	試驗及第	月島通り九の八	稻垣春之助	全 上
築地四の三	山形熊次郎	全 上	南小田原町二の二十七	早坂糸太郎	專門學校
新港町一の十一	鈴木勇次郎	全 上	南鍋町二丁目	本田雄五郎	ドクトル
新築町四丁目	平賀 良庵	從來開業	本港河岸一	河越 逸記	試驗及第
南鍋町二の五	平島 熊次	試驗及第	南小田原町二の十四	加賀美鏡太	全 上
本八丁堀三の一	石黒 藤平	全 上	大鋸町十三	鎌田政次郎	專門學校
全 五の一	草場 鑒	專門學校	川口町七	加登信太郎	全 上
岡崎町一の四十一	本間喜代松	醫學士	月島西仲通五の二	竹内静太郎	試驗及第

松屋町三の一 建部 民男 全 上
 元敷寄屋町二の四 中泉 行徳 大學卒業
 新富町二の三 中山 音吉 試験及第
 木挽町一の六 山口 明 専門學校
 南新堀二の三 山野井織治 試験及第
 川口町 眞弓清一郎 全 上
 本八丁堀五の十 深澤 五策 全 上
 大鋸町十三 福井勝太郎 専門學校
 本材木町三の九 澤 式 試験及第
 采女町 佐藤 保 全 上
 岡崎町二の四 坂本 三平 専門學校
 南小田原町二の十二 佐藤達太郎 試験及第
 三十間堀一の六 木村 順吉 ドクトル
 因幡町七 宮下左右輔 大學卒業
 金六町 島田 吉俊 試験及第
 南鞘町二十八 澁谷 啓治 全 上
 ▲齒科醫
 彌左工門町四 永田 寛次 試験及第
 南傳馬町一の十 馬郡 欽作 全 上
 鈴木町十二 千田 茂 全 上

丸屋町五 八六 桐村 克巳 全 上
 彌左工門町七 佐藤 運雄 全 上
 南鍋町一の七 伊澤 信平 ドクトル
 瀧山町十一 菅沼友三郎 全
 南傳馬町一の十八 杉原清太郎 試験及第
 南金六町 松浦 謙 全 上
 新富町五の五 鹽島元四郎 全 上
 越前堀一の一 田島 滋雄 全 上
 南鍋町一の十 高島多米治 ドクトル
 築地二の十六 中村 五六 試験及第
 全 二の二十五 奥村 文平 全 上
 岡崎町一丁目四十七 中島 左一 全 上
 全 一の四十三 北澤諭一郎 全 上
 木挽町三の十二 山中 秀吉 全 上
 明石町 岸 一太 醫學博士
 木挽町一の十一 都留 醫院 試験及第
 尾張町二の二三 笠井 二郎 全 上
 銀座三の十七 高山 紀齊 ドクトル
 山下町一八 山村樸次郎 全

▲藥劑師 藥劑師の姓名は左の如し。

越前堀一の二 清水 與作 試験及第
 全 一の二 牧 爲次郎 全 上
 全 一の四 伊藤寅之助 全 上
 三十間堀二の九 坂本 源藏 全 上
 出雲町一 福原 有信 全 上
 南紺屋町十九 今井覺太郎 全 上
 長澤町九 小方 金藏 全 上
 岡崎町一の三十八 菊地 芳丸 大學卒業
 桶町十一 増田虎太郎 試験及第
 新富町一の七 竹島竹太郎 全 上
 築地一の八 植村甚之助 全 上
 八官町四 野田寅五郎 全 上
 新佃西町一の二十六 黒澤利兵衛 全 上
 弓町十五 谷口保之助 全 上
 四日市町十 野村音三郎 全 上
 南傳馬町三の八 藤田 茂吉 全 上
 岡崎町一の十六 重澤多三郎 全 上
 南鍛冶町十一 森 藤吉 全 上

因幡町十八 小野澤梅吉 試験及第
 越前堀二の二 福山 又一 大學卒業
 木挽町五の三 遠藤 美文 試験及第
 全 一の十一 石井 喜八 全 上
 出雲町五 大塚 盛秀 全 上
 本八丁堀一の九 田中虎之助 大學卒業
 築地三の十一 石田菊太郎 試験及第
 新佃西町一の七 山下愛次郎 全 上
 月島西河岸二の一 中山 直敏 専門學校
 長崎町二の八 山本 一郎 試験及第
 南小田原町二の十九 石黒 伊吉 全 上
 築地二の二十六 淺井富三郎 全 上
 尾張町新地二 掛札 功 専門學校
 銀町二の十四 黒田 座平 全 上
 北横町十四 島村幸次郎 試験及第
 新富町三の一 梅原忠次郎 全 上
 ▲其他の衛生機關
 の外に、整骨醫、入齒師、上記せる病院醫師藥劑師
 鍼灸術、看護婦、産婆等
 あり、是れ實に衛生上の補助機關とも稱すべきもの

にして、これに依頼せんとする者は先づ醫師の指導を受くることよからん。此の氏名をも掲載すべき筈なれど余りに煩はしければ茲には略し置くべし、職業別参照の事。

▲京橋區醫師會 東京醫師會の京橋支會にして醫師の權利を尊重し併せて醫師の本務を盡し而して醫事衛生の發達を圖るにあり。

實業機關

京橋區は日本橋區と並びて商工業の最も盛大なる所なるは總説等に於て説述せる如くなるが爾かも其商工業即ち實業の種類は擧げて數ふるに遑なし、されば本區の實業機關を個々別々に別舉し一々掲出し來ることは其の煩累言ふべからざるものありて卷を積むとも盡す能はざれば、實業機關として特別のもののみを左に掲げんとす。

▲銀行公會社 特種の法令によりて設立せられ營業をなしつゝある銀行會社は其數甚だ多し、此の銀行公會社は實業に多大の貢獻をなしつゝあり。今其の重なるものを舉れば左の如し。

- ▲銀行
- 十五銀行(株式) 木挽町七の六 明治十年五月
 - 三十銀行(株式) 本八丁堀四丁目 明治十年十二月
 - 八十四銀行(株式) 濱町八 明治十二年十二月
 - 帝國貯蓄銀行(株式) 銀座一、河岸 明治廿九年八月
 - 丁酉銀行(株式) 宗十郎町十三 明治三十年八月
 - 興業貯蓄銀行(株式) 南新堀一の二 明治三十年九月
 - 橋貯蓄銀行(合資) 高代町
 - 稻山銀行 山下町
 - 國民銀行(株式) 南傳馬町一の二 明治卅一年九月
 - 興信銀行(株式) 宗十郎町一 明治卅三年十月
 - 浪速銀行支店 南傳馬一の十七
 - 八十四銀行京橋支店 尾張町二丁目角
 - 八十四銀行八丁堀支店 岡崎町一の十六
 - 東京榮銀行(株式) 三十間堀一丁目

- 東海銀行京橋支店 尾張町一の四
- 龜崎銀行東京支店 本八丁堀五の一
- 川崎銀行櫻橋支店 南八丁堀二丁目

- ▲會社
- 東洋生命保險會社(株式) 南鞘町六 明治卅三年十月
 - 內國生命保險會社(株式) 加賀町九 明治廿六年六月
 - 徵兵保險會社(株式) 鎗屋町
 - 日本徵兵保險相互會社 南大工町
 - 日本傷害保險會社(株式) 南傳馬町三丁目
 - 大同生命保險東京支店 南紺屋町一
 - 蓬萊生命保險會社 新肴町十
 - 千代田生命保險會社 南大工町
 - 東海生命保險會社 新肴町
 - 東洋火災保險會社(株式) 新富町
 - 東亞火災保險會社(株式) 柳町五
 - 東邦火災保險會社(株式) 銀座三の二〇
 - 日本火災保險會社東京支店 銀座一の十二
 - 浪速火災關東支店 山下町
 - 太平生命保險會社 築地二丁目
 - 國光生命保險會社 元數寄屋町四丁目

元數寄屋町四丁目

- 帝國火災保險會社 元數寄屋町四丁目
 - 太陽生命保險會社東京支店 三十間堀二丁目
 - 滿韓起業株式會社 鎗屋町十
 - 合名會社大倉組 銀座二の七
 - 合名會社神木商店 南傳馬町
 - 全上垣内商店 新肴町十三
 - 全上日米商店 尾張町新地
 - 全上彌滿登商會 木挽町三の廿一
 - 全上日 就社 銀座一丁目
 - 全上經濟雜誌社 彌左衛門町
 - 全上朝日新聞社 瀧山町
 - 全上東京通信社 采女町
 - 桂川電力株式會社 銀座三の十九
 - 東京商業仲介株式會社 本材木町三の十
 - 東京救命具合名會社 船松町十三
 - 合名會社時事新報社 南鍋町二
 - 東京用達合名會社 南旗町
 - 合資會社スレート商會 木挽町二の十二
 - 北隆館合資會社 鎗屋町
 - 東京鑄鋼合資會社 月島西仲通六ノ一
- ▲實業
- 船地方の漁獲物販賣
 - 海外貿易官衙需要品供給等
 - 歐米帽子小問物販賣
 - 西洋織物卸販賣
 - 自轉車販賣
 - 特許清雜販賣
 - 新聞發賣印刷業
 - 出版業
 - 新聞發賣印刷業
 - 通信及廣告取次
 - 仲介業
 - 船舶用救命具製造
 - 新聞發賣印刷業
 - 各種委託販賣
 - 家根具等販賣
 - 新聞賣捌
 - 鋼鑄造業

合資會社月島鐵工所 月島通六の八 機械製造
 東京國文社 宗十郎町十五 印刷業
 東洋移民合資會社 新肴町十 海外移民取扱
 帝國博品館 南金六町四 諸物品出品販賣
 東都信盛合資會社 八丁堀仲町十六
 日本倉庫株式會社 月島西河岸通九の七
 合資會社廣目屋 銀座一の十二 廣告業
 正路喜社 宗十郎町 新聞雜誌廣告取次
 電氣株式會社 明石町四十八
 竹清合資會社 八丁堀仲町十 竹材商
 宇都宮回漕店 南金六町七 運送業
 生秀館合資會社 銀座三の一 美術品販賣
 合資會社共益商社 竹川町十三 内外樂器販賣
 合資會社吉川弘文館 新榮町五丁目 出版業
 松本樂器合資會社 銀座四の四 樂器製造販賣
 三協印刷合資會社 弓町二十四 印刷業
 明治興業株式會社 具足町九
 共盛貯金株式會社 月島西河岸通三の二
 株式會社隆文館 南錫町二丁目 出版業
 大日本圖書株式會社 銀座一の廿二 出版業

築地活版製造所 築地二の十七 活字鑄造販賣
 株式會社秀英舎 西紺屋町 印刷業
 石川島造船所 佃島 造船業
 東西製藥合資會社 常盤町六 製藥業
 富士製紙株式會社 三十間堀一の二 製紙業
 株式會社國光社 築地三の廿一 印刷業
 日本國債株式會社 日吉町
 磐城炭坑株式會社 本港町九 石炭採掘販賣
 茨城無煙炭礦株式會社 明石町 全上
 東京灣汽船株式會社 新船松町 海運業
 日榮貯金合資會社 本八丁堀三の四
 日本勸業株式會社 南金六町十五
 東洋インキ株式會社 南鍛冶町十八 インキ製造
 日本胞衣株式會社 城邊河岸 胞衣理納業
 歌舞伎座株式會社 木挽三丁目 演劇業
 東京精米株式會社 月島通一丁目 精米業
 月島製鋼株式會社 月島東川岸通六 製鋼業
 合資會社高田商會 銀座一丁目 貿易業
 株式會社審美書院 新肴町十三 出版業
 合名會社吉田商會 山下町一 機械輸入販賣

遠洋漁業株式會社 月島西河岸通五 漁獲業
 中央興業合資會社 八丁堀仲町
 大日本麥酒株式會社 竹川町
 日本貿易株式會社 銀座二の四
 カプトビール會社出張所 尾張町
 金町製瓦會社出張所 松屋町一の五
 ▲工場 工場としては先づ月島の諸鐵工場を第一に擧げざるべからず、月島の鐵工場を除きては他に工場らしき工場を見ず。今其の重なるものを擧ぐれば左の如し。
 柏原 工場 築地二の卅 機械製造
 東京製米會社工場 月島通一丁目 精米
 山口鐵工場 佃島四 鑄製造
 加藤 工場 南本郷町 機械製造
 相馬石輪工場 新富町七の六 石輪製造
 杉田 工場 築地一丁目 家具製造
 飯田 工場 越前堀二の一 機械製造
 國末金庫工場 築地一丁目 金庫製造
 服部 工場 築地三の十五 機械製造

東京鑄鋼會社工場 月島西河岸通六の一 鑄鋼業
 田澤電氣工場 南小田原町二の八 電氣機械
 平野鐵工所 月島通九の八 機械製作
 石川島造船工場 佃島 造船業
 黒板 工場 月島通五丁目 機械製作
 石川造船所 月島西河岸通二の五 造船業
 石川 工場 月島通十の六 機械製作
 保坂 工場 月島通六の五 全上
 東京鋼作所 月島通九の十 全上
 小田 工場 南飯田町 電機製作
 筑間 工場 月島西河岸通二の五 機械製作
 山口 工場 月島通七の七 全上
 松浦 工場 東港町一の三 電機製作
 櫻田 工場 川口町二十八 機械製作
 光枝 工場 月島東河岸通三の十 全上
 三村 工場 月島東河岸通三丁目 全上
 ▲組合 本区内に介在する諸種の組合は其數甚だ多し其の種類は日本全國の同業者と聯絡するものと又東京市内の同業者、本区内のみの同業者と聯絡す

るものとあり。今其の重なるものを左に掲出す。

- 東京木器器具製造販賣同業組合
- 東京石版印刷同業組合
- 東京製本同業組合
- 東京酒造組合
- 有限責任購買組合砲工共益會
- 東京酒問屋組合
- 東京酒類問屋組合
- 東京海草問屋組合
- 東京諸畜買肉組合
- 東京甘藷問屋組合
- 東京市菓子卸賣營業組合
- 東京地鹽問屋組合
- 東京市料理飲食營業組合
- 東京石灰燐灰問屋組合
- 東京洋服業組合
- 東京西洋小問物商組合
- 東京市京橋區薪炭商問屋組合
- 東京海川鮮業組合
- 東京肥料糖問屋組合

- 高代町七
- 因幡町十七
- 采女町二一
- 靈岸島町三
- 山城町十四
- 濱町三
- 靈岸島町四
- 靈岸島町三
- 北紺屋町二
- 松屋町三の十一
- 疊町三十
- 五郎兵衛町十七
- 竹川町十八
- 靈岸島町三
- 八官町一
- 北横町二
- 本港町七
- 新船松町
- 長崎町一の七

- 東京地糠商組合
- 東京糠問屋組合
- 東京藍商組合
- 東京洋紙商組合
- 東京土商組合
- 東京船具問屋組合
- 東京棕枙皮繩問屋組合
- 玉川砂利販賣商組合
- 東京履物商組合
- 東京磨粉商組合
- 東京大鋸職組合
- 東京煉瓦石建築職組合
- 東京屋根葺請負業組合
- 東京船大工職工組合
- 東京木具椅子指物工業組合
- 東京諸車製造業組合
- 京橋人力車業組合
- 東京鐵工業組合
- 東京木版彫刻業組合
- 東京活版印刷業組合

- 越前堀町二の五
- 長崎町一の五
- 東港町二の三
- 築地二の六
- 松屋町三の十一
- 靈岸島町三
- 靈岸島町三
- 弓町四
- 八官町十
- 本港町一
- 越前堀一の十
- 北紺屋町三
- 日吉町九
- 越前堀一の二
- 築地一の七
- 南八丁堀一の廿二
- 築地一の二
- 山城町一
- 南鍋町二の五
- 元數寄屋町二の十三

- 東京府ラムネ製造業組合
- 東京府木箱製造業組合
- 東京刺繡業組合
- 東京土木建築組合京橋支部
- 京橋日本橋下駄職業組合
- 土工實業組合
- 東京青物果物小賣營業組合

- 木挽町二の十二
- 北横町十八
- 入舟町五の一
- 新築町三
- 和泉町一
- 松屋町一の四
- 弓町四

▲市場 市場としては北紺屋町、南紺屋町、疊町、南傳馬町に涉りて毎日開かる、青物市場を擧べし、俗に大根河岸の市場と稱するものは是なり。此の市場は寛文四年に創立せられ今に至るも少しも衰退せず若ろ盛に青物の市場となりつゝあり。昔時は朝夕二回の開市なりしも維新後毎朝午前六時に開場し午前十一時に閉場する事となれり。

- ▲勸工場 勸工場としては左の三ヶ所を擧ぐ。
- 帝國博品館(株式)
- 新橋 際
- 天下堂(個人)
- 出雲町
- ハイカラ堂(個人)
- 銀座一丁目

▲興信所 實業機關としては興信所亦非常の信用機關となりつゝあるを知らざるべからず。されど只此の興信所のみを信じて實業の取引をなすは危険甚だし、依りて參考となして其の内報に接すること宜しからん、今其の興信所名を列擧せん。

- 帝國興信所
- 日本興信所
- 實業興信所
- 人事興信所
- 商業興信所
- 三十間堀
- 築地三丁目
- 新富町
- 弓町
- 瀧山町

新聞雜誌及通信

▲讀賣新聞 銀座一丁目京橋際にあり。發行所は日就社なり、明治七年創刊。

▲時事新報 南鍋町二丁目にありて福澤捨次郎、戸張志知之助、山本昌一三名の合名會社なり、明治十

五年三月初號發行。

▲萬朝報 弓町なる朝報社より發行す、明治二十六年六月の創刊にして社長は黒岩周六、山田藤吉郎なり。

▲東京朝日新聞 瀧山町なる朝日新聞合名會社より發行す、前身はめざまし新聞と稱せしが、明治二十一年七月現名に改題す。

▲やまご新聞 三十間堀一丁目にあり、松下合名會社より發行す、明治十九年の創刊にして三十四年日出國新聞と改題せしも再び今の名に復す。社長松下軍治。

▲國民新聞 日吉町にあり、明治二十二年二月の創刊なり。社長は徳富猪一郎。

▲日本 三十間堀三丁目にあり、明治二十二年二月の創刊にして社長は伊藤欽亮なり。

▲中央新聞 山城町にあり明治十八年五月の創立なり以前は繪入朝野新聞、江戸新聞などと稱したり。

▲工業雜誌 錦屋町。毎月一回。

▲電氣之友 南金六町電友社發行。毎月一回。

▲汽車汽船旅行案内 錦屋町十八庚寅新誌社より發行。

▲東京醫事新誌 南小田原町四丁目全社より發行。毎週一回。

▲帝國文學 銀座一丁目大日本圖書株式會社より發行す。毎月一回。

▲とさのこゑ 銀座二丁目救世軍本營より發行す。毎月二回。

▲女子文壇 大鋸町十一番地全社より發行す。毎月一回。

▲婦人世界 南紺屋町十二番地實業の日本社より發行す。毎月一回。

▲日本少年 南紺屋町實業の日本社發行毎月一回。

▲少年 南鍋町二丁目時事新報社より發行。毎月一回。

▲大正日報 元數寄屋町にあり、以前は海國日報と稱せり。社長は大刀川又八郎なり。

▲東洋新報 三十間堀一丁目にあり。

▲豊國新聞 南佐柄木町にあり。

通信

▲帝國通信 山下町にり。

▲自由通信 新着町にあり。

▲日本電報通信 瀧山町にあり。

▲東京通信 所在地は采女町。

▲獨立通信 山城町。

▲朝野通信 弓町。

▲切抜通信 采女町にあり。

雜誌

▲實業の日本 發行所は南紺屋町にあり、毎月二回。

▲東京經濟雜誌 彌左工門町七番地。毎月一回。

▲サンデー 築地三丁目より發行。毎週一回。

▲東洋 東京の改題せしものにして竹川町より發行す。毎週一回。

此の外小なる新聞雜誌類及び地方新聞の支局等あれども略し置く。

神社佛閣

▲築地稻荷神社 南小田原町一丁目勝鬨渡しの所にあり、萬治中の創建にして倉稻魂命を祀る、俗に波除稻荷社ともいふ、其由來は南小田原町一帯の土地埋立の際、東京灣より寄せ來る激浪のため堤防を破壊せらるる事屢々にて工事頗る困難なりしが、或る夜海上に光明ありて漂流するものありしに依り直ちに舟を舩して拾ひ見れば稻荷大明神の神體なりしものから高壇を作りて奉祀せし以後風浪の害なかりしといふ、波除の名此に因る。明治五年村社に列

し築地の總鎮守なり、祭日は六月十日にして、重なる社寶は神鏡二面、松平越中守至誠院弘化三年納之額(近衛篤磨書)、刀六振等あり。現在社掌は鈴木誠氏なり。

▲田宮神社 越前堀一丁目四番地にあり、以前四谷區左門村にありしも明治十三年現在の地に移る、俗にお岩稻荷を祭れるものなりといふ、末社に白狐社豊元社あり、俳優、藝妓等の参詣者多く門前には講中の待合茶屋二軒ありて繁昌し居れり。祭日は三月二の午とし、縁日は毎月十二日、午の日なり。

▲釣船神社 今は昔、南八丁堀に釣船を渡せとする高橋清次といふ者住みしが、釣上手なりしに依り釣船清次と人呼びたり。寛政二年五月二十五日の朝早く品川沖に釣を垂れ居りしに、異形の神體に出逢ひ悪病傳染の患を除く呪を授けられ、三拜九拜して歸りて後、漁業を廢し、自ら神像を畫きて日頃信する氷川宮、金比羅宮の神靈を奉祀せしが、不思議に

も信仰者に傳染病を患ひたるものなしと、噂は終に幕府に聞え一祠建立の儀を許可せらるゝに至りしといふ。文化九年八月清次病死して其子清次郎後を襲ひたりしが天保十二年七月亦臨終して三代目清次郎に遺言す、其後清次郎去りて明治二十年加藤清吉郎社掌となる。獅子頭一對の寶物あり。昔小石川音羽の棟梁保坂五郎兵衛が彫刻したるものなりと傳ふ。大祭は毎年五月二十三日より三日間にして縁日は毎月六日、二十四日。現在社掌は高橋清太郎氏。

▲鐵砲洲稻荷神社 豊受姫命、稚産靈命、倉稻魂命を祀れる所にして本港町にあり、以前は町東の海岸にありしが慶應三年八月現在の地に移りたり元八丁堀稻荷と稱す、創建年月詳かならず、明治六年七月郷社に陞れり。祭日は五月十九日、二十日、廿一日。縁日は毎月一日、十五日、二十八日。

▲住吉神社 佃島町にありて底筒男命、表筒男命、息長足姫命を祀れり。寛永年間攝洲佃村より此

地に移りたるものにして明治五年十一月村社に列し明治六年七月郷社に陞る。末社に龍神社、疫神社、入船神社、疱瘡神社、船魂神社あり。當社の白魚祭は神酒流と稱し以前は大寒の季節に執行したりしが維新後一月十七日と定めたり。天正年間白魚の種子を攝洲佃村より遷して此の海岸に放ちし時、神を祭りしよりの古例を引ききたるなりといふ。境内に藤あり、昔は有名なるものなりしが老木枯れて現時の藤は更に植を繼ぎたるものなりと。祭日は陰曆六月二十九日。現社掌平岡好文。

▲日比谷神社 日比谷河岸にあり、稻倉魂神を祀れる所にして日比谷町の鎮守たり、初め日比谷にありしが日比谷門造營の節此の地に移りたり。創建年月詳かならず。社守中教正小栗直亮。

▲穀豊稻荷神社 八官町にありて豊受姫命を祀れる所あり。以前は攝洲明石にありて明石稻荷と稱せしが元祿年間此の地に移れるものなりといふ。明治八

年村社に列せらる。

▲出世稻荷神社 南鍛冶町にある小なる祠にして貞享年間よりの創立にして以前は別當千光院など稱したるものなり。月次祭毎月五日。

▲千代田稻荷神社 南傳馬町にある小なる祠なり。以前此の邊を千代田村と稱せし往昔よりの鎮守神にして慶長十一年村家と共に此の地に祀られたるものなり。鳥居を控えて板葺の小祠傾きかゝり居れど祠前に竹めば遠き昔の面影の今面のあたり見ゆらん心地ぞする。

▲清正堂 具足町にあり、天保二年の創立にして日蓮宗なり。毎月三日、十三日、二十三日を賽日とす。

▲鷄林稻荷神社 京橋水谷町の土方七郎右工門屋敷の鎮守神なりしが今は其の跡だになし。此の社は白狐が白鳥の扇を奉納せしといふ甚だ迷はしき故事を有する祠なりしなり。

▲金春稻荷神社 南金六町にあり、以前は此の邊は

能役者金春太夫の屋敷なりしが、伏見桃山より此處の邸内に移したるものにして、祭神は宇迦御魂命なり。祠は新橋の藝妓街に接するを以て朝な夕な松吹く風のそれならねど心床しき三味の音通ひて鳥居、常夜燈、玉垣などに立願成就の奉納して藝妓などの其の名を刻む者頗る多し。縁日は毎月四日。

▲帝釋天堂 本八丁堀一丁目にあり、日蓮宗下谷區谷中一修寺の持にして安永九年榎川凌波の折り河中より出でたる石像なり初めは松屋橋際でありしが明治九年今の地に移したり。

▲天祖神社 松屋町にあり、伊勢波登美命、玉柱屋姫命を祭れるものにして、伊雜の御神のいふ天照皇大神の別宮にて里俗磁邊大神宮ともいふ以前は本八丁堀にありたりしが維新後此の地に移されたり。祭日は毎月六日、十六日、二十一日。

▲不動堂 岡崎町にあり、成田山新勝寺の出張所にて草創の節は松屋町にありしが明治十二年の大火に類焼してより此の地に移されたり。縁日は毎月廿七廿八の兩日なり。

▲港稻荷神社 東港町にあり、以前此の邊一面の海なりし際出洲にて芝海老の多く集まれる所より、えびの洲と唱へ従て此の宮を海老洲の宮と稱せしが後祭神を蛭子神に混じて呼ぶに至れるなり。

▲金比羅神社 越前堀にあり、大物主、崇徳天皇の二神を祭れり、明治八年山岡といへる者の邸内より遷座したるものなるが、神前には二基の獅子狢犬を置き臺石には寛政元己酉年六月吉日の銘あり。大祭は十月十日にして小祭は三月十日、例祭は毎月十日、二十日の兩日なり。

▲地藏堂 銀座にあり、例祭は毎月七日、十八日、二十九日にして中々の賑ひを呈す。

▲清正公 八官町にあり、例祭は毎月廿一日なり。

▲玉圓寺 岡崎町二丁目にあり、眞宗京都東本願寺の末派にして、大永三年龜島に創立し飛鳥山安禱院

と稱したりしが廣長八年今の號に改め寛永七年岡崎町二丁目に移り明治十五年今の地に移りたり。開基は僧慈惠といふ。猶此寺の本尊は住職の跡を追ふて大和の國より來給ひしとの傳説を有す。

▲醫王山圓覺寺 越前堀一丁目にあり、眞言宗にして弘法大師八十八ヶ所第十三番の札所なり。以前は靈岸島御前町にありしが明治十二年此の地に移りたり。本尊は三洲鳳來寺峰藥師と同木今作の丈三尺の御像にして元は高野山橋本の里にありしを以て橋本藥師ともいふ。縁日は毎月七日、十一日、二十一日なり。

▲西本願寺別院 築地三丁目にあり、眞宗京都西本願寺の別院にして、元和三年三月僧准如なるもの江戸淺草濱町即ち今の日本橋區濱町二丁目に一字を建立し、江戸海邊坊舎といひ後濱町坊舎と稱せしを本寺の起原となす。明暦の大火後今の地に移り築地御坊と稱せり。東叡山寛永寺、三縁山増上寺及本寺と

類焼してより此の地に移されたり。縁日は毎月廿七廿八の兩日なり。

▲港稻荷神社 東港町にあり、以前此の邊一面の海なりし際出洲にて芝海老の多く集まれる所より、えびの洲と唱へ従て此の宮を海老洲の宮と稱せしが後祭神を蛭子神に混じて呼ぶに至れるなり。

▲金比羅神社 越前堀にあり、大物主、崇徳天皇の二神を祭れり、明治八年山岡といへる者の邸内より遷座したるものなるが、神前には二基の獅子狢犬を置き臺石には寛政元己酉年六月吉日の銘あり。大祭は十月十日にして小祭は三月十日、例祭は毎月十日、二十日の兩日なり。

▲地藏堂 銀座にあり、例祭は毎月七日、十八日、二十九日にして中々の賑ひを呈す。

▲清正公 八官町にあり、例祭は毎月廿一日なり。

▲玉圓寺 岡崎町二丁目にあり、眞宗京都東本願寺の末派にして、大永三年龜島に創立し飛鳥山安禱院

と稱したりしが廣長八年今の號に改め寛永七年岡崎町二丁目に移り明治十五年今の地に移りたり。開基は僧慈惠といふ。猶此寺の本尊は住職の跡を追ふて大和の國より來給ひしとの傳説を有す。

▲醫王山圓覺寺 越前堀一丁目にあり、眞言宗にして弘法大師八十八ヶ所第十三番の札所なり。以前は靈岸島御前町にありしが明治十二年此の地に移りたり。本尊は三洲鳳來寺峰藥師と同木今作の丈三尺の御像にして元は高野山橋本の里にありしを以て橋本藥師ともいふ。縁日は毎月七日、十一日、二十一日なり。

▲西本願寺別院 築地三丁目にあり、眞宗京都西本願寺の別院にして、元和三年三月僧准如なるもの江戸淺草濱町即ち今の日本橋區濱町二丁目に一字を建立し、江戸海邊坊舎といひ後濱町坊舎と稱せしを本寺の起原となす。明暦の大火後今の地に移り築地御坊と稱せり。東叡山寛永寺、三縁山増上寺及本寺と

一日の宗祖降誕會、十一月一日より十六日に至る報

恩會其他春秋彼岸、常例説教、令女教會、傳道會あり。境内の末寺には左の各寺ありて有名なる人の墓碑もあり。

- 光輪寺 妙覺寺 徳法寺 福稱寺 源正寺
 - 延重寺 光西寺 延徳寺 海岸寺 正法寺
 - 光徳寺 勝林寺 法光寺 安養寺 善照寺
 - 覺照寺 淨見寺 善久寺 報身寺 正覺寺
 - 淨徳寺 淨泉寺 久寶寺 妙善寺 妙延寺
 - 光源寺 善水寺 稱揚寺 實相寺 善宗寺
 - 圓正寺 成勝寺 法照寺 法重寺 淨立寺
 - 圓光寺 西念寺 眞光寺 常榮寺 長專寺
 - 長安寺 寶林寺 西照寺 眞龍寺 善行寺
 - 萬福寺 正善寺 明西寺 延淨寺 萬行寺
 - 妙泉寺 應善寺 敬覺寺 淨光寺 眞教寺
 - 善林寺 常念寺 福泉寺
- ▲穿井觀音 南本郷町加藤純子氏の邸内にあり。
明治二十一年二月穿井の際現はれたるものにして千有餘年前の作なりといふ。

名所舊蹟

濱離宮 築地四丁目の南にありて東には洋々たる東京灣を控へて遙かに房總の山々を眺め、苑内には海水を引きて假山を築き櫻樹多くして幽邃の趣は實に譬ふるに物なし、されば畏き遊りても春の櫻の盛りの頃は臣僚を召されて御宴を催さる。
寛永頃迄は瀬海の洲渚にして蘆葦叢生し徳川將軍鷹狩の處なりしが、承應三年徳川家綱之を松平綱重に與へ海を埋めて別邸となさしめたり、當時甲府濱屋敷又は海手屋敷と稱しぬ。寛文三年更に海を埋めて苑を廣め又殿堂を新營せり、家宣將軍たるや之を西丸用邸とし濱御殿と稱したり、慶應二年に至り海軍奉行之を管理して海軍所としたりしが、明治維新の時之を致せり。明治二年七月延遠館といへる御殿を營まれ外國皇族貴賓を招待する所に宛られ居れり。

宮内省の管轄なり。

▲京橋 京橋川に架せられたる石橋なるが、昔時は此の橋に擬寶珠ありて繩をかけ渡し呪ひをなして行人より金錢を貰ふ者ありしといふ。

▲銀座の址 銀座通り二丁目は即ち銀座の址なりといふ、慶長十七年駿府の銀座を此處に移し、大黒常是幕府の命を享けて貨幣を鑄造したりしが寛政十二年蠣殻町に移りたり。銀座由緒書(安永八年)に曰

銀座之儀 最初於三伏見御取立被レ爲レ成、銀座御役所相立、其餘座人住居地面共、町屋舖四町拜領仕、兩替町と相唱、其後慶長十一年年於三駿府も、町屋舖四町拜領仕、御役所相立伏見と兩所にて銀吹方を被レ爲レ仰付、於三駿府一其旨之御役所相立候町屋敷今以所持仕罷在候、慶長十三申年伏見御役所を京都に御引移被レ爲レ成、京都室町通と烏丸通之間二條より三條迄四町拜領被レ爲レ仰付、

御役所相立、座人住居仕候、慶長十七子年於三江戸一銀座御取立被レ爲レ成、駿府御役所を江戸へ御引移被レ爲レ仰付、通町京橋より南へ銀座一丁目二丁目三丁目四丁目と唱へ申候、於三大阪一は高麗橋筋東一丁目にて町屋敷拜領仕、諸國灰吹銀買集候爲め銀座御役所相立、御用相辨、今以相續仕罷在候、長崎町屋敷拜領仕、銀座御役所相立、異國への御渡銀并長崎御奉行所銀改等之御用相勤候様往古より被レ爲レ仰付一京都より銀見役之者、今以勤番交代仕罷在候。

▲銀座通 二の部及び三の部即ち銀座通り邊の事を煉瓦地と稱するが殊に銀座通りは帝都の代表市街と稱揚せらる。明治五年二月火災ありし時、永く火災の患ひを除かん爲め一時民有地を官に買収して洋式の市店を造築し宇四百五十、戸一千四百三十八を得、之を一等二等、三等に分ち一百万圓を費し七年の後完成したり。依て地所は舊地主一家屋は請求に應じ

て市民に拂下げたりしが遂に今日の繁昌を見るに至れるなりといふ。

▲菊地五山の舊宅 文化文政の頃、市川寛齋、大窪詩佛などの學者と宋詩を唱へて一時頗る名高かりし人なるか、其頃北横町に住居せしといへど今は其跡を止めず。

▲譲の井 桶町にあり。日本橋より京橋にかけては此の井の水に及ぶものなかりしといふ、依て夏の盛りなどには一椀青銅一錢にかへて此の井戸の持主柳屋といへるが非常の金満家になりしといふ傳説もあり。府内備考に曰く、住時有名なる清泉なりしと。

▲狩野屋敷 狩野探幽とて宮内卿法印に叙せられし有名なる畫家にして元和七年、鍛冶橋外に居宅を賜はりて住居せしが、俗に鍛冶橋狩野と稱したり、子孫歴代住居したれども今は跡方もなし。

▲白魚屋敷 徳川家康入國の頃淺草川筋にて初めて白魚を献上したりしより其の例となりて代々白魚を

献上し來りしが、後には京橋の東西二ヶ所に出來せり、即ち水谷町の眞福寺橋邊を東白魚屋敷と稱し、北紺屋町邊を西白魚屋敷と稱したり。享保四年白魚網役十二人の願に依り倉庫を立て、商賈に貸與し全十三年之を屋敷となし以て維新の際迄續きたるなり。白魚橋、白魚河岸の名より起る。

▲竹河岸 昔時は數十戸の竹問屋ありて、數多の青竹連なりて空を凌ぎたりし様は仲々目ざましかりしが今は僅かに數戸の竹問屋あるのみなり、猶千葉より高瀬船及び筏にて京橋川を入り來りし繁昌の頃は一時五萬本の竹を運び入れたる事ありしと。

▲中橋狩野 狩野家の元祖正信より八代安信迄今の中橋廣小路と大鋸町との境に邸宅を構へたる事ありしに依り今猶其名残りて狩野新道等の稱もあり。

▲中橋 昔時本材木町即ち楓川より一條の入堀ありて西外濠に通じ其の通り町に當る所に橋あり之を中橋といへり。寛永元年猿若勘三郎の初めて芝居を

興行せし處にして、今の南箱町邊を元と中の村と言ひたるより中村座と呼び、全九年彌宜町即ち今の堺町に移り入堀は後埋築したり、今の中橋廣小路の地即ち是なり。

▲中橋の待合茶屋 廣小路には元と木戸ありて其の東西の兩角に小川、環菊といふ待合茶屋ありて却々の賑ひなりしが、殊に大山參りの送り歸るさ夏の頃は一入の雑沓を極めたりしといふ。

▲三ツ橋 楓川、京橋川、櫻川の流れ合ふ所に架けたる橋を名づけたるものにて、彈正橋、白魚橋、眞福寺橋の三橋の稱なりしが、眞福寺橋は今なし。彈正橋は戸越橋とも白魚屋敷へ渡したといふ牛の草橋とも稱し、眞福寺橋は眞福寺といへる寺院より縁

起して稱したるものなりと。▲織田有樂齋の宅地跡即ち有樂ヶ原 數寄屋橋外より山下町に至る間、慶長の頃織田有樂齋長益の邸宅ありしといふ。府内備考には數寄屋橋門より元數寄

屋橋二三丁目邊は織田有樂齋長益の第址にして有樂ヶ原と呼ぶとあり、亦江戸名所圖繪には、慶長の頃此の地を織田有樂齋に給はりしが、其の後は空地となりて三四丁程は芝生となり春は摘草夏は池水に涼みなどして、其の頃は林泉の形も残り、殊更櫻楓の二樹多く春秋ともに遠望の地にて寛永の頃迄は折にふれて御遊獵あらせられしとあり。

有樂齋名は長益源五郎と稱す、乃其軒と號す。法名融覺信長公の弟にして茶道を利休居士に受けて一家の風ありし、元和七年に卒す、此の人茶事に長ず、故に宅地は何時ともなく數寄屋を建て置かれし舊跡なればとて後世士人數寄屋の唱を失はずして町の名に呼べりと。

▲祇園會旅所 南傳馬町一丁目と二丁目との間の辻にありたり、本社は神田明神の地にありて毎年六月七日には此の地に神幸ありて全十四日歸興し奉り、却々の賑ひを呈しむたりしといふ。

▲金春屋敷の跡 能役者金春太夫は南金六町の藝者新道邊にありしといふ。金春新道といへる横町今も残り。此の金春太夫は川勝大臣より五十一代も續きたる能役者にして近代は八郎といふ人なり。

▲芝口門址 南金六町即ち今の新橋北詰の地なり、府内備考には寶永七年二月新橋の内新に郭門を設け松平飛騨守、田村下總守をして工役を助けしめ九月に至りて成り之を芝口門といふ、享保九年正月火あり後復造營せずとあり。明治五年街衢修理の折之を廢す。

▲采女ヶ原 采女町邊は以前は采女ヶ原と稱し、乗馬練習場にして小屋掛、講談師、義太夫、其他の軒を並べたるを見たり。明治二年市店を開く。

江戸名所圖繪に曰く、木挽町四丁目より東の方此處に馬場あり常に賑はしく講談師、淨瑠璃の類ひ軒を並べて行人の足を止む、享保九年迄此地に松平采女正定基の屋敷ありしとなり、同年正月晦日火災の

後屋敷は麴町三丁目の裏へ移され同十二年の頃、其の跡へ新に馬場を開かる、といへり、此處の井を采女の井といふ彼の屋敷の用水なり、故に爾か名づくるごあり。

▲采女の井 采女ヶ原にありたる名水なり、新編江戸志に曰く、采女ヶ原の内にて松平采女正居住の時の井戸なり。(采女ヶ原参照)

▲歌舞伎芝居の址 歌舞伎芝居は木挽町五丁目及び六丁目の二ヶ所にありたり。一は正保元年岡村長兵衛官の許を得て木挽町六丁目に劇場を創建し後山村座と稱したりしが、正徳四年三月奥女中江島の事(別項参照)ありて終に廢座申付らる。又一は萬治三年森田太郎兵衛木挽町五丁目に劇場を起し森田座と稱したりしが、天保十三年淺草猿若町三丁目に移る、今の新富座の元祖なりと稱すべきか。東都名所記には左の如き文句あり。歌舞伎芝居は木挽町五丁目にあり今森田勘彌の歌

舞伎芝居綿々として相續す、初めは此所六丁目に山村長太夫といふ名代の狂言座ありて中村市村森田等の芝居を合せて、すべて四座なりしかご正徳四年の頃故ありて此の芝居を止めらる。山村長太夫座は初めは岡村長壽といふ、實子なくして從子幸郎といへるを養ひて子とす二代岡村五郎左工門是なり、後に改名して山村長太夫といふ、是も女子のみありしかば婿とりて相續す。此の時に到りて斷絶せり、此の芝居は正保元年申年に初まるごぞ。東海道名所記に木挽町に喜太夫が淨瑠璃其外異形の物を見するごあれば昔は狂言座の外に見せ物の類ありしなるべし。

▲江島が事 奥女中侍女の艶聞の一つとして今にも傳へられつゝあり、正徳の頃大年寄江島といへるが木挽町の山村座の俳優生島新五郎を買ひたる事露見し、關係者三十餘人は死罪、遠島、追放等の刑に處せられたる大騒動にして之が爲め山村座は終に廢座

となるに至る。當時の刑罰の嚴なるを見るべし。

▲江風山月樓 築地稻葉守別莊の號にして、寛文二年壬寅の春、此處の海汀を埋め土を積み石を疊みて翌年の秋出來上りしといふ。支那洞庭の秋景にも勝れたるものなりと稱せられし程にて風光明媚なりしといふ。今は海軍省用地となりて其面影を止す。

▲肴店 南小田原町は近き頃迄魚店多かりし處にして以前は淋しき町にも拘はらず英國公使館、和蘭ホテル等の大建物のありたる所なり。

▲舊居留地 築地明石町にして慶應三年より明治三十二年に至る間の外國人居留地なり。

▲鐵砲洲 東都名所記に曰く南北に凡そ八丁許りもあるべし傳へいふ寛永の頃井上稻富等大筒の演習をなす所なりと、或は此の出洲の形狀其の器に似たる故なりともいへり。

打出る月は世界の鐵砲洲 半井 ト養 玉のやうにて雲をつんぬく

又續江戸砂子は曰く、築地の内海寄の方なり、寛永の頃井上稻富の兩家大筒の町見を試みし所なり、されど此の地は金城に遠からずとて後に鎌倉由井ヶ濱にて稽古ありしなり、それにより斯く地の名とせしとぞ、此の地は南北凡そ八町ありといふと、今の本港町、新港町、船松町邊の地なり、内高橋附近は廻船入津の所にして諸國の商船集せり。とぞ。

又古老の言には昔時海洲より大砲出でしため鐵砲洲と名づけたりと稱するものあれど、眞疑定がたし。

▲半井ト養の舊宅址 幕府の侍醫にして法眼の位迄上り大和守といはれし人にして牡丹花宵柏の裔にて連歌狂句の名人なりき。住宅は今明石町河岸の地なりといふ。

▲新島原遊廓址 今の新富町一帯の地にして、維新前は膳所藩邸、彦根藩邸、其他の土地なりしが、築地の外國人居留地を開くに當り新に開きたる遊廓にして明治元年之を開きたり。當時は新富町と稱せずを商ひたりといふ。

八重咲町、千歳町、青柳町、初音町、松ヶ枝町、吳竹町、梅ヶ枝町、櫻木町、花園町等の町名なりき。然るに築地互市場の發達充分ならざりしに依り遊廓の繁昌亦思はしからずして明治四年八月新吉原に合併し町名を今の如き新富町と改めたり。

▲八丁堀の七不思議 昔より言ひ傳へられたるものにして、寺ありて墓なし、地藏様ありて地藏尊なし、女湯に刀掛あり、等の二三は明かなれど其他は不明なり、此の女湯に刀掛ありたるは此の邊の十分が雜人と混浴するを嫌ひ女湯に這入りし故にして、それが爲め晝間は女は入湯に來らざりしといふ。

▲紀の國屋文左工門の宅地 本八丁堀三丁目の舊宅跡は材木間屋を營業しむたり、千山亭など、稱したる所にして毎日疊さし七人宛を雇込み客を迎ふるに新らしき筵席を敷換へたりといふ。其の華美を盡せしこと想像せらる。

▲稻荷橋 南八丁堀三丁目より本八丁堀五丁目に架

けられたる橋にして、寛永の頃橋畔に稻荷の祠ありしたため稻荷橋と呼ぶに至りしもの、由なるが、昔は此の橋の際には南北共に屋臺店多く並びて壽司などを商ひたりといふ。

▲組屋敷 岡崎町邊は徳川幕府の八丁堀御役人衆と稱せられたる町奉行附屬の與力同心の邸宅にて二百坪内外の各邸宅には儼然たる表門を構へたり、而して表地面は多く商人に貸與し奥の方へ居宅を設けたるもの由なるが、其の頃燕衫袴に紅總の十手を携へ手先を従へて江戸市中を巡り回したる權柄ある姿は殊の外畏敬せられたるものなりと、亦京橋區の一つの誇りとすに足れり。

▲隨見屋敷 靈岸島新川一の橋の北詰鹽町の邊其の舊地なりといふ。隨見とは河村瑞賢の事なり。

▲御船手屋敷 舊幕の頃三ヶ所ありしといふ。一は新船松町にありて船奉行向井將監持、一は永代橋にありて梶原助左工門持、一は濱大手内にありて室

賀圖書持と三方東京灣に面せるを以て海門を扼する好地なりしを知るべし。明治の初年迄其の俵を變へざりしが、終に町家となり新船松町に將監河岸とて其名ばかりを止め居れり。

▲菅原東海翁の邸宅 靈岸島鹽町にあり寛政年間の儒學者にして殊に憂國の熱誠に富みたる人なりき。此の人は毎朝早起して深呼吸をなし歳々菊花を培ひて毎浴之を帨に包み身體を洗ひたりし故身心共に衰へざりしと言ひ傳ふ。

▲菫島藝者 幕府の頃より今に至るも斷せねど、菫島藝者の名高からざるは此の地、地方商人を多く客となして朝夕に變り來る旅の人の興を助けて三味の音さへも行く水の流れ早くして通がる閑人の遊ぶに適せざるが爲ならんか。

▲鏡山仇討の古跡 農商務省の後即ち木挽町十丁目十四番地は松平周防守の屋敷跡なるが今の主人は林大治郎氏なり。築地川に臨みて樹立茂れる園内に

古池あり、其傍らに徑三尺許りなる四角の井戸あり
中老尾上の召使お初が主の仇、局岩藤を刺し殺し、
血に染みたる懐剣を此の井戸の水にて洗ひしといふ
池に沿いて銀杏の老樹あり、蛇責めをなせし所に
歴然たる刀痕猶存す、其邊りに稻荷の祠あるが、尾
上が岩藤に打据へられたる草履を祀るなりと、こ
は芝居にても演じ居れど、實録として傳ふるもの亦
數多し、月堂見聞録の一節を抜萃し見る事とせむ。
三月廿七日松平周防守奥方に被召仕候 御局澤野
(岩藤)と申し候者、中老に瀧野(尾上)と申す者、
少し無調法有之候に付、御前にて澤野は物申す
度毎、無調法不屈者と殊の外に叱り候、瀧野は詫
まり居り候て黙し居りし處に、御前申されけるは
澤野叱り様餘りに強し。兩人共直に部屋に歸り候
て、瀧野の召使山路(お初)と申す者に瀧野申し付
け候は此の文を母様へ持ちて參り候様にとて相渡
し申し候、山路請取御門外迄出で申し候が、何時

も御文は文箱に入被遺候に何とも内の様子不心
得候故其儘御文を御門外にてひらき見申し候へば
仲の様子書立て一ぶんたちがたき間、御前様にも
被申上候故、自害を致可申候、御いとまごいの
文のよし書さしるし有之候故、山路そんじ候とて
先へは行かす其儘まへの部屋へ通り見申し候へば
屏風を立て其内に自害いたし死して居申され候故
其前に一尺二寸許りの脇差有之其儘血をもぬぐひ
鞆へおさめ死骸をばふとんにて包み、扱て澤野殿
へ參り瀧野事ちとお目にかゝり度き事御座候間
御出被下候やう申し候、參上可申筈に候へど
も、ちと氣にても悪しく臥せり居り申し候とて
何心なく申し候、故直につれだち參り候處を山
路ふところより前の脇差取出し主のかたきをのが
さじと澤野が腹へ押立胸先へさし背まで通して殺
し申し候、周防守右之段御開被遊女にはめづらし
き事と御稱美被遊、瀧野の母へ被仰付山路をば娘

に致し可申候向後何方へも奉公には出し申間敷候
かたづき申し候時は可申出候、望の通りに支度を
も被成下候に被仰付候、澤野三十八、瀧野二十三、
山路年十四、右の趣あま珍らしき事故書付申
候以上。
▲矢の倉址 南小田原町一丁目東海岸の地なり、以
前清水谷町、川口町、水口町等の地なりしが元録十
二年米廩を今の米澤町より此處に移し享保の初めに
之を淺草倉に合併したりといふ。
▲八丁堀 本港町、本八丁堀三丁目の間より起りて
新富町一丁目に至り京橋川楓川を併せて八丁堀と稱
す、又八丁堀を櫻川といふ、紫の一本に寛永年間長
さ八丁の堀を鑿つとあれば、元と外濠に至る迄の稱
なりしなるべし。
▲馬場址 岡崎町一丁目の北部にあり、弘化三年龜
島川の枝堀を埋め安政年中町奉行組の調馬所となし
維新後之を廢したり。

▲赤穂義士の通行地 播州赤穂の浪士四十七人主君
の仇を討たんとて元録十四年十二月十四日、雪を蹴
つて吉良上野介の屋敷を襲ひ首尾能く仇を打ち取り
て大川端を傳ひ永代橋を渡り海岸に沿ふて泉岳寺へ
引きあげの途すがら小田原町より築地へ架する備前
橋に懸りて其の橋の西にある番所に立寄り雪明りの
覺束なさに灯を借らんとしたりしが、此處は暗黒の
番所なればとて、周章狼狽して灯を吹き消ければ、
是より此處を暗黒の番所と稱へ夜中點火せざりしと
いふ。さても義士は本願寺の石堀に沿ふて一の橋を
渡らんとしけるに義士の一人狭間重次衛、かねて眞
宗に歸依せしかば、仇を刺したる鮮血淋漓の槍に一
封の書面と金子五十兩の包を添え回向頼むと堀の外
より境内へ投込み立ち去りたりと、今も同寺の什物
に數へて保存され居れり。扱て一の橋を渡りて松平
周防守邸前を過ぎんとしたれど、狼藉者と稱して門
扉を開かず、止む事を得ず轉じて仙臺橋を渡りしか

ば後々に至りても明けずの門とて開門せざりしといふ。

▲新川 靈岸島新川の沿岸をいふ酒問屋あるを以て古より知らる。

何の木の花とも知らず匂ひかな 芭蕉

▲靈巖島 寛永記に曰く、元年甲子靈巖雄譽上人法力を以て江戸八町堀海上を諸檀那土石を運び集めて陸地に築き、一字を建て靈巖寺と號し世に是を靈巖島といふ萬治二年八月三日公用の地となる。府内備考に曰く、俗に葛島と呼べり。

▲石川島 昔時鑄島と稱せし地にして今に佃島の内なり、府内備考に曰く、此處は昔わづかの洲なりしが、次第に出洲多くなりしかば寛政の初め二年長谷川平藏といへる人(御先手にて盜賊火付改を兼ね)建議して世にある無宿薦被りなごいひて、よる所なく、はてはよからの事しいづるものを皆集めて、この所に居らしめ洲を築立て一島の如くせり。それより

▲佃島 寛永圖に三國島とあり、或は向島とも呼べり相傳へていふ寛永中攝州佃村より移住したる漁人之を拓けり。

名月やこゝ住吉のつくだ島 其角

東都名所記には曰く、鐵砲洲の傍にある孤島をいふ、船松町より船渡ありてこゝに到る、文龜年間江戸の地圖に向島とあり、天正年間、東照大神君遠州濱松の御城にましまし皇都へ上り給ふ時、攝州多田の御廟及び住吉大神宮に詣で給ふ時、神崎川に御舟なかりしに佃村の漁夫獵船をこぎ出して渡し奉りしかば伏見御城にまします時も御膳の魚を奉るべき旨臺命あり、又西國御使などの折からは必ず漁船を以て仕へ奉るべき旨臺命ありしかば大阪兩度の御陣にも軍處の密使或は御膳の魚獵等のこと日々怠りなく仕へ奉りしかば、其後漁人三十四人江戸へ召され慶長年間淺草川御遊獵の時網を引かせ給ひ同十八年八月十日海川漁獵すべき旨免許なし給へり、(安藤

寄場奉行といふものを置かる、その下に從ふものあまたありてこゝを修む、是寛政五年よりはじまり。又傳ふ此島寛永三年舟手衆石川氏を賜ひて世々此處に居り因て石川島の稱あり、寛政四年永田馬場に移り、全島人足寄場となる。維新後は監獄となりしが市ヶ谷監獄成るに及び之を引き拂へり。又本島の古名を森島とも稱す。又東都名所記に曰く、舊名を森島といふよし、江戸の古圖に見たり、又其の圖に記して曰く、此の島一名を鑄島と名く。古へ八幡太郎義家鑄を改めて神體とし八幡宮を勧請す、石川大隅守居住の時は其の庭内にありしが今は鐵砲洲稻荷社内にありといふ、或人曰く、昔獻廟の御時鑄一領を奉りたるに重くして是を持つ者なし、石川氏の祖大力にしてこれを片手に捧げて大樹の御前に披露なしける故に御感賞の餘り此處を宅地に給ふとなり鑄を携へし賞として給ふ所の地なればとて鑄島と名づけたり云々とあり。

石川兩侯の藩邸ありし頃迄は小石川邊に旅宿しゐたりしとなり、然るに寛永年間鐵砲洲の東の干潟百間四方の地を給はり、正保元年二月、漁家を建て並べて本國の佃村の名をとりて即時佃島と名づく、亦白魚を採つて奉るべき旨臺命に依りて毎年十一月より三月迄怠らず奉る、其の間は他の獵を堅く禁せり、猶其後深川八幡宮の前にて明地三千坪を給はりて佃町と名づけられ御菜魚をも奉ることなれり。

此の地は殊に白魚に名代なり冬月の間毎夜漁舟に篝火を燒き四手網を以て是を漁せり、都下おしなべて之を賞す、春に至り二月の末よりは川上に上り彌生の頃子を産す其子秋に至りて七八月の頃江戸海に入るといふ。

▲月島 東京灣内新築の地にして潮干狩、釣魚に適し月夜の逍遙亦頗る宜し、東には茫々たる東京灣を控へ南には海を隔て、品川、愛宕山、濱離宮、臺場等を臨み、晴天には富士を望み其の景亦言ふべから

す。

墓碑一覽

▲爲永春水の墓 築地三丁目西本願寺別院末寺妙善寺にあり。名を貞高といひ狂訓亭と號す又鶴鶴正輔とも稱したり。書店の主人にして青林堂越前屋長次郎といふ、始め式亭の門に入りて三鷹と號し後二世振鷺亭、又故人楚滿人の女に乞ひて二代目楚滿人といひしも、故ありて其の名を返戻し文政十一年春水と改む、天保十三年御公儀より重き御咎を蒙りり著書の絶板を仰せ付られたり。其の時の申渡書左の如し。

神田多町一丁目五郎兵衛店

爲永春水事 長次郎

其方儀繪草紙の類風俗の爲に不相成猥ケ間敷事又は異説を書綴り候作出し候様無用致べき町觸相背

き地本屋共より詔候とて人情本と唱へ候小冊物著作いたし右の内にて婦女の勸善にも可相成と心得遠致不束の事共書顯はし剩さへ遊女放蕩の體を繪入に仕組遣はし手間賃請取の段不埒に付手鎖申付る事。

天保十三年七月十三日歿す時に年五十四。
 ▲二世森羅亭萬象 築地本願寺別院末寺妙延寺にあり戯作者にして通稱を福島屋仁左工門といひ櫻田善右工門町の菓子舖なりき、天保二年七月二十六日歳七十にして歿す。法名を釋玄雲信士といふ。
 ▲間新六の墓 赤穂義士の一人にして本願寺墓地。
 ▲酒井抱一の墓 本願寺墓地にあり、文政十二年歿。
 ▲樋口一葉の墓 明治五年に生れたる明治文壇の女流作家にして、行文流麗誠に真似がたき妙文なり、にこり江、たけくらべ、十三夜等殊に見るべし。明治二十九年二十五歳にして歿す。本願寺墓地に葬る。
 ▲十寸見河東 本願寺別院成勝寺内にあり享保十年

歿す。

- ▲壺瓢軒調和の墓 俳諧師にして正徳五年十月十七日死去、歳七十八、本願寺別院成勝寺にあり。
- ▲探茶庵杉風の墓 俳諧師にして享保十七年六月十三日卒去、本願寺別院成勝寺に葬る。
- ▲細井貞雄の墓 文化十年歿、法照寺にあり。
- ▲小林永濯の墓 妙善寺にあり。
- ▲瀧和亭の墓 明治卅四年歿、久寶寺にあり。
- ▲立羽不角 成勝寺内にあり。

割烹及飲食

京橋區は彼の有名なる新橋の藝妓家を有するを以て附近には従つて高等の料理店を有す。亦京橋區は東京市繁華の中心にして交通の便自由自在なればあつから宴會等の如きも中心點に於て催さるゝといふ次第なれば諸種の料理店、カフェー等を有する亦無

理ならず、今其重なるものを列擧すれば左の如し。

花月樓	割烹	竹川町二十二
新花月	割烹	日吉町
松本樓	割烹	尾張町二の二
新喜樂	料理及待合	築地三丁目
香雪軒	全上	全上
精養軒ホテル	料理及旅館	采女町三十三
伊勢春	割烹	南新堀一の十三
萬安	割烹	木挽町一丁目
高砂	割烹	鎗屋町十三
喜多川樓	割烹	出雲町十二
金六亭	衛生料理	南金六町十五
三益亭	料理	松屋町一の三
三竹	料理	築地一の二十四
おたこ	料理	築地三の十二
時和亭	西洋料理	富島町五
大黒屋	蒲燒	富島町四
八雲館	西洋料理	川口町十七
日進亭	西洋料理	銀座二の十三
京橋ビヤホール	西洋料理	南傳馬町三の十

三橋亭	西洋料理	南鍋町一の三
早川亭	西洋料理及牛鳥	八丁堀仲町九
やっこ	蒲焼	水谷町六
天福	天ぶら	八丁堀仲町十
躍金樓	料理	新富町一の二
緑屋	料理	木挽町九の十二
富貴亭	料理	三十間堀二の六
野田屋	料理	築地三の十五
天金	天ぶら	銀座四丁目
竹葉支店	蒲焼	新富町一の二
やぶ	蕎麥	尾張町新地七
小満津	蒲焼	銀座四の十二
河合	牛肉	鈴木町八
吉川	牛肉	南傳馬町三の八
今廣	牛肉	銀座一の十一
大黒屋	天ぶら	銀座一の九
大黒屋	牛肉	銀座一の七
福壽	蕎麥	南傳馬町一の二
みよし	鳥	新富町五の一
		大川端町二

遊藝娯樂

▲劇場

▲歌舞伎座 木挽町三丁目にあり、明治二十二年故福地源一郎(櫻痴)等の首唱に依りて設立し、千葉勝五郎を座主とし、故市川團十郎、故尾上菊五郎、故市川左團次等の俳優出演したり、明治二十九年株式會社となし今日に至れり、都下の大劇場にして定員一千八百人外に三百人の立見の人を容るゝに足る、座附茶屋に梅林、三洲屋、菊岡、やまと、中村屋、小本、上總屋、さるや、越前屋、武田屋等ありて明治四十三年附屬案内所となりしも大正元年十月に至りて茶屋を全廢す。

歌舞伎芝居(名所舊蹟欄参照)

▲新富座 新富町六丁目にあり萬治三年許可を得て寛文元年木挽町五丁目を開場し桐大藏座の桐尾

布屋	蕎麥	尾張町二の十六
十二月月	汁粉	出雲町四
伊勢新	蒲焼	竹川町四
いろは	牛肉	采女町一
長壽庵	蕎麥	采女町十
今源	牛肉	南新堀一の十
壽鶴亭	鳥料理	尾張町二の九
新松の家	鳥料理	元數寄屋町四の五
若菜	料理	采女町二十七
満久満	料理	木挽町九の十
カフェー新橋	西洋料理	南金六町
カフェーブランタン	西洋料理	日吉町
カフェーライオン	西洋料理	尾張町一丁目
萬華	支那料理	尾張町一丁目
喜多能家	薄茶料理	築地二丁目
カフェーパウリスタ		南鍋町二丁目

上女芝居を出したるを此の座の起原となす。其後森田座と改稱し文化元年河原崎座と改め、天保十三年中村座、市村座と共に淺草區山之宿に移り猿若町三丁目位置したるより其頃猿若三座と稱したり元治元年森田座と復稱し明治元年守田座と改め明治五年現在の地に移り明治八年新富座と改稱し全廿五年深野座、廿六年新富座、全二十九年都座と度々改稱したるが全三十一年再び新富座と改めて今に至りぬ。定員一千六百人、立見三百人を容る。座附茶屋にさるや、みのやあり。

▲寄席

- ▲金澤亭 銀座一丁目十三番地
- ▲銀座亭 銀座四丁目十一番地
- ▲新橋演藝館 竹川町
- ▲山村亭 南鍛冶町十八番地
- ▲惠寶亭 南傳馬町三の四
- ▲祇園亭 南傳馬町一丁目六番地
- ▲青柳亭 築地二丁目三十番地

- ▲朝田亭 八丁堀仲町
- ▲大ろじ亭 八丁堀仲町
- ▲吾妻亭 富島町七番地
- ▲月島亭 新佃西町一丁目五番地

▲活動寫眞

▲第一福寶館 具足町にあり、明治四十三年の開館なり年中無休館日曜祭日及土曜日は午後一時より。

▲俳優

- 本区内に居住する俳優の重なる者左の如し。
- ▲中村歌右衛門 築地三丁目十五番地
- ▲市村羽左工門 築地一丁目十五番地
- ▲尾上松助 築地一丁目二番地
- ▲堀越福三郎 築地二丁目
- ▲市川翠扇姉妹 築地二丁目
- ▲森田勘彌 銀座二丁目十番地

▲新橋藝妓

新橋藝妓の名は日本到る所之を知らざるものなし、誠に新橋藝妓ありて都の空に色彩

柳枝	堀田 やゑ	宗十郎六
小たね	辻堂 つね	竹川町十六
つさ	田中 らく	三十間堀三ノ六
龜太郎	岡田 タカ	出雲十三
關奴	關根 ナカ	南金六町四
濱千代	橋本 はま	日吉町一四
小どり	田中 すゑ	南金六町三
みね子	吉田 つや	竹川町一八
八重葉	上原 たけ	丸屋町四
光次	成田 ゆき	竹川町二二
かの子	宇田川たま	日吉町一九
三助	荒井 ふじ	同一七
ふじ子	米倉 ふみ	南金六町一
かつら	落合 すゑ	八官町二
竹千代	中村 エイ	南鍋町二ノ四
染助	高林 光	日吉町一八
梅幸	星野アクリ	竹川町二二
花壽	町田 きん	山城五
ゆり子	藤田 マチ	新富町五ノ五
竹子	鈴木 たけ	南新堀一ノ一
		長谷川あぐ
		齋藤 はつ
		高野權次郎
		坂本 ため
		服部 たつ
		吉川 きぬ
		淺岡 エイ
		宇田川テル
		西村 つや
		徳永 マヨ
		木村 なか
		太田 テル
		高林 煇橘
		蛭間 テフ

を生し居れるが如き觀あり、眞に是れ繁昌の一つと言はざるべからず、今其の藝妓名、本名等を示せば大略左の如し。

▲一等藝妓

藝名	本名	住所	抱主
喜代次	鈴木 千代	南金六町十五	
ふゆ次	小野寺ふゆ	竹川町十八	
吉次	山田 いち	日吉町一六	渡邊 きみ
梅勇	春日 ふさ	加賀町一七	
子	柴田 すゑ	日吉十	
鳥子	和久本きよ	南鍋町二ノ八	
小茂代	阿部 モヨ	三十間三ノ十八	
丸子	丸山 たか	南金六町八	

▲二等藝妓

藝名	本名	住所	抱主
富勇	田中 ちづ	南金六町十二	
筆香	大野 フデ		小林 みね
ふき	山村 ナカ	南佐柄木二	

若奴	小西 玉子	加賀五	錦織 カツ
八	清水 登美	南八丁堀二廿三	増田 みつ
鈴千代	大澤 しげ	瀧山一	阿部 やゑ
菊香	山崎 さだ	宗十郎五	
宗六	鈴木 りう	山城四	山本 ゆき
勝勇	松山 ひで	新富二ノ二	齋藤 アイ
利根子	西村 いと	山城四	西村 タメ
榮龍	伊藤 りつ	南金六町一四	伊藤 さく
もみじ	青木 すゑ	同一	沼田榮太郎
壽桃	吉澤 ひで	日吉町十五	溝口 すえ
木の子	青山 はな	同五	淺井 はな
小豆	渡邊 さと	南新堀一ノ一	長谷川あぐ
玉松	根本 ごとく	日吉八	保坂 ゆき
米葉	真砂 八重	丸屋五	高砂 たま
るい	松坂 つき	卅間堀三ノ十四	
福之助	川崎しすへ	加賀五	錦織 カツ
しげ松	矢地 しげ	八官二二	
いち子	西川 とも	日吉一〇	竹村 つけ
つゆ子	三木 あさ	南金六町八	丸山 たか
くめ子	田中 こと	三十間三ノ四	松坂 つき

静江	笠木	静子	南金六町四
小ふく	福地	フミ	全十四
小妻	山田	マツ	南新堀一ノ一
まさ	轟	はん	木挽一ノ一五
小なる	小枚	薫	新富五ノ十六
あさひ	竹内	つね	加賀六
梅奴	田口	よし	新富二ノ四
金駒	中村	よね	竹川十
若やな	早川	ハナ	南金六町十一
夏池	中村	光	瀧山一
なつ	中村	はつ	全一
はま	野原	ハル	山城四
長吉	水谷	しやう	日吉十
小そよ	加藤	よし	日吉十
大吉郎	稻葉	なつ	惣十郎一三
藤千代	島等	梅	出雲町一三
蝶々	沼田	はつ	日吉町十
和光	水谷	つま	加賀十六
君龍	廣瀬	もん	新富三ノ四
玉勇	鈴木	フク	加賀一五
			波木井惣兵衛
			佐藤 壽満

ひろ	永井	フク	山下一九	永井	フク
ふく	永井	タカ	全一九	全	
松香	廣川	マサ	全一九	廣川	マサ
なみ香	石山	いし	全一九	全	
小ゑん	武藤	たつゑ	南鍋町二ノ四	谷田	ハン
清はな	小川	セイ	竹川十	湯川	ミツ
タカ壽	熊澤	しげ	富島九	多田	アイ
住江	今井	ミツ	八官一七	佐藤	菊藏
しげ葉	吉田	すゑ	惣十郎一六	栗原	タマ
花乃	吉見	ゆき	全八	酒井	三之助
小い代	小野	フサ	全五	柚木	みつ
喜た榮	上田	喜たゑ	加賀六	池田	モム
竹太郎	石井	龜久ゑ	南金六町一四	田中	まつ
こんぼ	林	とし	新富四ノ七	内田	さん
榮龍	國友	イチ	南八丁堀二ノ廿八	國友	カメ
すみ子	三浦	タケ	新富二ノ三	花井	ナヲ
八百子	中野	ナツ	南八丁堀二ノ廿三	増田	ミツ
きの子	佐藤	かん	南八丁堀二ノ廿二	齋藤	キヨ
玉若	吉川	キヨ	八官十六	小野	カネ
小みね	山城	てい	山城五	全	上

小みき	根本	やえ	全
梅太	高橋	はな	濱町二
君香	相場	いと	日吉三
花吉	西山	あく	山城九
花菊	大井	綱	卅間堀三ノ五
光三	長谷川	みつ	卅間堀三ノ六
光江	野村	ゆき	日吉一六
駒千代	蕪木	はる	山城五
勝美	松本	イネ	出雲一
君雄	濱口	まつ	南鍋二ノ十三
三すじ	菅野	こせい	南金六町一四
半龍	小波	シマ	南金六町一四
とも	荒井	てう	日吉一五
小つち	矢澤	多賀	全一八
はさ子	鞍川	ひね	山城九
さゝ奴	高瀬	イワ	卅間堀三ノ六
みさじ	服部	チイ	南金六町一四
平作	高瀬	トモ	卅間堀三ノ六
甚太	井上	タイ	南鍋二ノ一四
千松	上野	シゲ	新富六ノ七
			野中 なつ

藤江	宮本	俊	全五ノ五	坂倉	チヨ
みや子	戸井	やす	濱四		
三平	戸田	タツ	丸屋五		
君菊	青木	ますを	加賀一三	勝山	ミツ
高子	鈴木	たか	新富五ノ八	倉田	マサ
花駒	山口	きん	南金六町一五		
いさを	西川	じゆう	山下二〇	土岐	いま
桃龍	田中	きん	丸屋五	小山	はま
その若	永瀬	幾く	南金六町一四		
桑子	三田	はな	全一四		
鈴代	澤地	やゑ	全一四		
きよ丸	原木	多か老	全一四		
ゑん子	佐藤	よね	日吉一五	大林	セン
金彌	今井	とき	新富二ノ二	鈴木	はな
小染	田邊	まつ	南新堀一ノ一		
元枝	椎谷	まさ	南鍋二ノ一五		
辰子	伊豆村	はな	日吉町廿	伊豆村	かつ
八重三	立馬	クニヨ	南金六町一五	嶋田	サワ
里丸	市村	キタ	八官八	大高	すゞ
条次	信田	はつ	全	澤梅	いね

ほん丸	刀根川	日吉六	和田	ツナ
小花	大久保	竹川四	西川	幸吉
し喜	水野	山下廿	丸島	らく
小千	高橋	卅間堀三二五	瀧川	京
いろ子	丸島	山下廿	丸島	らく
なみ子	吉井	南鍋二ノ六	小林	きく
文福	杉浦	日吉十八	高林	煽橘
小せい	兒玉	新富五ノ八	倉田	マツ
ゆり香	社本	八官八	田中	まち
つや壽	山形	八官八	田中	まち
あや龍	野一色	南金六町二	坂本	どめ
濱尾	西郷	日吉一四	佐藤	りい
まさ江	天粕	卅間堀三ノ七	松本	かう
もどめ	川面	惣十郎一四	田中	どう
穂勇	田中	卅間堀三ノ一六	田中	サク
そめ子	望月	新富五ノ一七	加藤	くま
まり子	本多	濱七	中村	喜久
富香	正木	出雲一六	小川	フジ
美代子	青木	惣十郎九		
ひろ香	明石	加賀四		

秀龍	澤田	ヒデ	丸屋五
長八	柿澤	ちやう	新富七ノ二
助八	玉村	きよ	八官一
とさえ	本多	シマ	山城一四
あや壽	山口	むめ	山下廿
はぎ	細井	まつ	山城五
琴菊	山中	はな	南鍋二ノ一四
らん	黒川	タキ	山城五
てる子	鬼頭	照子	卅間堀三ノ六
こい	川本	フミ	富島九
六花	森	タマ	山城五
玉助	竹田	よし	濱七
惠美香	佐藤	かね	山城一〇
芳香	宮澤	きぬ	丸屋四
松雄	石井	かね	南鍋二ノ一四
鶴太	森山	みね	山城一四
八奴	渡邊	文	南八丁堀二廿三
壽美葉	三井	久美緒	南金六町一
			沼田榮太郎

かね松	江原	やま	南金六町一	多々井	その
むら子	鈴木	シヅ	日吉廿	伊豆村	かつ
かきつ	梅林	鑑	南金六町一	多々井	その
たね子	安藤	シエ	日吉八	保坂	ゆき
政勇	園村	喜代	南金六町二	田中	ちつ
一鶴	清水	いと	全一四	田中	まつ
初丸	角川	久尾	南鍋二ノ四	太田	照
鶴松	氣賀澤	すが	富島七	高橋	けい
小たけ	關	こと	新富五ノ五	金田	よし
榮太	小川	いち	山城四	西村	ため
勇花	内藤	きぬ	南金六町二	田中	ちつ
きよ子	田中	たか	新富五ノ五	金田	よし
成太郎	太田	セキ	新富五ノ十六	石山	なつ
せつ子	津田	はる	全五ノ一六	全	
辰龍	川井	ふく	全二ノ三	花井	なを
梨花	張香	坡	南金六町一	黒田	竹
柳色	季桃	香	全	全	
月香	金元	桃	全	全	
緑珠	鄭季	順	全	全	
なきさ	梅田	さん	山城四	大林	幸

竹松	高澤	いく	新富四ノ三	高野	權次郎
乃木子	竹田	つね	南金六町一四	谷田	ハン
たつた	中村	しん	南鍋二ノ四	松本	いと
松太郎	高柳	コマ	新富三ノ一	川島	サン
一奴	森下	ハツ	濱四	鈴木	いと
小勝	羽田野	さわ	富島一	長谷川	辰之助
清香	加藤	ひで	南新堀一ノ一	宗十郎	三
君八	稻垣	タネ	南金六町八	丸山	たか
染千代	田中	こう	卅間堀三ノ二五	小山	はま
玉鶴	山口	かつ	南金六町一四	中村	ミツ
喜の榮	日下部	浦子	出雲一六	鈴木	フジ
こい次	奈良橋	ハナ	山城七	田横	サク
ふね子	清水	ミツ	南金六町一四	浅田	エイ
てる榮	松丸	てう	山城七	大澤	たま
小徳	渡邊	えい	新富五ノ七	森谷	ヨシ
花江	山本	はな	竹川廿二	溝口	すゑ
とさ	三佐尾	タマ	丸屋五		
とわ	石井	ハツ	出雲三		
時勇	福田	ナミ	南金六町十四		
市代	小林	しげ	日吉十五		

峰さく 鎌尾 いね 卅間堀三ノ五 大橋 えつ
 いさ子 小林 いご 南金六町一 沼田榮太郎
 豊さく 丹澤 とも 竹川町廿二 淺岡 エイ
 くめ香 田中 アヤ 日吉二 田中 さく
 染蝶 關山 初 八官十七 佐藤 菊藏
 豆葉 辻 サト 宗十郎十六 栗原 たま
 琴香 柴崎 ツル 八官十六 山本 なか
 てる代 阿部 スッ 南金六町一 徳永 マヨ
 とみ助 淺井 とも 日吉五 淺井 はな
 蝶々 大崎 由 新富四ノ七
 松太郎 井上 ミツ 南鍋二ノ一四 井上 かじ
 壽榮 須原 貞子 惣十郎六 小松 重恭
 豆奴 高松 公子 竹川町九 栗原 きん
 ふみよ 大島 はな 日吉十 竹村 つけ
 あ七 鈴木 ます 出雲二 水橋 タマ
 じん子 上田 クメ 南金六町一四 和田 かよ
 時助 關根 ふく 南金六町一 黒田 たけ
 八千代 阪倉 こう 新富町五ノ五 飯倉 ちよ
 小まん 福島 ツル 日吉三 山田 いち
 川村 千代 濱四 川島 サン

美園 佐々木しげ 八官十三 鈴木 ツル
 竹彌 島田 すゞ 南金六町十四 渡邊 ひろ
 小はぎ 日置 けさ 南金六町四 日置 けさ
 長八 森川 きん 惣十郎三 稻垣 タネ
 春尾 川口 ひめ 日吉町十 竹村 つち
 小さんば 細川きん 惣十郎六 小松 重恭
 ほうじ 林 銕 加賀十二 藤澤竹次郎
 ▲待合及遊船宿 京橋區内には多數の待合あり
 今其の重なるものを擧ぐれば左の如し。
 藤村 藤村 ふく 銀座三の二十六
 柳屋 喜多村巴江 彌左工門町九
 川竹 杉浦 はる 丸屋町五
 和合亭 田邊源次郎 八官町二十五
 晴好亭 山川吉太郎 日吉町一
 小松家 外山 うめ 南金六町十三
 壽々本 岡崎 かめ 銀座二の十四
 植木屋 大沼 とも 三十間堀三の十九
 壽美家 堀内 さだ 出雲町九の河岸
 松の家 黒谷 よね 加賀町十八

絹川 進藤 さぬ 南鍋町二の三
 花岡 千葉 文字 南金六町十五
 櫻井 杉本 京 南金六町十一
 比良岩 平岩 くに 日吉町三
 春日 清水 みよ 南金六町十二
 三河屋 長岡 はま 南金六町十五
 美宇良屋 伏木 はな 山城町十四
 若竹 小林 かま 尾張町二の二十二
 逢坂屋 青木 ちか 山下町十九
 米本 小松 よね 山城町十四
 竹の家 服部 小機 山下町二十二
 福家 名本 ふじ 三十間堀三の四
 石川亭 小川 なを 山下町二十
 辰廼家 間瀬 教祐 南鍋町二の三
 嘉壽美 澤梅 はる 八官町二十二
 月の家 二階堂みつ 南鍋町二の一
 どんぼ 佐川 こと 山下町十四
 榊蝶 川田 てう 山城町五
 濱田家 松田 ふく 丸屋町一
 梅家 加藤 むめ 南鍋町二の十五

野村 野村 かつ 山下町二十二
 白木 石井 いし 八官町十二
 新山崎 藤井 わか 南鍋町一の四
 鈴川 内藤 ごとく 八官町十一
 彌生 荒川 とも 南佐柄木町七
 相生 龜田 秋 南佐柄木町三
 大川 大川 登良 三十間堀三の八
 小原家 小原 いく 山下町二十二
 巴家 飯田ひさの 八官町八
 明月 島田 かく 三十間堀二の五
 鈴村 今村 千代 山城町二十二
 新田中 三浦 こと 三十間堀三の八
 賤の家 清水 すみ 銀座二の九
 島泉 堀田 しま 銀座二の五
 清月 那須市太郎 西豊玉河岸
 満菊 益川 すゑ 丸屋町五
 おらく 野中 らく 銀座三の十九
 つくも 加瀬 たか 尾張町新地十四
 蜂龍 梶田 とも 木挽町七の二
 山口 山口 あか 木挽町九の十六

尾張町△大西錦綾堂 尾張町二丁目。

茶 △松山軒 竹川町。

貸馬車 △築地馬車商會 築地三丁目。

樂器 △共益商社 尾張町△大文字屋 銀座三丁目。

西具洋 △橋本 南大工町△丸屋 尾張町二丁目△三田屋 鎗屋町△小林

紙類 南鍋町△杉田 築地一丁目。 △大刀伊勢屋 南傳馬町三丁目△柏原 南傳馬町一丁目△細川 銀座三丁目。

海產物 △菊屋 銀座二丁目△鯛味噌本舖 銀座尾張町△錫屋 尾張町。

乾靴 △アヲキ 銀座三丁目△鞆繪屋 南傳馬町一丁目。

靴 南傳馬町一丁目。

菓子 △風月堂 南傳馬町二丁目△風月堂 南鍋町二丁目△古月堂 銀座三丁目△松崎せんべい 彌左工門町△龜井堂 南金六町△松月堂 中橋廣小路△青柳 南金六町△榮太樓 木挽町一丁目△三河屋 尾張町△木村屋 銀座四丁目。

洋酒 △三組屋 竹川町△明治屋 銀座二丁目△龜屋 竹川町△大日本ビ

洋傘 △仙女香 南傳馬町三丁目△柏屋 銀座四丁目△小柳 南傳馬町。

足袋 △鷺塚 金六町△石田 金六町。

料 料理 △花月樓 竹川町△松本樓 尾張町△萬安 木挽町一丁目△みどり 南傳馬町一丁目△新喜樂 築地

筆筒 △綿屋 尾張町△海老屋 銀座二丁目△中川屋 南傳馬町二丁目。

金庫 △山田 銀座三丁目。

煙管 △村田 大銀町。

水菓子 △千疋屋 中橋廣小路△万芳 南傳馬町△千疋屋 南金六町。

書籍 △弘文館 南傳馬町一丁目△教文館 銀座三丁目。

銃砲 △大倉組 鎗屋町一。

寫眞 △江木 丸屋町△小島 銀座一丁目。

シャツ △大和屋 銀座

三丁目△香雪軒 築地三丁目△若菜 采女町△萬くま 木挽町九丁目△京橋ビヤホール 南傳馬町三丁目。

文房具 △伊東屋 銀座二丁目△鳩居堂 尾張町一丁目△硯海堂 日吉町△文雅堂 南傳馬町二丁目△英章堂 銀座三丁目△森市商店 南傳馬町一の九。

袋物 △丸屋 南傳馬町三丁目△武田屋 銀座一丁目△佐竹 南金六町△大西白牡丹 南傳馬町△松田白牡丹 尾張町。

吳服 △三上 尾張町。

小間物 △大西白牡丹 南傳馬町二丁目△佐々木商店 銀座一丁目△松田白

化粧品 △大西白牡丹 南傳馬町二丁目△尾張町一丁目△万久 鎗屋町△菊童 常盤町△クラブ洗粉 鍛冶橋外。

天ぶら △天金 銀座四丁目△大新 銀座二丁目。

金ぶら

獸肉

△尾張屋 北紺屋町。

美術 貴金屬

△生秀館 銀座三丁目△天賞堂 尾張町二丁目。

西洋 雜貨

△田屋 銀座一丁目△三枝 銀座三丁目△大津屋 南傳馬町二丁目△玉屋 尾張町新地△大徳 南金六町△關口 南金六町。

洋服

△山崎 銀座四丁目△大民 尾張二丁目△大谷 加賀町△新川 銀座三丁目△西澤 出雲町。

印刷

△瀨味 柳町四△築地活版 築地二丁目。

畜産 病院

△京橋家畜病院 新富町。

評判記

▲玉屋商店 今より二百数十年の昔既に玉屋號を以て現在の地即ち銀座三丁目を開店し、爾來商業を營みつゝありしが維新後測量機械其他各種歐米よりの輸入品漸次に必要あるを察し明治初年各品の販賣を開きて今日に至りたる誠に信用ある老舗にして確實と正直とは此の店が今日の盛大をなしたる原因なりと稱するを得べし。合名會社にして代表者は宮田藤左工門氏なり。

▲仙女香の洋傘 仙女香の名は恐らくは知らざるものなからん、この店は今より二百年以前よりの老舗にして仙女香とは賣藥の名なりしものが遂に其名高きが爲に屋號となり終れるものなりとぞ。洋傘としては恐らく此の店の品に及ぶものなからんか。南傳馬町三丁目角。

報徳銀行

木挽町木挽橋際にあり資本金五十萬圓にして、深川、名古屋、山田、水海道の四ヶ所に支店を有し、亦確實なる銀行なりとの世評高し。

帝國貯蓄銀行

銀座一丁目河岸通りにありて各區に支店を有し誠實なる銀行なり。

銀座の丸八

銀座の丸八といへば、あゝあれかと誰にても知らざるものなき迄に有名なり、此の店は銀座の草分けとも稱すべき古き老舗にして正直と勉強とは他に其の類なく發賣の諸賣藥は世既に定評あり。

京橋看護婦會

西紺屋町八番地にある京橋看護婦會は西里子女史を會長とし三百余名の生徒を有し、東京に於て第一に指を屈せらるゝ信用ある看護婦會なり。

生秀館美術店

銀座三丁目一番地にあり美術品としては先づ指を生秀館に屈せざるを得ず。

第一生命保險相互會社

日本橋區通り三

丁目一番地にありて伯爵柳澤保惠氏を社長とし矢野恒太氏を専務取締役となし大橋新太郎 服部金太郎、日比谷平左工門氏の諸氏を取締役に有する會社にして生命保險會社としては確實なる會社なりといふを得べし。

服部時計店

銀座四丁目にあり、其他は人の能く知れる所なれば喋々せず。

東京田中商會

銀座四丁目十二番地の電車通りにある商會にして商會主は堀江恒三郎氏なり、此の商會は明治の初年に創立せられ現時に至り益々營業を盛大になし來れるもの必竟するに信用の大なるものあるに起因せるものといはずんばあるべからず

東京築地活版製造所

築地二丁目十七番地にあり、活字製造、印刷機械其他活版に必要な器具を製造販賣する所にして築地活版としいへば人の皆知る所なり。

川崎貯蓄銀行

株式會社にして本社は日本橋

檢物町にあり支店は南八丁堀一の七樓橋角にありて營業をなしつゝあるが川崎銀行の名は實業社界に重きを置かれ居る實業機關にして其の信用ある亦知るべきならずや。

▲**太平生命保險株式會社** 築地二丁目十五番地にありて中村靜嘉氏を社長として楠秀太郎氏を専務取締役となし資本金五拾萬圓を有する確實の生命保險會社なり。

▲**アチキ商店** 靴と鞆はアラキに限るとは是れ事實なり店は銀座三丁目角にありて靴と鞆に限りて商ひす世には既に定評ある評判よき老舗なり。

▲**三上吳服店** 尾張町一丁目電車通りにありて中流以上の御客様種を接する有様を見ても如何に其の信用あるかを知らるべし。

▲**万安樓** 料理屋として萬安を知らざるものは耻辱なり。

▲**新橋千正屋** 水菓子としては新橋の千正屋。

▲**離合舎** 銀座三丁目にありて化學機械類販賣を専門とす主任山野國吉氏なり。化學機械類販賣店としては離合舎に増すもの恐らく東京中には他になからん。

▲**菊地仁成堂** 岡崎町一丁目にありて朝より夕に至る迄客の足の絶えたる事なし、疑ふ者あらば先づ其の店頭に立ちて見よ、斯の如く繁昌を極むる店は日本中を鐵の草鞋はきて搜ねるとも他にはなかるべし仁成堂とは生藥店にして堂主は大學卒業の藥劑師菊地芳九氏也。

▲**中山太陽堂** 鍛冶橋外に壯麗なる建物あり名づけて中山太陽堂といふ、彼の有名なるクラブ白粉、クラブ洗粉等の發賣元なり。

▲**ボンビヤン** マッサージクリーム 銀座一丁目佐々木商店より發賣する化粧品にして姫御前達は能く知悉せらるゝ所ならん。

▲**京橋ビヤホール** 京橋際にあり西洋料理店にして既に古き歴史を有す客足常に絶ゆる事なし。

職業と其住所人名一覽 (イロハ順)

醫師、醫院

月島通九丁目八番地
内科小兒科 **稻垣春之助**

南小田原町二丁目二十七番地
内科小兒科 **早阪糸太郎**

木挽町二丁目十一番地電話京橋二二六七
内科花柳病科 **西實之助**

本材木町三の二十四電話京橋九一二
内科小兒科 **戸塚醫院**
院長 戸塚文雄

木挽町一の十一
長生堂醫院

南大工町三番地電話京橋九〇、三〇三
院長醫學博士 **岡田榮吉**

築地二丁目二十五番地
院長 **奥村醫院**
院長 奥村文平

月島通十一丁目五番地
内科小兒科 **笠原基**

尾張町二丁目二十三番地
齒科 **笠井二郎**

大鋸町十三番地
內、外、眼科 鎌田政次郎

南小田原町二丁目十四番地
內科小兒科 加賀美鏡太

本港町河岸一號地
眼科內外科 河越逸記

銀座二丁目十番地電話京橋一七七三
內外科 橫山喜三郎

本材木町三丁目十一番地電話京橋九一六
小兒科 高岡傳次

銀座三丁目十七番地
齒科 高山紀齋

月島西仲通り三丁目
內科小兒科 竹內醫院
院長 竹內靜太郎

松屋町三丁目壹番地
內科外科 建部民男

岡崎町一丁目四十七番地
齒科 中島左一

月島西河岸通二丁目一番地
內外科 中山直道

築地二丁目十六番地
齒科 中村五六

木挽町十丁目四番地
內外科 鵜飼碧汀

南鍋町二丁目三番地電新二二五六
耳鼻咽喉科 葛目猪太郎

月島通二丁目二番地電京一八五
內外科 栗田醫院

炭町十番地
內外科 山村啓吉

木挽町三丁目十二番地
齒科 山中秀吉

新築町四丁目三番地電京橋一〇六四
皮膚病外科 山形醫院
院長 山形熊次郎

銀座四丁目十七番地
內科 高田群司

因幡町一番地
內科 土屋貞三

入船町四丁目五番地
內科 長谷川爲次郎

南鞘町十九番地
內科 小田部家貞

西紺屋町四番地
內科小兒科 黑河內金八

新富町一丁目六番地電話京橋二二三二
內科 黑澤醫院
院長 黑澤芬

山下町十八番地
齒科 山村棟次郎

内科
本材木町三丁目九番地電話京橋三〇九九番
澤 弋

内科
南鍛冶町十四番地白牡丹横町
北村 醫院
院長 北村 正雄

内外科
南鍋町二丁目五番地
正七位 平 島 熊次

鈴木町十二番地
精光堂齒科醫院

齒科
南傳馬町一丁目十八番地
杉原 清太郎

齒科
本湊町一丁目廿五番地
保齡堂齒科醫院

内外科
木挽町二丁目十三番地
淺野 忠良

内科婦人科
柳町二番地
秋 元 龍珠

内科
壘町五番地
醫學士 安藤勝四郎

内外科
八丁堀岡崎町二丁目四番地
八丁堀 醫院
院長 坂本 三平

内科小兒科
南小田原町二丁目十二番地
佐藤 達太郎

内科小兒科
松川町二番地
木村 醫院
院長 木村 助三郎

胃腸病
呼吸器科
南新堀二丁目三番地
山野 井織治

内外科
中橋泉町二番地電話京橋一三六三
松本 章太

内外科
本八丁堀五ノ十
深澤 五策

内科小兒科
大鋸町十三番地
福井 勝太郎

齒科
新築町三丁目一番地
保壽堂 醫院
院長 藤倉 要藏

内科小兒科
新築町四丁目二番地
蘆部 恭之助

内外科
岡崎町一丁目四十八番地
菊地 四郎

内科小兒科
築地二丁目十六番地
共立築地 醫院
科眼科花柳病科

内科小兒科
木挽町十丁目十一番地
三田 弘

義齒
入船町六丁目一番地
彦田 友二郎

胃腸病科
采女町二十五番地
鈴木 主計

内科小兒科
築地一丁目七番地 電話京橋三、〇六六番
鈴木 太一郎
京都醫學士

木挽町十丁目二番地
内外科 鈴木文之

糸商

東港町一の十五
麻芋 麻糸 萬屋號
麻細工品々々 伊藤三次
網用綿糸品々

印刷業

柳町四番地 電話京橋二七七番
諸官省陸軍御
用達和洋紙類
印刷製本業 瀨味健二

築地二丁目五番地
印刷業 藪崎芳次郎

南鍋町一丁目八番地
蠟燭油問屋 井池慶次郎

船業

四日市町十六番地電話京橋一三七七番
船業 大澤傳吉

賣藥商

南旗町十六番地 振替口座東京四〇九六番
浣胸散發賣元
諸賣藥化粧品 美馬直助支店

墨町十七番地 電話京橋二二五〇番
和洋藥品内外
煙草化粧品雜貨
諸官省御用達 染谷全治堂藥舖

月島西仲通二丁目二番地
石版活版其他 根橋榮一郎
各種印刷業

南大工町十一番地
活版石版 三功舎杉原直治
印刷業

生花

築地二丁目二十四番地
生花教授職 石田是心軒

蠟燭製造業

桶町十八番地
蠟燭製造業 輕部櫻

南鍛冶町 電話京橋二五八六番
商處方調劑 十字藥館森藥局
藥品販賣 藥劑師 森 藤吉

因幡町十八番地 電話京橋二三一〇番
賣藥商 盛大堂藥局
藥劑師 小野澤梅吉

月島 電話京橋八五五番
賣藥行商 生盛藥館本部

中橋和泉町一番地 振替東京二〇六七番
女月丸カブリ
ン大學淋藥複 小宮愛生堂本舖
方大學淋藥

墨町一番地
元祖痔退 小松盛林堂
賣藥營業 小松喜一郎

南鍛冶町十番地
賣藥業 毛利周藏

藥種商 南小田原町二丁目十九番地
石黒伊吉

藥種商 木挽町一丁目
山田安山堂

諸製劑卸業 本港町四番地
森田米治

精錡水本舖 銀座二丁目 電話京橋六一五番
岸田吟香

信盛堂 月島西仲通り一丁目八番地
伊藤藥館

タイガー商會 築地二丁目拾壹番地
滋強丸本舖 政治雜誌新世界
吉永良延
電話京橋二〇七六番

合資會社 銀座二丁目十四番地
黒田藥品商會
電話長京橋二六七三番

賣藥 木挽町一丁目谷方
酒井榮太郎

賣買取扱業 柳町十番地 電話京橋一八九五番
渡邊長吉

土地建物賣買取扱 月島通五丁目十番地
田屋
小川清五郎

麵麩製造業 各種製造販賣
田屋

錦繪商

古代錦繪 五郎兵衛町七番地電話京橋二四四一番
新木版畫商 **渡邊庄三郎**

帽子商

帽子雜貨製造卸商 具足町九番地 電話京橋一六六四番
角田六造

帽子製造業 銀座一丁目二十三番地
森福吉

帆天幕商

一四二

南小田原町三丁目九番地
食麵麩及諸沸騰水サイダー
製造販賣 **チヤリ合名會社**
電話京橋一四二三番

パンの元祖 銀座四丁目十一番地
木村屋總本店
木村儀四郎

俳優

俳優 銀座二丁目十番地
守田好作

人相見

人相見 銀座二丁目十番地
本國堂

船松町十一番地 電話京橋二〇一三番
帆天幕製造業 片桐貞盛

卸商

松川町四番地
小萩金吉

北横町十一番地
卸商 西出勘次郎

南傳馬町二丁目三番地
卸商 岡田吉次郎
電話京橋一四一六番

貿易商

新港町五丁目一番地
南洋貿易商 清水一

電話京橋二二三二番

築地二丁目六番地
貿易雜貨商 西川忠亮

銀座二丁目十二番地
貿易商 米井商店

辯護士、辨理士

築地三丁目十一番地
辯護士 清水市太郎

築地三丁目九番地
辯護士 八束可海

本八丁堀二丁目一番地
辯護士 近藤孝義

本材木町三丁目十七番地
辯護士 赤松乙也

南八丁堀二丁目
辯護士 中川秀爾

具足町三番地
辯護士 品川英一

入船町五丁目一番地
辯護士 古屋愿三

新富町四丁目三番地
辯護士 梅原錦三郎

新富町五丁目十四番地
辯護士 飯島農夫雄

中橋和泉町四番地
辯護士 伊藤和三郎

大鋸町十四番地 電話京橋二五六八番
特許辨理士 吉田三市郎

●紺屋町九番地
辯護士 小島金太郎

築地二丁目十四番地
辯護士 鹽入太輔

采女町二十七番地
特許辨理士 木戸傳

木挽町十丁目五番地
特許辨理士 中川津平

疊町十一番地 電話京橋二八五二番
辯護士 星野春吉事務所

山下町八番地
辯護士 東兵右衛門

築地二丁目五番地
辯護士 阪本生成

三十間堀三丁目一番地
辯護士 芹澤孝太郎

弓町十七 電話京橋七二五番
辯護士 長澤越一郎

米穀商

木挽町一丁目十一番地
米穀商 山崎丑藏
電話京橋二二〇七番

本八丁堀四丁目七番地
米穀商 黑岩萬吉
電話京橋二八六五番

北紺屋町十番地
米穀商 小松彌太郎

五郎兵衛町六番地
米穀商 寺田金次郎

中橋和泉町三番地
雜穀乾物商 黑田和平

土木建築業

築地一丁目九番地
土木建築業 長谷川源次郎

月島西仲通り四丁目九番地
土木請負業 橋本馬五郎

月島西仲通り一丁目三番地
土木請負業 春日井増太郎

月島西仲通り一丁目五番地
土木建築業 和田新
電話京橋二八五四番

月島通り拾壹丁目四番地
土木建築業 河江宇之丞
請負業

南本郷町二番地
白米商 松岡庄太郎

大鋸町十番地 電話本局八八二番
米穀商 尾後貫朝五郎

靈岸島鹽町十六番地
白米商 荒谷權七

富島町一番地 電話京橋一四五五番
米穀商 瀧田榮三郎

大川端町稻荷河岸三號地
製米商 齋藤商店
長電話京橋二九八番

四日市町十八番地永代橋際
白米兼 沿海州漁業 杉山石五郎

土木建築
請業

島通十丁目五番地

木村信助

建築業

本八丁堀二丁目壹番地

牧田吉右衛門

建築請負業

月島通り二丁目十一番地

吉清豊吉

電話京橋七一五番

請負業

五郎兵衛町十三番地

山形巳之次郎

電話京橋一六八八番

土木業鹿島組

北横町十六番地

山田岩吉

木舞請負業

月島通り一丁目六番地

丸川萬次郎

土木請負業

元島町一番地

松浦銀次郎

土木請負業

松屋町一丁目四番地

小林留吉

土木建築請負

新富町一丁目四番地

竹田源次郎

電話京橋九百十五番

土木建築請負

本八丁堀三丁目一番地

中野工業部

特長電話京橋七三八番

陶磁器商

京都産陶磁器
製造販賣

大鋸町(東仲通り)長電話京橋四五二番

平岡萬珠堂支店

清國製品陶器
雜貨賣舖

北横町十六番地 電話京橋一八八八番

田中士調堂

千切屋

山下町十番地 電話新橋二八二四番

西村總左衛門東京店

陶磁器販賣

銀座二丁目六番地

川本秀雄

土砂商

土砂販賣業

月島西河岸通り一丁目一番地

高橋福太

時計小間物店

時計小間物商

南小田原町二丁目十番地

小山鐵太郎

時計及
美術品商

銀座壹丁目七番地

電話京橋七九三番

竹内時計店

銀座四丁目八番地

服部時計店

諸寶石時計
貴金屬製品

尾張町貳丁目

大西錦綾堂

電話新橋一〇四〇番

金銀時計
美術品商

銀座通り尾張町五番地

大勝堂

特電話新橋三〇七〇番

尾張町二丁目十八番地
天賞堂本店

靈岸島四日市町二之橋際
時計眼鏡 中真堂 渡邊重義

鳥肉販賣業

南小田原町二丁目十二番地
鳥肉販賣業 山崎鳥店
電話京橋二六七一番

築地一丁目三番地
諸鳥肉鶏卵 宮川支店

茶商

銀座壹丁目京橋際
茶商 萬屋池田健藏
電話京橋一九八一番

竹材商

八丁堀仲町拾番地
竹材販賣 竹清合資會社
電話京橋二六五番

炭町二番地 電話京橋二二九九番
竹間屋 和泉屋定次郎
山村泰之助

料理店

木挽町九丁目卅二番地
料理店 みどりや 清水せい

月島西仲通り四丁目參番地
西洋料理店 巽清竹

鈴木町八番地 電話京橋一三二三番
蒲燒商 小滿津前田ぬい

八丁堀仲町十一番地
料理店 米村松五郎

新富町一丁目一番地
料理店 竹葉亭 別府金七

築地二丁目三十番地
茶料理 折橋なと

築地三丁目十五番地
割烹新喜樂 伊藤樑太郎

尾張町二丁目二番地
割烹松本樓 小坂梅吉

銀座四丁目十二番地
料理業 小越太次郎

鎗屋町十四番地
西洋料理 清新軒

南新堀一丁目一番地
西洋料理 三孝亭 松本孝吉

南新堀一丁目十四番地
料理店 西田仁吉
電話京橋三二三八番

富島町四番地
鰻蒲燒商 千川清吉

旅館

旅館

木挽町一丁目十一番地

岡本とみこ
電話京橋七九五、七九六番

旅館

木挽町二丁目十三番地

水明館
湊ム

旅館

木挽町二丁目十三番地

江川すゑ

旅館

南横町十九番地

城東館
大野サダ

旅館

五郎兵衛町廿三番地

小林易太郎
電話京橋一四三八、三三〇八番

旅館

元數寄屋町二丁目九番地

龜岡豊二
電話新橋一二九九番

旅館 築地一丁目五番地
旅館 六方館 梅原しほ

一五〇

旅館 富島町四番地
江尻雄次

塗物商

南八丁堀二丁目五番地

塗物商 渡邊徳次郎

塗料商 五郎兵衛町十九番地
エスエ商会

織物商

本材木町三丁目五番地

麻織物及麻系販賣 大商店
電話京橋一〇七九番

銀座二丁目十番地

毛織物商 青山收次郎

銀座一丁目五番地 電話京橋九二番

敷物室内裝飾用織物問屋 富澤米四郎

音樂師

木挽町九丁目廿番地

長唄音樂師 石原廣吉

金物建築材料商

月島西河岸通り三丁目八番地

リベットボール
建築金物船金進士安太郎
物其他火作物一切

豊町十七番地 電話京橋一三二六番

歐風建築 金物商 高橋常吉

鈴木町七番地 電話京橋四三六二番

金物商 齋藤商店
店主 齋藤長八郎

月島通り二丁目七番地

和洋金床礎製造販賣元 河合商店
ネハガ 稲垣末吉

月島通り一丁目四番地

銅鐵鋼商 森谷利三郎商店

月島通り一丁目六番地

建築金物諸機械
附屬ボルト、ワッパ、
ソルト、パット、
ンダ其他古銅鐵商
森野商店

一五一

金物商

松屋町一丁目
鈴木彌兵衛
電話京橋五八〇 特長五八一番

萬金物商

月島西仲通り四丁目二番地
野口巳之助

金物商

本材木町三丁目三番地
大野宗太郎

和洋建築指物
用材挽立販賣

本材木町三丁目十八番地
郷原四三二
電話京橋一六七二番

銅鐵商

岡崎町一丁目十一番地
加藤藤次郎

製罐商

南鍛冶町一番地 電話京橋二二二番
樋口勇藏

紙商

諸紙和洋
帳簿業

月島西仲通り四丁目壹番地
羽田庄之助

紙油雜貨商

鈴木町八番地
石井藤兵衛

紙兩換商

幸町六番地 電話京橋一六九二番
堀口貞兵衛

名刺紙商

本材木町三丁目廿九番地
恒本勇助

傘商

金物商

川口町十八番地 電話京橋一七八二番
石渡清之助

家具商

室內家具
製造販賣

築地一丁目十二番地
杉田幸五郎

室內裝飾
洋式家具商

南大工町一番地
田口碩次郎

甘藷業

靈岸島川口町 電話京橋一四六三番
甘藷問屋 古川備三

傘履物商

大根河岸 電話京橋一七四五番
長谷川屋 市橋孝吉

傘桐油澁紙
問屋

中橋大鋸町七番地 電話京橋二六三六番
伏見屋商店
店主 山木茂助

傘專業

東仲通り南鞘町廿一番地
武市商店
電話京橋二四二番

洋傘硝子鏡
額面商

月島西仲通り二丁目一番地
野口寅造

眼鏡商

眼鏡商

銀座一丁目九番地
金田庄吉
電話京橋二二九二番
一五三

額看板商

東仲通り柳町一番地
御額看板師 **東洋館本店**
營業主任 宮高

罐詰商

南八丁堀二丁目
バタ各種罐詰
問屋銅鑼製 **小牧榮助本店**
金庫製造販賣 電話京橋二七七一番

樂器商

因幡町五番地南傳馬町電車停留所
下車東へ入る
樂器店 **須賀國太郎**

菓子商

南傳馬町三丁目一番地
菓子商 **木村五郎**

南鞘町廿一番地 電話京橋八八二番
菓子商 **縫月堂**
菱田松之助

中橋和泉町 電話京橋八七八番
菓子舖 **春月堂**
春本勝次郎

南鍋町二丁目三番地
風月堂 **米津恒次郎**

加賀町一番地 電話新橋二八五七番
京都菓子 **菊壽園**
大内饅頭

竹川町十四番地
樂器店 **共益商社** 京東支店

出雲町三番地
ピアノ及金物輸入商 **森商店**

看護婦會

西紺屋町八番地
京橋看護婦會 **西里**

本材木町三の十七 電話京橋三六九番
木挽町二の七
產婆 **東洋看護婦會**
木戸千賀

廣瀬看護婦會

川口町九番地
梅花亭

中村國平

入船町六丁目一番地
西洋菓子商 **櫻井六兵衛**
電話京橋一四二八番

南八丁堀二丁目十三番地
菓子商 **山口淺吉**

尾張町二丁目二十番地
西洋菓子製造販賣 **大竹忠次郎**

築地二丁目三十一番地
食麵飽並和洋菓龜屋 **熊次郎**
子製造西洋料理 電話京橋一六一三番

鈴木町八番地
菓子舖 **夏月堂**
福田春吉

硝子商

銀座一丁目十三番地

コルク金具
硝子壘及壘
詰用品卸商

増田鐵次郎

長電話京橋一〇〇六番

銀座通り尾張町

洋食器ラ
ン
ブ類硝子器
輸入製造

木村新太郎

電話新橋一三四番

髮結業

京橋區惣十郎町

女髮結

桑島千代

玩具店

一五六

内外教育玩具
金太郎商店 田中安太郎

銀座四丁目十三番地

洋服毛織物商

北橋町十九番地

電話京橋二八七七番

洋服各毛織物
裁縫商

小林仙之助

洋服店

新富町三丁目七番地

福田屋洋服店

洋服裁縫店

本八丁堀二丁目壹番地

永井榮盛

洋服店

南傳馬町二丁目四番地

米吉善太郎

五郎兵衛町九番地

新古洋服
卸小賣店

江間松五郎

銀座四丁目

洋服店

新川傳次郎

銀座二丁目六番地

洋服及羅紗商

柴田光之助

銀座四丁目九番地

洋服裁縫店

山崎末吉商店

尾張町二丁目廿五番地

大民洋服店

電話新橋一七九番

南傳馬町三丁目九番地

婦人洋服一切
鈴木木商店

電話京橋一五九七番

東港町二丁目二番地

洋服商

上原幸太郎

電話京橋二一五八番

川口町廿二番地

古洋服商

小島秀太郎

洋品店

月島西仲通り三丁目六番地

洋品雜貨商

正直屋洋品店

銀座一丁目五番地

洋品商

田屋洋品舖

銀座一丁目拾壹番地

洋品商

瀧口洋品店

電話京橋一五二四番

一五七

南金六町一番地
關口洋品店
電話新橋二九〇二番

寄席

南傳馬町三丁目三番地
寄席業 **櫻井長四郎**

南傳馬町一丁目十六番地
寄席業 **祇園亭**
田中善四郎

月島西仲通り三丁目八番地
寄席業 **築島亭**
大橋幾太郎

簞笥商

金六町一番地
簞笥商 **鷺塚清二郎**

水谷町五番地 電話京橋一六七三番
簞笥商 **武藏屋**
石田簞笥店

炭町五番地 電話長京橋二〇五番
簞笥商 **角一屋簞笥店**
小林清次郎

水谷町五番地 電話京橋一八一三番
簞笥商 **大坂屋簞笥店**

松屋町二丁目四番地
簞笥商 **沖田三之助**
電話京橋二二三番

代辨業

五郎兵衛町十三番地
代辨業 **三井峰二郎**

足袋商

銀座二丁目五番地 電話京橋五二八番
足袋商 **海老屋足袋店**

煙草商

銀座一丁目四番地
煙草小賣商 **千葉直五郎**

銀座四丁目十番地
輸入煙草商 **出頭商店**

染物商

松屋町二丁目三番地
染物商 **深井柳太郎**

木挽町三丁目九番地
染物悉皆商 **鈴木寅次郎**

木挽町二丁目十三番地 電話架話中
美術京都染物 皆 **泉屋東京支店**
佐野吉次郎

そば

銀座四丁目拾二番地
蕎麦そば **堀田貞次郎**

漬物商

因幡町一番地

漬物商 中村正次郎

八丁堀幸町六番地

漬物商 相模屋伊兵衛

石塚伊兵衛

本材木町三丁目十一番地 電話京橋七五番
宮内省陸海軍御用達
漬物食料品罐詰問屋
保萬齡漬製造發賣元
川村本店
川村與兵衛

釣具商

南傳馬町二丁目

本みすや

縫針釣具問屋 鈴木金三郎

繩蔴商

一六〇

川口町十七 電話京橋二一八二番

粽柁繩、繩蔴、問屋 野口太吉

仲立業

東港町二丁目廿二番地

仲立業 大久保清太郎

洋燈商

月島西仲通り三丁目三番地

洋燈油商 脇田沖太郎

羅紗商

銀座一丁目 電話京橋一一二九番

羅紗商 小山羅紗店

銀座三丁目三番地

羅紗商 近藤幸太郎
電話京橋一五八一番

運送店

南八丁堀三丁目五番地 電話京橋一五四六番

海陸運送店 原田清造

海運業

南新堀二丁目五番地

德岡祐三郎

電話京橋九五四番

扇子團扇商

松川町五番地(東仲通り)

御說扇子商 丸壽商店
團扇小間紙 中村壽平

海苔商

一六一

海苔商 南傳馬町二丁目七番地 電話特京橋三三番

山形屋 窪田商店

海產物商 築地二丁目廿五番地 粉山半三郎

海草寒天商 東港町一丁目廿二番地 西宮利七

櫛商

黃楊櫛商 柳町十番地 橋村伊兵衛

靴商

靴附屬品商 柳町五番地 大和眞太郎

日本屋製靴店 藤田貫一

マツサージ業

鍼灸科 鈴木清三郎 電話新橋二九一四番

待合

木挽町十丁目十五番地 日方やめの

待合 木挽町十丁目十番地 花谷とく

待合 木挽一丁目三番地 井筒 東千代

待合 山下町十九番地 青木春吉

待合 山下町廿二番地 峰田定五郎 電話新橋一八九一

待合 南金六町一番地 春日

待合 三十間堀三丁目三番地 松し

待合 南金六町十一番地 櫻井京

鶏卵商

鶏卵商 月島西仲通り四丁目貳番地 片岡商店

鶏卵商 疊町十一番地 板倉屋本店 電話京橋一六〇七番

化粧品商

化粧品製造卸商 南鍛冶町十二番地 振替口座東京三三八番 錦粧堂 蓮池六藏

化粧品店
月島西仲通四丁目一番地
大海堂
田中正雄

しらす本舗
南新堀二丁目一番地
ねりおしろい
野村辰吉

下駄商

下駄商
月島西仲通り三丁目五番地
丹羽柳之助

下駄商
本八丁堀三丁目七番地
松丸菊次郎

教會及神社

八丁堀仲八番地
金光教京橋教會所

月島西河岸通五丁目三番地
浄土宗西山派東海中出現觀音道場
京總教會所主任 **黒川大心**

新佃島西町二丁目七番地
天文教導職 **街田凌胡**

月島西仲通り四丁目七番地
大講議一心 **御嶽山一心** 千勝講社
千勝教會 **青木意志**

月島通り二丁目八番地
金光教月島小教會所

日比谷河岸通拾七號地
日比谷神社 中教正 **小栗直亮**

卜筮
松屋町二丁目五番地
帝教院

劍道指南

新富町四丁目七番地
劍道指南 **震武館**
館主 中村仙次郎

月島西仲通り三丁目十二番地
扱心流 柔術教師 **井浦秀吉**

新榮町二丁目二十三番地
天神眞揚流 柔術教師 **弘武館**
館主 谷 鑛 馬

桶町十四番地
柔術家 **研力武武館**
館主 吉

文房具

南傳馬町一丁目九番地
文房具商 **森市兵衛**
電話京橋一六一〇番

南箱町七番地
文房具商 **大澤政次郎**

北横町十三番地 電話特長京橋五三番
文毛商 **紀伊國屋**
福井菊三郎

佛具商

因幡町角(東仲通り)電話京橋一八三四
神佛具一式 製作販賣 **赤澤本** 店
赤澤朝次郎 一六五

船具商

東湊町一丁目十番地
大村 五左衛門

東湊町一丁目
稻垣商店
特電話京橋一三二二番

越前堀一丁目二番地
西洋船具商 串田清三郎
電話京橋二〇八一番

東湊町一丁目十四番地
船具商 大谷芳松

吳服商

南旗町十六番地

吳服商 玉上音松

中橋和泉町壹番地 電話京橋二五四一
越後屋
田村政太郎

南八丁堀二百十四番地
吳服商 山口長七

月島西仲通り四丁目四番地
吳服太物商 北村末吉

銀座三丁目九番地
吳服半多り商 柴崎三之助

南傳馬町二丁目八番地
めりんす商 信盛堂
宮下守太郎

月島西仲通三丁目
太物商 森銀次郎

銀座二丁目四番地
吳服店 越後屋 永井甚右衛門

入船町一丁目一番地
吳服店 平澤政吉

西紺屋町一
合名高島屋 飯田東京店

小間物商

南旗町十七番地
小間物卸商 岡田茂吉

銀座二丁目十一番地
西洋小間物卸商 吉田源三

骨董商

柳町一番地
骨董商 松井清

銀座一丁目二十番地
美術商 河崎覺太郎

木挽町一丁目十五番地
骨董商 網屋小倉 惣右衛門
電話京橋一七二九番

鑛山業